

東京大学 文学部

FACULTY OF LETTERS  
PROSPECTUS

進学ガイダンス

2024



# 進学ガイダンス 2024

**東京大学文学部**

<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/>

# 文学部で「学ぶ」ということ

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

納富 信留

皆さんは、文学部というと、どんな「学び」を想像するでしょうか。文学部は哲学、歴史学、文学、社会学、心理学といった学問領域で、27の専修課程をかかえる研究・教育の場です。対象とするのは、人間や社会や宗教から言語や美術や考古遺物まで、文化にかかわるきわめて広い領域ですが、時代は古代から現代、さらに未来まで、地域も日本やアジアを中心に、ヨーロッパや南北アメリカや中東など、世界の各地に及んでいます。

これほど多様な分野が広がる文学部で、学生はいったい何を学ぶのでしょうか。いや、文学部で学ぶということはいったい何なのでしょう。実は、この問いを考えることも、いや、それを考えることこそが文学部の「学び」なのです。

ここで大学にある他の専門課程と比べてみましょう。資格を身につけることにつながったり、将来仕事に活かす技能や知識を得るような分野はたくさんあります。むしろ、大学とはそのような社会への準備をする教育機関だと思っている人も多いかもしれません。もちろん、そんな知識や技能も大切です、それに向けて勉強することも必要です。しかし、大学の学問というものは、そういった勉強とは区別されるもの、いや、まったく異なるものだと、伝統的に語られてきました。

文学部で従事する学問には、職業や実益に直結するような研究はあまりありません。私が専門としている古代ギリシア哲学は、二千数百年前に地中海地域で展開されたさまざまな思索と議論を、古典ギリシア語やラテン語で読んで考えるという、文字通り古典的な研究です。これまで西洋を中心に積み重ねられてきた膨大な研究蓄積と日々格闘しながら、地道にテキストを読解し議論して論文を書くといった、そんな学問営為です。しかし、単なる趣味に過ぎないのではないかと問われると、それは違うと答えます。文学部の学問研究は、私たち人間のあり方を全体から見つめ直し、そうし

て私たち自身が「人間」としてより善く生きていくための、もっとも根本的でもっとも大切な事柄を日夜考えることだからです。

文学部での学びの目的は、知識や技能の獲得ではありません。そうではなく、学びにおいて私たち自身が変わっていくことです。なにかを学ぶことで、自分が何者であるかが少しずつわかっていく。しかも、他者と対話することで自覚と変容を経験する、共生が目指されています。そこでは、こうして学問をして生きる人間という存在が問われ、したがって「学ぶとは何か」が問われ答えられることになるのです。

これは哲学に限られた事柄ではありません。歴史学では、過去の事実や状況を丹念に調べて考察することで、ある時代や人々の暮らしがどうだったかを知るだけでなく、そうして過去を論じる現在の私たちは何者か、歴史を研究するとは一体どういうことなのか突きつけられます。文学の研究でも、対象とする小説や文学作品を精密に読み解き、豊かな背景や思想や影響などを解釈しながら、そうして文学を読み続ける私たち自身のあり方を見つめていきます。そこで、私とは何かに気づいたり、わからなくなったり、そうした気づきに驚いたりします。それは、哲学や歴史や文学をつうじて私たちが人間としての自己のあり方を発見し、成長していく軌跡です。おそらくそれが、文学部で学ぶという一つの姿なのだと思います。

そして、文学部で学ぶということは、なによりも悦びです。必要のために、社会の期待で勉強するのは違い、文学部の学問は、それぞれの人が、自分の好きな対象やテーマを選んで、そこに没頭し沈潜しつつ、最終的に卒業論文をまとめるというもので、それこそが最高の楽しみなのです。楽しむなかで、自分が実現したい生き方や人間を見つめ、理想の社会像に出会い、自身をそれに近づけていく、それが文学部で皆さんが経験するはずの学問です。

こうして考えていくと、文学部の「学び」は別に文学部に限ったものではなく、大学での学問のすべてが関わり、その根底にあるものであり、さらに世界で私たちが生きていくあらゆる「学び」を支える基盤であると考えられます。

この機会を活かすかどうかは、それぞれの人にかかっています。文学部はできるだけ良い学びの場を提供していきますが、そこで「学ぶ」のは皆さん自身なのであります。

# 目 次

## 文学部で「学ぶ」ということ

(東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 納富 信留) ..... 1

## 文学部とはどういうところか ..... 5

## 専修課程等紹介 ..... 17

### (人文学科)

|                  |     |                   |     |
|------------------|-----|-------------------|-----|
| 哲学 .....         | 21  | 中国思想文化学 .....     | 25  |
| インド哲学仏教学 .....   | 29  | 倫理学 .....         | 34  |
| 宗教学宗教史学 .....    | 37  | 美学芸術学 .....       | 43  |
| イスラム学 .....      | 49  | 日本史学 .....        | 55  |
| 東洋史学 .....       | 60  | 西洋史学 .....        | 66  |
| 考古学 .....        | 71  | 美術史学 .....        | 77  |
| 言語学 .....        | 82  | 日本語日本文学(国語学) ...  | 87  |
| 日本語日本文学(国文学) ... | 93  | 中国語中国文学 .....     | 100 |
| インド語インド文学 .....  | 104 | 英語英米文学 .....      | 107 |
| ドイツ語ドイツ文学 .....  | 112 | フランス語フランス文学 ..... | 117 |
| スラヴ語スラヴ文学 .....  | 122 | 南欧語南欧文学 .....     | 128 |
| 現代文芸論 .....      | 132 | 西洋古典学 .....       | 140 |
| 心理学 .....        | 145 | 社会心理学 .....       | 150 |
| 社会学 .....        | 154 |                   |     |

### (大学院独立研究専攻)

|             |     |              |     |
|-------------|-----|--------------|-----|
| 文化資源学 ..... | 163 | 韓国朝鮮文化 ..... | 169 |
|-------------|-----|--------------|-----|

### (次世代人文学開発センター) ... 175

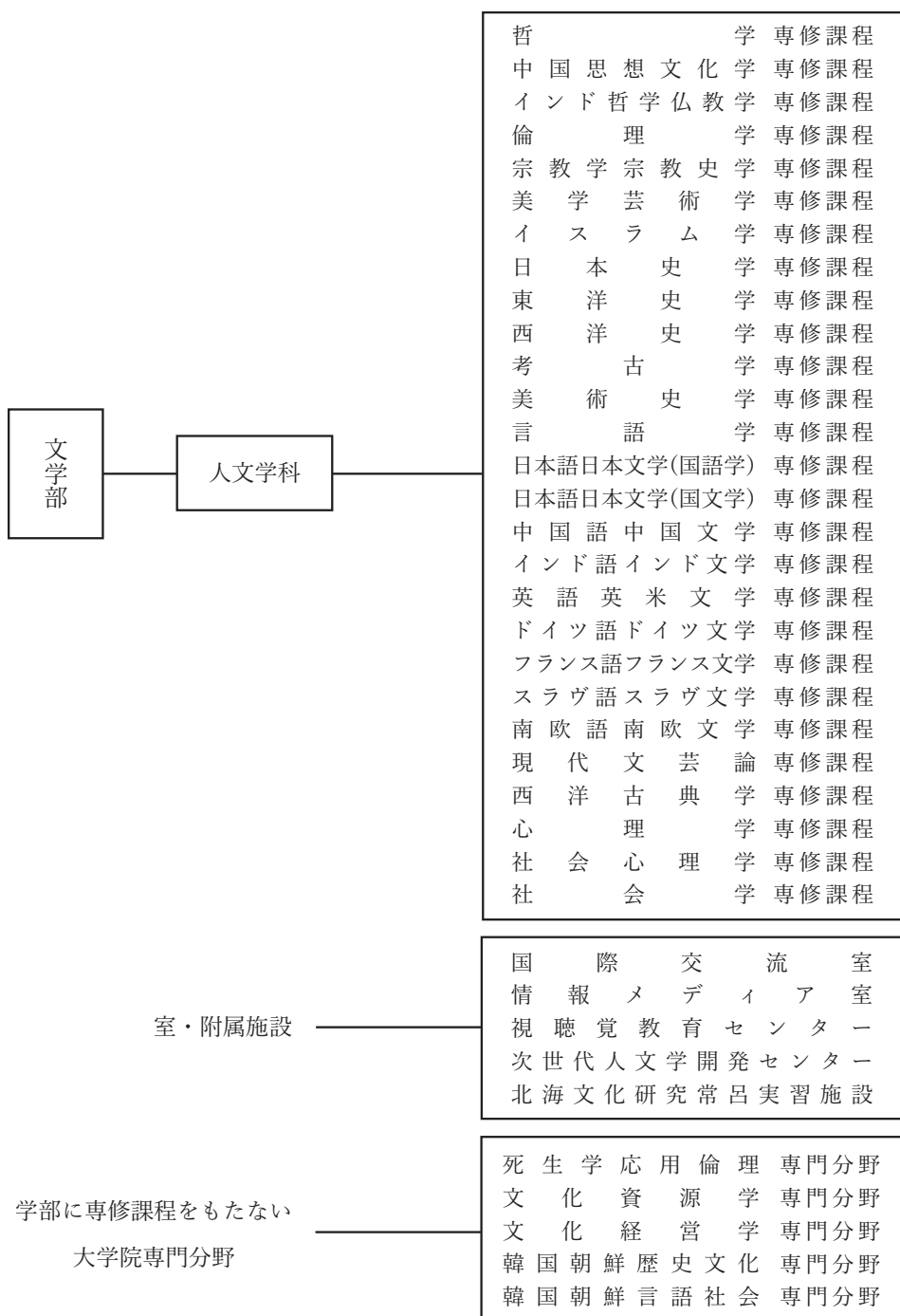
## 特別教育プログラム ..... 183

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| 死生学・応用倫理教育プログラム ..... | 185 |
| 原典を読む .....           | 189 |
| アカデミック・ライティング .....   | 191 |

## 私の選択 文学部教員によるエッセイ ..... 193

|                             |             |     |
|-----------------------------|-------------|-----|
| 「私の選択？」 .....               | (加藤 隆宏) ... | 195 |
| 人とは違う道 .....                | (長屋 尚典) ... | 198 |
| 気がついたときには、もう選択は終わっていた ..... | (藤井 光) ...  | 202 |
| 「私の選択？」 .....               | (堀江 宗正) ... | 206 |

## 文学部情報館 ..... 211



本冊子の情報は2024年4月現在のものです。最新の情報は文学部ホームページや掲示などで確認してください。

# 文学部とはどういうところか

## 文学部 古い伝統と新しい魅力と

文学部でなにを学ぶか。すでにある程度はご存じかもしれません。

哲学、宗教学、日本史学、考古学、言語学、英米文学、フランス文学、心理学、社会学——こうした多くの学問分野の名前はすでに馴染み深いものでしょう。そのうちのいくつかについてなら、教養課程の講義や参考書をとおして、概要くらいは学んでいることでしょう。

左ページの表にあるように、文学部には 27 の専修課程があり、それぞれ伝統的な、あるいは新たな学問分野をその名称に掲げています。多くはすでに明治の頃に創設され、以来、おのこの領域で、日本の人文・社会科学をリードする役割をはたしてきています。

それでは、文学部で、いま、どのような授業がおこなわれているのでしょうか。これまでに文学部に接する機会のなかった学生さんは、左ページの表といままでの知識に照らしあわせ、文学部とは伝統的な学問を昔ながらのかた苦しい方法で学ぶところだと考えるかも知れません。しかし、それは認識不足というものです。

文学部の授業はおどろくほど多様で、毎年 800 近い講義や演習が開講されています。「ウィトゲンシュタイン『哲学探究』を読む」「古文書学概論」

「ドラヴィダ語比較研究」「ポスト福祉国家の社会学」「葬送儀礼の変容と死生観」「劇場制作と劇場政策」など、今年開講される予定の授業題目を手あたり次第に取り出してみただけでも、文学部の学問領域の気の遠くなるほどの広さがおわかりになると思います。さらに、大学院人文社会系研究科では、文学部のさまざまな研究領域や学内の諸研究機関を学際的につなぎ、学外の文化行政機関や文化施設などとも連携して、文学部の有する豊かな知見を積極的に社会に向けて開き、生かしてゆくために、2000 年度から文化資源学、2002 年度からは韓国朝鮮文化という新しい研究専攻が開設



されました。これらは学部学生を持たない大学院だけの独立専攻ですが、文学部のどの専修課程からも進学することができますし、いくつかの授業は学部・大学院共通科目として文学部にも開講されています。さらに 2005 年度には、人文知の新たなかたちを探る先端的研究組織として「次世代人文学開発センター」が創設され、ユニークな研究を展開しています。2007 年度には文学部の西洋近代語近代文学専修課程を改組した現代文芸論専修課程も発足しました。

文学部の各専修課程は、それぞれが確固たる基盤の上に立ちながらも、伝統的な学問の枠組みに縛られることなく、学問の新しい動向を見定め、その成果を授業に反映させています。今日、さまざまな新しい学問分野が生まれていますが、文学部はつねに豊かな発想の源泉となっています。

## 文学部のしくみ

まず、文学部の組織についてご説明しましょう。最も基本となる単位が専修課程です。しばしば「研究室」とも呼ばれる専修課程は、それぞれ、学問領域も伝統も気風も大きく異なります。文学部では、各専修課程の独自性が可能なかぎり尊重されてきました。したがって、文学部は 27 の専修課程に分かれているというよりも、27 の専修課程が集まって文学部を構成しているといったほうが、イメージとして適当かもしれません。

文学部・大学院人文社会系研究科には、国際交流室、情報メディア室、視聴覚教育センター、次世代人文学開発センター、北海文化研究常呂実習施設という 2 つの室と 3 つの附属施設があります。学生がこれらに所属することはありませんが、これらの施設は専修課程とは違った観点から多様な授業を提供したり、皆さんの勉学を支援したりします。情報メディア室では、教育研究用のコンピュータシステムやネットワークの運用・管理を行っていますし、視聴覚教育センターでは研究・教育において視聴覚機器や視聴覚資料が活用できるよう設備整備や利用サポートを行っています。文学部で営まれている学問は、長い伝統に従うばかりではなく、新しい研究のための情報や手段を貪欲に取り込んでいるのです。

さて、文学部に進学するということは、正確に言うなら、いずれかの専修課程に進学することを意味します。次に、その専修課程について説明しましょう。



## 専修課程とはなにか

専修課程は教員（教授、准教授、講師、助教等）と学生（大学院学生、学部学生、研究生）によって構成されます。厳密に言えば、学部（文学部）と大学院（人文社会系研究科）は別組織ですが、文学部の各専修課程は大学院の各専門分野と不可分の関係にあるので、この両者をひっくるめた、いわゆる研究室ということばが広く使われています。たとえば文学部の西洋史学専修課程と、大学院の西洋史学専門分野をあわせて、西洋史学研究室と呼ぶのはその一例です。研究室の規模はさまざまで、大きいところでは教員・学生の総数が 100 名を超えることがありますし、総数が 10 名ほどのこじんまりとした研究室もあります。

研究室ということばにはもう 1 つ別の意味があって、それは文字どおり、教員と学生がともに研究を進める部屋を指します。

毎年 5 月、教養学部前期課程学生向けに「文学部ガイダンス」という集まりが開かれます。そこで配布される文学部紹介冊子を見たり、もし暇があるなら、ぜひ一度本郷キャンパスを訪ねたりしてください。

文学部、特に法文 2 号館の建物は複雑怪奇で、教室、演習室、研究室の事務室、教員の個人研究室、会議室、さらにはいったいなにに使われているのか、いつもひっそりと扉を閉ざした小部屋などが、迷宮のように並んでいます。

ところどころにあらわれる階段を上り、また降り、幾度か廊下を曲がるうちに、慣れないあなたは自分がいったいどのあたりにいるのか、方向の感覚を失うことになるでしょう。それでもいくつか、「哲学研究室」「美学芸術学研究室」などといった昔からの看板をみつけたら、どこでもよい、思い切って中をのぞいてみてください。扉を開けると、まずは壁一面に書物のつまった本棚が目につくはずです。さらに書類戸棚やついたての奥に、いくつかの部屋の扉が開いているのが見えることでしょう。これが、文学部に進学したら毎日のように通う、研究室というところなのです。

## 研究室とはどのようなところか

研究室ごとに呼び方はまちまちでしょうが、どんな場合でも入ってすぐのところに、辞書室あるいは参考図書室という大きな部屋があって、授業

の下調べや発表の準備をするには欠かせない書物が並んでいます。

これは、各研究室が、その創設以来何十年にもわたって揃えてきた基本的な参考書の一大コレクションであり、なかには、第二次大戦中にミカン箱につめられて田舎に疎開したというような、数奇な運命を閲した書物もまじっています。また、Amazon などには見当たらない、珍しい新着の外国書が含まれているかもしれません。どの辞書が必要か、どの書物が便利か、——そうした知識は一朝一夕にして得られるものではなく、少し大げさになりますが、やはり研究室の歴史の積み重ねの中で蓄えられてきたのです。あなたは、諸先生、諸先輩が苦心して揃えたノウ・ハウの成果を自由に利用できるし、また、大いに利用しなくてはなりません。こうした参考書の使い方に慣れること、——これが、あなたの文学部における勉強の第一歩となることでしょう。

ところで、研究室の中に特別に演習室を設けている専修課程も少なくありません。演習は講義と違い、小規模で親密な雰囲気の中で進められます。文学部は伝統的に演習を重視してきました。あなたはいくつかの演習に参加して勉強することになるでしょうが、これは、専門研究の手ほどきを受ける場であり、同時に、発表を通じて自己の能力を高め、アピールする場でもあります。わずか数人の仲間とともに受ける演習の授業から、生涯の友情が生まれることもあります。もっとも、予習を怠って身のおきどころのない1時間45分を過ごすこともあるかもしれません。

文学部の各研究室はそれぞれの分野において日本の人文社会学研究で中心的な位置を占めています。多くの研究室は関連した学会の運営に携わり、研究室のOB、OGたちは全国各地で研究の第一線に立ち、海外の研究者や留学生との活発な交流が行われています。こうしたネットワークを通じて入手できる研究情報は、多くの場合、日本で最新かつ最良のものであって、東京大学文学部で学ぶことの最大の魅力とメリットはこの点にあるといってもよいくらいです。講演会やセミナーは頻繁に開かれていますから、ぜひ積極的に参加してください。

どの専修課程に進むか。どの研究室の扉をたたくか。それは、あなたの勉学と生活の両面に深く関わる問題です。あなたの一生の何がしかが、そこで決まるかもしれません。ですから、教養課程における成績の平均点や目先の流行だけにとらわれず、ぜひ、じっくりと考えてください。学問は自身の人生そのもののありように関わるものであって、決して偏差値的な

世界ではないのです。この『PROSPECTUS』では、それぞれの専修課程の紹介にもっとも多くページをさいてあります。その説明でも足りない場合は、このパンフレットの巻末の、「さらに詳しく知るために」、「専修課程への問い合わせ」などのページを活用したり、文学部のホームページ (<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/>) を検索したりして、どうか心ゆくまで情報を集めてください。

## 助教 研究室のジェネラル・マネジャー

ところで、あなたが文学部に進学して研究室に足を踏み入れた時、そこであなたを誰よりも先に、おそらく気さくな笑顔で迎えてくれる人（あるいはブスッとしているかもしれませんが、実はとてもいい人だったりします）、そう、「助教」のことを忘れるわけにはいきません。

それぞれの研究室は、読書会や研究会の世話、研究室紀要の編集、図書購入の選定、蔵書のインスペクション、研修旅行の手配、学生の一身上または研究上の相談ごとへの対応など、驚くほど多くの、専門的な知識を必要とする仕事を抱えています。文学部において助教は、教授や准教授と共同で授業を担当することがありますが、主に、このような微妙で複雑な仕事を処理しながら、研究室が円滑に運営されるように絶えず気を配っているのです。まさに、研究室のジェネラル・マネジャーなのです。

助教の年齢はおおむね二十代後半から三十代前半。あなたにとっては兄貴分にも姉貴分にもあたる年ごろです。研究室を下見する機会があったら、あなたもこの助教の人たちに研究室の様子を聞いてみたらどうでしょう。昨今、多くの大学では助教の定員が削減されて従来の研究室のあり方を維持するのが難しくなるような状況が生じていますが、文学部では今でも多くの助教が活躍して、豊かな知的交流の場としての研究室を保っているのです。

## 多彩な授業 4つのタイプ

文学部では毎年 800 近い講義や演習が開講されます。授業の担当者は、専任の教員も非常勤講師も、それぞれの分野を代表する一流の研究者であって、その教員が、あるいはそれぞれの分野の基本的・伝統的な問題を、

あるいは現在取り組んでいる研究の最新の成果をあなたに伝えるのです。それらの講義や演習は4つのタイプに分類できます。

第一は各専修課程の枠組みの中で行われる授業で、いずれも高度の専門研究の上に立ったものですが、新しい学問の動向をも見定めて、その成果を折りにつけ取り入れていることは、この『PROSPECTUS』やUTASのシラバスをご覧いただければ一目瞭然です。もちろん、他の専修課程の授業にも原則的には出席することができます。それぞれの専修課程が、どのような方針で講義や演習を編成しているのかについては、専修課程紹介のページを参照してください。

第二は「共通科目群」です。これには「アカデミック・ライティング」と「多分野講義」が含まれます。

「アカデミック・ライティング」の教育プログラムは、しっかりとした学術論文を外国語で発信するために必要な知識を身につけてもらうための授業です。今後、みなさんが研究者として、あるいは社会人として、世界に向けてきっちりとした主張をするための貴重な手立てとなってくれることは間違いありません。

「多分野講義」は学問が学際的な性格を急速に強めている最近の状況に対応するために設けられたもので、複数の専修課程にまたがり、さまざまな専門分野を横断する内容の問題を取り扱う講義と考えればよいでしょう。今年度は、「"Explaining" Japanese Religion: A Critical Approach」「メディア間翻訳・翻案研究：文学テキストの映像化・舞台化」「大江健三郎を読む」といった講義が用意されています。

第三は、「人文学フロンティア教育プログラム」です。これには、「死生学・応用倫理教育プログラム」と、文化資源学研究専攻が開講する学部・大学院共通科目の一部、次世代人文学開発センターが開講する科目の一部が含まれます。

「死生学・応用倫理教育プログラム」は死生学と応用倫理に関する学際的教育を構築するために開設されました。生死をめぐる問題は、どんな時代の、どんな地域の人々にとっても、抜き差しならぬ課題でありつづき、時代を超え、地域に限定されることのない普遍的な問いです。しかしそれは一方で、けっして観念的、抽象的な問題として提起されてきたのではなく、いつでも特定の時と場所に限定された、具体的な問題として現れてきたのも事実です。この現代という時と場所にあって生死の問題は、主

題としては遺伝子操作の問題から、安楽死や尊厳死、臓器移植、さらには異なった世界観の間に生まれる軋轢として、また次元としてはミクロな分子レベルから、身体、地域、さらには地球、近隣宇宙というマクロな次元までのさまざまな問題と密接に絡み合っていて現れてきています。それは古代の思想、宗教、哲学が潜在的な形で問いとしてきたものが、具体的な、目に見える形の、個別の問いに姿を変えたものにほかなりません。2002年度より文学部は、各方面から第一線の先生たちを招いて、古代の問題と現代の問題とを同時に見つめていく大切な試みを始めています。2022年度から、大学院の基礎文化研究専攻において死生学応用倫理専門分野も開設されています。みなさんの積極的な参加を期待しています。

第四は「共通講義」です。これには、「一般講義」「外国語」「原典を読む」のほか、文化資源学研究専攻・韓国朝鮮文化研究専攻が開講する学部・大学院共通科目の一部、次世代人文学開発センターが開講する科目の一部が含まれます。

「一般講義」はそれぞれの専修課程の枠組みには収まりきらないが、それでも多くの学生にとって必要と判断されるテーマが取り上げられ、学部外から専門家を招いて講義されます。今年度は、「情報メディア論」「文化人類学」「地理学」「博物館資料論」「精神医学」「電算機応用」「書道」「漢文学」「法律学」「地誌」などが開講されます。

「外国語」は外国語の運用能力を身につけるための授業です。何といっても文献解読が研究の出発点となる文学部では、外国語の運用能力を身につけることがぜひとも必要です。しかしそうはいっても、教養課程で語学の授業をさぼった、文学部に進学してはじめて語学の重要性を悟った、あるいは専修課程の授業に接して、新しい外国語の知識が必要になった、というような学生が、現実には少なくありません。そのため文学部では、英語、ドイツ語、フランス語をはじめとして、中国語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ヒンディー語、韓国朝鮮語、アラビア語、ペルシア語、ギリシャ語、ラテン語、チベット語という外国語のメニューを組んでいます。専修課程の授業での必要にせまられた人たちが受講するので、その取り組み方も必死で、短期間で大きな効果をあげているようです。

「原典を読む」は文献を原文で読みたいと望む全学の学生を対象に、言語・文学を専門とする教員が味読の手ほどきをするものです。今年度の開

講予定については本文の「原典を読む」をご参考ください。

## カリキュラム 専門性と学際性

文学部を卒業するためには 76 単位を取得することが必要ですが、その内容は専修課程によって異なります。詳しくはそれぞれの専修課程紹介のページを参照していただきたいのですが、概していえば、ほぼ半数程度の単位を必修科目で満たすことを要求し、残りの半数を学生の自由な裁量にゆだねている専修課程が多いようです。たとえば『文学部便覧』の専修課程必修科目の欄から、哲学専修課程の必修科目をみてみましょう。

もちろん、実際の履修については専修課程からの具体的な指導があることでしょうが、76 単位のうち、右の表に示された内訳

| 必修科目            | 単位数 |
|-----------------|-----|
| 哲学概論            | 4   |
| 西洋哲学史概説第 1 部    | 4   |
| 西洋哲学史概説第 2 部    | 4   |
| 哲学特殊講義          | 12  |
| 哲学演習            | 8   |
| 卒業論文(卒業論文指導を含む) | 12  |
|                 | 44  |

で 44 単位は必修科目を修める必要があります。しかし、必修科目といっても、必ずしもその専修課程の授業に限られるわけではなく、関連した専修課程の授業も、その専修課程の必修科目として認める場合があります。たとえば哲学専修課程は、倫理学専修課程や宗教学宗教史学専修課程などのいくつかの授業を「哲学特殊講義」の単位の中に含めているのです。

こうした措置は、ほとんどの専修課程によって取られています。実際には自分の専修課程の授業だけで手一杯で、他の専修課程の授業にはとても手が出せないことになるかもしれません。しかし、原理上は、半数近くの単位を他の専修課程の授業で取ることが認められているのです。文学部の学生の履修科目選択の自由度は、他学部の学生に比べてかなり高いといえます。

おそらく来年の 4 月、あなたは文学部の 800 にのぼる授業を前に、どの講義を聴講し、どの演習に参加するか、頭を抱えて悩むことになるでしょう。それは、学問のデパートともいえるべき多様な授業内容を誇る文学部の学生だけに許され、そして奨励されている贅沢な悩みなのです。いま、いろいろなところで、インターディシプリナリティ（学際性）などということが叫ばれていますが、こうした言葉の流行するはるか以前から、文学部では、あなたの先輩たちが、一方で高度な専門性を身につけながら、他方



では一見専門から離れた多様な授業を履修することによって、インターディシプリナリーな活動を実践してきたのです。学際性というものは、しばしばイメージされるように、いろいろな分野の専門家が集まって交流すれば達成されるなどという安易なものではありません。様々な学問領域の間の重なり方やずれ方を一人一人が身をもって体験し、結びあわせる過程を通して、自らの専門領域での問題関心や視野を広げてゆくこと。学際性とはそのように個人の中で、あくまでも専門性との関わりの中で現実化されてこそ力を発揮するものなのです。文学部のカリキュラムはそういう積極的なチャレンジ精神をもって自らの可能性を広げてゆこうとする人の期待に応えられるだけの多様な可能性を提供しているのです。

たとえば、あなたがヨーロッパ中世に興味を抱いて、西洋史学専修課程に進学を考えているとしましょう。あなたは、まっさきに便覧の西洋史学専修課程の項目を開いてみることでしょう。そこには西洋のさまざまな地域と時代を扱った授業が並んでいて、履修する科目を選り分けるのに楽しく迷うことになりますが、それだけではないのです。

日本史学や東洋史学の中にも中世史の授業がある。言語や文学を専門とする専修課程も、それぞれヨーロッパ各国の中世語や中世文学の授業を提供している。美術史学の中世関係の授業も、文化史的な知識を得るためには欠かせないところだし、さらに思想を専門とする専修課程の講義にも出て、ヨーロッパ中世思想を理解する手がかりを得たい。——と、こんな具合に、研究の夢は四方八方へと広がります。そして、そのプログラムを自由に組み立てるのは、ほかならぬあなたなのです。

## 卒業論文 知の受信者から発信者へ

文学部における学生生活を締めくくるのは、卒業論文です。それはあなたの学業の総決算でもあります。

卒業論文を完成させるということは、決して簡単なことではありません。論文のテーマをさがし、そのテーマに関連する先行の研究を調べる。必要な文献資料を読んだり、あるいは実地の調査や実験をおこなったり、集まったデータを分析・検討した上で、思いをめぐらし、工夫をこらし、何らかの結論をもった、かなりの分量がある論文にまとめあげなくてはならないのです。量的変化は質的变化をともしません。今までにレポート程度のも



のしか書いたことのないあなたには、あるいは溜め息の出ることかもしれません。

しかし、心配することはありません。先輩たちの多くが、立派な卒業論文を書いて卒業していきました。文学部に進学したばかりの頃には教員をハラハラさせた頼りなげな学生が、1年、2年と演習で鍛えられるうちに実力を身につけ、そして堂々たる卒業論文を完成させる。こうした例を、多くの教員が経験しています。文学部の雰囲気に関心する過程で、あなたはきっと変貌を遂げるのです。

卒業論文を書くということは、知の受信者から知の発信者へと立場を変えることを意味します。たしかに、多くの時間とエネルギーとを費やして1つの問題に取り組むのは、辛く苦しいことでしょう。しかし、その結果として得られる喜び——そう、何ものかを発見し、何ごとかを表現しえたという喜びは、他のどんなものにも代えがたい喜びであって、数ヵ月におよぶあなたの呻吟を補って余りあることでしょう。

この喜びにとりつかれた学生は、大学院への進学をめざすことになるかもしれません。しかし、卒業論文を最初で最後の論文とする人にとっても、ひとつ大きな論文を完成させたという自信の効果は計り知れないのです。今まで受け身の形で接するばかりであった書物、取り組んでねじふせる対象でしかなかった思想が、実に身近な懐かしい存在になってしまうのはどうしたことでしょう。それがどのように書かれたものなのか、どのように積み上げられたものなのか——あなたは背後から書物や思想に接する視点を手に入れるのです。卒業後にいかなる進路をとるにせよ、この新しい視点は、あなたにとって大きな力となることでしょう。

## 卒業後の進路

最後に、文学部卒業後の進路について触れておきましょう。2つの誤った「神話」を捨て去っていただくことが必要です。

まず、文学部出身者は就職に不利だという「神話」。——もちろん、就職状況がとみに厳しくなっている昨今ですから、それなりの苦労はあるでしょう。卒業論文を抱えながらの就職活動もなかなか大変です。しかし、文学部の学問は社会で役立たないから就職に不利だというようなことがささやかれていたのは遙か昔のことです。現在ではむしろ、さまざまな企業

において仕事の多様化やソフト化が進む中で多くの新しい職種が生まれ、文学部の学生がかえって歓迎されるというケースも増えています。「護送船団社会」が崩壊しつつある今、求められているのは他人では代替のきかない個々人の個性的な能力なのであり、そのような能力を養成する場として文学部は恰好の場だとも言えるのではないのでしょうか。最近の就職状況の詳細については、このパンフレット巻末の「専修課程別進路状況」をご覧ください。

次に、文学部卒業生の大部分が大学院に進学するという「神話」。——たしかに、東大の文科系諸学部の中で、文学部は大学院進学者の比率が群を抜いて高いですし、これまでに日本の人文・社会科学の担い手となる多くの人材が輩出した文学部としては、これからも大学院に進学して研究者への道を歩む人材を育てることが大きな使命であることは間違いありません。しかしだからといって、大学院に行かない者が日陰者扱いされたり、疎んじられたりするということのようなことは決してありません。実際、大学院進学者は卒業生のうちの 20%ほどで、多くの人は社会に巣立っていくのです。

たしかに文学部の学問は実学的な性格が乏しいですから、社会に出た卒業生がすぐに、文学部で学んだことが直接に役立ったと感じるようなことはあまり多くないかもしれません。哲学を専攻し、カントの『純粹理性批判』をテーマに研究したために、会社で得意先との交渉が円滑に進んだなどということはまずないでしょう。しかし、そこで身につけた、テキストを一語もゆるがせにせず綿密に読み、わずかな引っかかりを手がかりにそこに込められた奥深い含意を引き出してくる能力、そして今度は、それを大きな視野のうちにおさめることによって、名探偵さながらに時代や文化の全体像を解き明かしてゆく能力、そういう鋭い分析力や幅広い視点をそなえることによって、社会に出たとき、あなたの目に映る景色は確実に変わるでしょう。そしてそういう、他人には見えない景色がみえるからこそ、あなたはかけがえのない人材として社会で活躍できるのです。文学部を卒業した若者が社会に出てそのような形で新しい世界を開拓してゆく、そういう姿を見ることもわれわれ教員の大きな楽しみなのであり、多くの教員がそのために心を砕いて授業に臨んでいるのだということをどうか忘れないでください。

# 専修課程等紹介

研究の対象と方法、教員の専門領域、授業内容、  
研究室の様子、就職と大学院進学、等々

教員、学生数は 2024 年 4 月 1 日現在



---

# 人文学科

---



## 哲学

### ◇教員◇

教授：鈴木泉、納富信留、古荘真敬

准教授：乗立雄輝

助教：葛谷潤

### ◇学生◇

学部：49名、修士課程：14名、博士課程：16名

1877年の東京大学設立以来、一貫した歴史をもつ哲学科は、1910年、「哲学」、「史学」、「文学」の三学科中「哲学科」に属する「哲学」専修学科として今日にいたる基礎を固めた。草創期には井上哲次郎、ケーベルなどの教授陣を擁し、西田幾多郎、田辺元、九鬼周造らを輩出した。戦後も多くの哲学者、研究者を産み出し、今日に至るまで我が国の哲学・思想研究の世界に大きな一角を占め続けている。1963年の類制度創設以降は、第一類（文化学）中の、そして1995年から2015年までは、思想文化学科中の、さらに現在では人文学科中の「哲学専修課程」として、文学部の研究・教育組織の一翼を担っている。また、哲学専修課程は、大学院の組織としては、1953年、人文科学研究科のなかの哲学専攻課程として発足し、1995年からは、人文社会系研究科における基礎文化研究専攻内の思想文化コースに属する哲学専門分野となり、西洋哲学の歴史的研究および哲学の体系的なおこなっている。2024年4月現在、教授3名・准教授1名・助教1名の陣容であり、哲学の幅広い領域をカバーするスタッフ構成となっている。なお、毎年4～5名の非常勤講師をも迎え、一方では長い歴史をもつ西洋哲学史の全体にわたり、また他方では哲学の諸分野にほぼ均等な比重をもたせた形で、授業を行っている。また、外国人研究者がしばしば訪れて、特別講義や講演会、セミナーなどが開催され、海外の今日的な研究にじかに触れる機会も豊富に持つことができる。さらに、哲学研究室の教育・研究活動は、死生学・応用倫理センターの授業や研究活動と連携しており、それらを通じて先端的な文脈での実践哲学を学ぶこともできるようになっている。

哲学専修課程のカリキュラムは、講義と演習に大別され、講義は、哲学概論、西洋哲学史概説第1部、同第2部、哲学特殊講義からなっている。

哲学概論は、西洋哲学史上繰り返し論じられてきた重要テーマを取り上げつつ、哲学的営為の実際を展開してみせる。

西洋哲学史概説第1部は、古代中世哲学史の概説であり、同第2部は、近現代哲学史の概説であるが、本専修課程では、古代から現代までの概説的な哲学史の知識は、学生諸君が各人でしかるべき書物等をとおして、自発的に我がものとすることを期待している。したがって、実際の講義は多くの場合、そうした概説書では読むことのできない、最新の専門的な知見に基づく生き生きとした哲学の通時的営みが、論じられる。

哲学特殊講義は、各担当教員が、自らの目下の研究テーマをめぐって、自らの哲学的営為の現場を繙いて見せるものである。

哲学演習は、古代から現代にいたる哲学史上の代表的諸著作を、原典で講読する。

次に、各教員の紹介をしよう。

鈴木教授は、西欧近世哲学ならびに現代フランス哲学を研究のフィールドとしている。様々な意匠をとって現れる根拠への拘束から離脱し、存在の多様な声に開かれた＜内在性の哲学＞を独自に体系化する作業を進めつつある。具体的には、(1)ドゥンス・スコトゥスからスピノザに至る中世後期から近世にかけての哲学史を素材とする、超越なき＜内在性の哲学＞を可能にする＜存在の一義性＞の系譜学の跡付け、そのモデルケースとしての「スピノザ/ライプニッツ問題」の解明、(2)現代における＜内在性の哲学＞の範型としてのドゥルーズ哲学の解凍とその展開、(3)＜内在性の哲学＞を開かれた場において提示することを目指して、分析的形而上学の議論や日本（語）の哲学との突き合わせ、を進めている。また、以上とは別に、日本最古の哲学系の学会である「哲学会」とその学会誌『哲学雑誌』を素材とした近代日本哲学の形成に関する共同研究を進めている。編者の一人を務める『スピノザ全集』（岩波書店、全六巻＋別巻）の刊行が始まったばかりである。演習では、デカルト・スピノザ・ライプニッツなどの古典的テキストの精読を通して哲学のテキストを読解する技法を教授すること、をそれぞれ目指している。

納富教授は、西洋古代哲学が専門で、古代ギリシア世界における「哲学

（フィロソフィア）の誕生」をテーマとしている。具体的には、前 6 世紀初めから前 5 世紀の初期ギリシア哲学、前 5 世紀後半のソフィスト思潮とソクラテス、及び、前 4 世紀のプラトン、アリストテレスらの古典期哲学を中心に研究している。また、日本における西洋哲学の受容も近年のテーマである。近年は哲学諸領域を統合する「世界哲学」のプロジェクトに関わり、『世界哲学史』（ちくま新書、全 8 巻＋別巻）の共同編集を行った。演習では、古典ギリシア語のテキストを読み解きながら、ダイナミックな知的潮流のなかで「哲学」という営みが成立する様を明らかにする。国際プラトン学会（元会長）、国際哲学学会連合（実行委員）など海外での研究活動が多い。著書に *The Unity of Plato's Sophist* (Cambridge University Press)、『ギリシア哲学史』（筑摩書房）、『哲学の誕生』（ちくま学芸文庫）、『ソフィストとは誰か？』（ちくま学芸文庫）、『プラトン 理想国の現在』（慶應義塾大学出版会）、『プラトンとの哲学 一対話篇をよむ』（岩波新書）など、翻訳に、プラトン『ソクラテスの弁明』『パイドン』（光文社古典新訳文庫）などがある。

古荘教授は、ハイデガー哲学の研究から出発して、19 世紀半ばから 20 世紀の欧米および日本において展開された生の哲学、実存哲学、現象学とその周辺テキストの解釈を試みながら、人間の実存の本質構造に関する現象学的探究を行っている。具体的には、言語、感情と理解、行為、時間意識、共同存在、芸術、宗教といった諸現象をめぐるカント以後の哲学者たちの思索において、いかにいわゆる超越論哲学と生の哲学という二つの思考形式が必然的に絡み合いながら展開されているかを解きほぐしながら、人間の生命と言葉との連関の意味を明らかにすることが試みられている。そうした歩みを通じて、いまいちど「生の意味」を問い直す現象学的実存論を提起することが目標である。演習においては、主としてドイツ語で書かれた近現代哲学のテキストを精読しながら、古典的テキストの精緻な読解と学生各自の哲学的探究を両立させる授業を模索している。

乗立准教授は、英語圏の哲学、特に 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてアメリカ合衆国で展開されたプラグマティズムと形而上学を中心とする思潮を専門としている。主として取り組む哲学者はパース、ジェイムズ、ホワイトヘッドであるが、彼らの経験主義的な形而上学の理解と探究に努め、そこに立脚しながら、それらの哲学史的意義の考察、現代の形而上学との接続、さらに、哲学的宇宙論の可能性を拓くことを試みている。また、



パースの共同体論を出発点として、知識と社会との関係を問うことも課題としている。講義においては、経験論を中心とした近現代哲学がはらむ諸問題と可能性を考察する。演習においては、パース、ジェイムズ、ホワイトヘッドらの営為が、中世後期から近世・近代の哲学的伝統をいかに批判的に継承しているのか、また、それらが現代の哲学者たちの思考とどのような関係を結びうるのかを考察していく。

文学部を卒業するために必要な単位は 76 単位だが、哲学専修課程では、そのうちの 44 単位を必修科目としている。さきに挙げた、哲学概論、西洋哲学史概説第 1 部、同第 2 部の各 4 単位と、哲学特殊講義から 12 単位、哲学演習から 8 単位、それに卒業論文 12 単位である。哲学演習は、必修 8 単位のうち最低限 3 セメスターにわたって 2 単位ずつ以上とるように定めているが、それはここにおいて、欠かすことのできない先哲との対話がテキストをとおして行われるからである。

こうした哲学演習に積極的に参加しうるために、英語、ドイツ語、フランス語、それに、ギリシア語、ラテン語を学習していることが望まれる。また本専修課程進学志望者は、さらに前期課程において基礎科目の「哲学」「倫理」、総合科目「現代哲学」「記号論理学」の諸講義を受講しておくことが望ましい。

なお、必修科目のうち、卒業論文は、自らが哲学を学ぶことにおいて、徹底的に遂行した思索の証となるものとして、とりわけ重要なものである。その内容は、西洋哲学の歴史的研究、体系的研究のいずれに関するものでもよく、まず学生が自分で論題を設定し、次に教員の承認を得て、論文を作成する。分量は 400 字詰め原稿用紙に換算して 100 枚以内（40,000 字以内）である。毎年、卒業年度の 7 月はじめの頃に卒論ガイダンスの機会を設け、教員が適切な助言・指導等を行っている。

修了後の進路：哲学専門分野、他領域、他研究科を含めた大学院への進学、新しい分野への学士入学など、学業を続ける学生と、就職する卒業生に分かれ、後者が幾分、多い。哲学専修課程の卒業生の就職状況は（大方の予想に大いに反して）大変良好である。就職先は、報道、出版、広告、商社、銀行、メーカー、官公庁などの他に、最近ではシステム・エンジニアなど、コンピューター関連会社も多い。

# 中国思想文化学

## ◇教員◇

教授：小島毅、陳捷、横手裕

助教：平澤歩

## ◇学生◇

学部：2名、修士課程：6名、博士課程：24名

### （1）中国思想文化学とはなにか

「中国思想文化学」という専修課程の名称に、とまどう人がいるかもしれない。高等学校の科目名から内容の想像がつく他の専修課程と比べて、この名称はたしかに少しわかりにくい。だが、このわかりにくい名称は、わたしたちの専修課程が志している学問の新鮮さの証しである。

この専修課程の前身は「中国哲学」を称していた。「哲学」に代えるに、「思想文化」ということばを使うようになったのは、哲学を重要な構成要素としつつ、それ以外の領域をも研究方法に取り込むことをめざしたからである。つまり、哲学・倫理学・宗教学・美学といった、他の専修課程の学問方法のみならず、経学のような中国古来の方法や、文化人類学や科学史など文学部の外にある学問も含めて、およそ考え得るありとあらゆる手法を動員して中国（その影響を受けた東アジアも含む）の人々の思惟を理解していこうというのが、改称の目的である。したがって、研究対象も狭い意味での思想文献にはかぎられない。もちろん、儒教・道教の教説についての研究は、この専修課程の重要なテーマであり、授業でも中心にとりあげられる。しかし、それだけにかぎらず、いわば無名の人々が、世界について、人生について、どんなふうを考えて日常生活を送っていたのか、また送っているのかを解明することも、中国の文化を理解するには大切なことである。いや、単に対象の理解のためだけではない。わたしたち自身の、ものの考え方や人生観を根本から問い直すことにつながる題材が、そこかしこに転がっている。

要は、研究する主体であるわたしたちが、どんな素材を見つけだしてやるかの問題なのだ。その点で、この専修課程では他人（教員を含む）から

与えられた情報を、マニュアルどおりに処理・加工していけばよい結果が出るということはまずない。肝心なのは各自の問題意識である。中国や東アジアの思想文化について何か興味を感じたとき、その興味を深め学問として深化させていくのは、自分自身なのだ。

## （２）授業と専任教員

しかし、勝手な思いつきで自己流に展開したものは学問ではない。そこにはおのずから、長年にわたって蓄積されてきた知見や研究上のルールがある。それを伝授するのが授業の役割だ。

文学部を卒業するために必要な単位の総数は 76 単位だが、中国思想文化学専修では、そのうち 42 単位について、中国思想文化学専修の指定する科目を履修することを学生に求め、残る 34 単位については、学生に大幅な自由裁量を認めている。指定する 42 単位にしても、中国文学や東洋史など、研究対象を共有する他の専修課程が開講している科目から取ることもでき、カリキュラムの自由度はきわめて高い。これは、なるべく多様な分野の学問に触れて広い視野をもってほしいからである。

カリキュラムの中で、もっとも必修的な性格が強いのは、演習への参加である。演習を通じて、文献資料を正確に解読する能力、様々な参考書を使いこなす能力、そして自己の研究成果を人前で発表する能力を身につけてもらう。演習では、古典中国語（漢文）とともに現代中国語が不可欠で、その点では、教養学部の第二外国語（もしくは第三外国語）で中国語をあらかじめ履修しておくことが望ましい。しかし中国語未修で進学した人でも、本人にやる気さえあれば、追いつくことは十分に可能である。

他方、講義の方は概論・概説と特殊講義に分かれている。概論・概説（中国思想文化学概論と中国思想文化史概説）は、中国思想の構造や歴史を広い視野から展開する講義であり、特殊講義は、ある限定されたテーマについて、深く掘り下げた分析を行う講義である。学外からの講師陣も多士済々で、2024 年度には 3 名の非常勤講師を委嘱し、現在我々が見ることのできる文献がどのように伝承されて来たのか、朱子学における基本概念がどのような倫理思想的体系を構想しているのか、そして中国哲学で頻繁に説かれる「聖人」がどのような内容・変遷を有するのかといったことに関する授業を開講している。諸君が進学してくる 2025 年度以降も、さまざまなディシプリンの専門家を招いて、多彩な授業を開講するつもりである。

次に、本専修課程の現在の専任教員とその授業の内容を紹介しよう。

儒教思想と礼教文化を専門とする小島教授は、「思想史」「政治史」「社会史」等といった従来のディシプリン枠を相対化する方法を模索中。演習では、入門書・概説書でおなじみの儒教史像を打破する試みを進めている。日本史にも関心を持ち、専修課程の枠を越えて「東アジアの海域交流」をテーマとした授業も行う。

近現代の学術思想と書誌学を専門とする陳捷教授は、中国の北京大学の出身。清末から民国にかけての古典文献をめぐる日中間の学術交流を中心に研究を重ねている。また清末民初のみならず、書誌学の歴史全般に強い関心を持つ。さらに日中二国に限らず、韓国朝鮮や琉球などの東アジア諸国も幅広く考察の対象としている。

道家道教思想を専門とする横手教授は、異端視や迷信視から学術的研究が遅れていた道教の歴史と思想を、古典読解を中心に文献学的手法で着実に明らかにしてゆこうと取り組んでいる。儒仏道の三教を均等に学び、三教交渉のダイナミズムと中国の精神世界の構造を理解させることにも努めている。

### （３）研究室の様子

最初にあげた数値が示すとおり、他研究室に比して学部学生は多いとは言えない。そのため、「中国思想文化学研究室」として大学院（組織上は「アジア文化専攻」のなかの「東アジア思想文化専門分野」と実質的に一体化しており、授業でも一緒になることが多い。学部学生にとっては、大学院生の先輩たちが勉強や生活についての身近な相談相手となっており、修学環境としては寧ろ理想的規模である。また、大学院等には東アジア各地からの留学生も現在 21 名が在籍しており、日本で生まれ育った者にとってはいろいろと刺激になる知見が得られる。

共同研究室は、2003 年に全面改築された赤門地区総合研究棟 7 階（713 室）にあり、学部学生もリファレンス・ツールの完備する明るく広々としたこの部屋を拠点にして、自由に勉強することができる。共同研究室のパソコン群には『四庫全書』のデータベースが収められているから、学生は中国史上最大の叢書である『四庫全書』を、あたかも自分の蔵書であるかのように利用することが可能である。他にも同じく大型叢書の『四部叢刊』をはじめ、各種『道蔵』、各種『大蔵経』、各種史料など、中国思想や中国

学を研究する上で欠かせない主要なデータベース類はほとんどがインストールされていてすぐに使える状態になっている。また、東京大学文学部の漢籍を一括収蔵する文学部漢籍コーナーは同じ建物の6階にあり、東洋文化研究所図書室は徒歩2分の位置にあり、さらに駒込の東洋文庫もバスで10分の場所にあるから、中国を研究する学生にとっては、文献利用の点でも、日本で最も恵まれた環境と言える。

#### （４）卒業論文および卒業後の進路について

学生生活は人によりさまざまであるが、おおむね3年生の段階では広く学ぶとともに、読解力などの基礎能力を修得し、4年生になる頃から卒業論文を意識しつつ、次第に関心の焦点を絞り込んでいく。7月上旬に開催される卒業論文構想発表会の頃には、ほぼ論文の狙いが明らかとなり、あとは書くだけということになる。教員も先輩も、論文の作成に対してはアドバイスを惜しまないだろう。

卒業論文をあまり深刻に考える必要はない。わずか2年間の勉強の成果にはおのずから限界があることは重々承知、教員も卒業論文に「完成品」を望んではいない。だが、いかに未熟な作品であっても、その人でなければ書けない何かがキラリと輝いていることが期待されている。これまで、この期待はほとんど裏切られたことがない。

卒業後の進路は多様である。東アジアの国々との結びつきがますます強まっている近年、この専修課程の卒業生は、確かに企業から求められる存在となってきている。就職が良好すぎてか、大学院への内部進学者が以前より減っているのが、むしろ教員側の悩みの種となっているぐらいである。

大学院に進学した場合、すぐれた修士論文が書ければ博士課程への道が開ける。博士課程に進んでからは、数年間外国（中国・台湾・米国など）に留学する者が多い。留学成果を活かしつつ、博士論文を執筆して学生生活を締めくくるのが近年のパターンである。博士課程修了者の研究職ポストへの就職実績は、周囲の厳しい状況に比べれば、まあまあである。

学部卒業で社会に出るつもりでせよ、研究者になりたいと思っているにせよ、あるいはまだ見当もつかないにせよ、中国や東アジアの思想や文化に興味があり、主体的に勉強してみたいと思っているならば、まずは一度、赤門総合研究棟の私たちの共同研究室（713室）に遊びに来てみてほしい。

# インド哲学仏教学

## ◇教員◇

教授：蓑輪 顕量、高橋 晃一

准教授：加藤 隆宏、八尾 史      助教：佐久間 祐惟

## ◇学生◇

学部：7名、修士課程：4名、博士課程：14名（大学院学生数は、インド文学・インド哲学・仏教学専門分野としての総数）

インドの思想文化は、3000年にわたる長い歴史を通じて、きわめて多様な哲学的・宗教的な文化・文献を蓄積し、その豊かさと奥深さをもって、アジアはもちろん、西欧の人びとをも魅了しつづけてきた。なかでも、インドからアジア各地に広まった仏教は、東南アジア、東アジア、さらにチベットにおいて、今日も力強い生命を保ち、多くの人々の生きる指針となっている。洋の東西の知を架橋する、この思想文化に触れることは、現代の人びとが直面する諸問題に、新鮮で貴重な知見を与えてくれる。

インド哲学仏教学専修課程（略称：印哲あるいは印哲仏）は、こうしたインドの思想文化と、インドに起源をもちアジアの諸地域に展開した仏教の思想文化の、教育と研究を目的とする。その研究対象は、インドの古代から近代の思想文化に及び、仏教に関しては、インドはもちろん、他のアジア諸地域（東南アジア・東アジア・チベット）にまでわたる。きわめて広い研究領域をもつことは、本専修課程の特徴であり、大きな魅力の一つである。

インド思想ならびに仏教は長い歴史を持ち、広大な諸地域へと多様な展開をとげてきたので、その研究方法は多様であり、歴史学、考古学、人類学あるいは比較思想など、さまざまな切り込みが可能である。ただ、いずれの方法を取るにしても、それらに共通する基礎となるのは、文献の研究である。長大な歴史を通じて、人びとはつねに伝承された文献にみずからの現在を照らし、その理解をふたたび文献へと映し出していった。本専修課程では、思想の過程が深く刻まれた原典の解読に重点を置き、その基礎力の養成を目標とする。一見、迂遠とも思われるこの道筋は、その後のさまざまな研究の可能性を開く、最も確実なアプローチである。



奥ゆきの深い原典を読みこなすためには、語学力と思索力の双方が必要となる。インド思想や仏教思想は、諸言語のなかで最も完成度の高い言語と見なされるサンスクリット語によって、その主要な原典が記されている。言語の完成度は思想の完成度に連動しており、中国や日本の仏教も、サンスクリット語によって思想の原型がかたちづくられている。原典の解読を通し、洋の東西の知の底流にある思想を解明することは、現代の諸問題をとらえるうえでの確固たる基盤の形成につながる。本専修課程がサンスクリット語の学習を尊重する所以である。

本専修課程に進学を希望する学生は、教養課程で哲学的なものの考え方に習熟するとともに、あわせて諸外国語（英語・ドイツ語・フランス語・中国語など）に積極的に挑んできてほしい。サンスクリット語文法は本郷でも開講されているが、駒場で学んでいれば、それだけ早く原典に向きあい、より深い世界を味わうことができるようになるだろう。

本専修課程は、起源を明治 43 年（1910 年）に遡り、百年を超える歴史をもつ。この間、常に新しい問題意識に立って伝統を刷新しながら、日本の、ひいては世界の学界・思想界に大きな貢献をなしてきた。専修課程の名称として、長い間、創設当時の「印度哲学」を用いてきたが、平成 6 年（1994 年）より、専修課程の内容をより見えやすくする目的で、「インド哲学仏教学」に改められた。

ここで本専修課程の専任教員とその専門、及び講義の内容を紹介しよう。養輪教授は東アジアの仏教、主に日本仏教を担当する。その主たる領域は日本の中世の時代にあり、交衆と遁世門という二つに区分される僧侶の日常の営みに配慮しながら、彼らの残した資料から思想的な解明を進めている。昨今では身心を見つめる止観の伝統にも関心を持って研究を進めており、内閣府のムーショット 9 にも参画している。2023 年度は院政期の資料である『安養集』や鎌倉時代の凝然の『華嚴法界義鏡』の輪読を進めた。寺院に残る写本資料などが扱えるようになるとともに、思想的な展開が理解できるようになることを目指している。また 2024 年度も比較文化的な視点から仏教を捉える比較仏教論に取り組む。

高橋教授はインド仏教（論書）を担当する。その主たる研究領域は大乘仏教の瑜伽行派の思想で、特に唯識思想の成立過程の解明を進めている。主著『『菩薩地』『真実義品』から「撰決択分中菩薩地」への思想展開』のほか、



『唯識と瑜伽行（シリーズ大乘仏教7）』では「初期瑜伽行派」の章を担当している。また、2021年3月には『阿毘達磨集論』の伝承：インドからチベットへ、そして過去から未来へ』を出版した。さらに、2023年2月には、一般向けの概説書として『心と実存 唯識』を刊行した。2023年度は、演習では瑜伽行唯識派の基本文献である『唯識三十頌』のサンスクリット原典を講読したほか、瑜伽行唯識思想の基本典籍である『瑜伽師地論』のなかでも、これまでほとんど研究がない「勝義諦に関する偈頌」の輪読を行った。また、仏教概論では、インド仏教思想を理解するための基礎的な知識について解説した。

加藤准教授はインド哲学（仏教以外）を担当する。その主たる研究領域はヴェーダーンタ派の思想で、同派において聖典とされるウパニシャッド文献、『ブラフマ・スートラ』、『バガヴァッド・ギーター』に対する註釈文献などの分析を通じて、現代にまで脈々と受け継がれるヴェーダーンタ思想の展開について研究を進めている。講義では3000年におよぶインド思想を通時的に概観する「インド哲学史概説」を担当する。また、演習では、ニヤーヤ学派の根本経典『ニヤーヤ・スートラ』とその註釈『ニヤーヤ・バーシュヤ』、サーンキヤ学派の根本経典『サーンキヤ・カーリカー』とガウダパーダによる註釈『ガウダパーダ註解』、インド言語哲学文献『ヴァーキヤパディーヤ』などを読み、インド哲学の基本教説および諸問題について学んでいる。また、註釈文献の取扱い方などについても解説する。その他、2024年度も引き続き「サンスクリット語初級」（後期、駒場）を担当する。

八尾准教授はインド仏教（経・律）を担当する。仏教出家者集団の生活規則を集成した聖典「律蔵」を主な研究領域としており、特に経典、仏伝や説話類を大量に含みインド内外に広く伝播した「根本説一切有部律」とよばれる律蔵を扱ってきた。出家者たちの現実生活の諸問題に対処する律蔵と、個人の苦とそれからの解放を説く「経蔵」とがどのような相互関係のもとに成立してきたかに関心がある。学部の演習では、スリランカ、東南アジアの上座部仏教圏に仏典の言語として伝わったインドの言語であるパーリ語の文献を扱う。前半で文法を解説し、後半は経典を輪読する予定である。また駒場では他宗教との比較を通して初期経典の思想を紹介するとともに（前期）、経典から論書、文芸作品等を含むインド仏教の文献史を解説する（後期）。

以上のほかに、非常勤講師の先生方が、サンスクリット語、チベット語、漢語にもとづく多彩な講義を開講している。2023年度は馬場紀寿教授（東洋文化研究所）が「上座部仏教文献講読」（大学院と共通）、柳幹康准教授（東洋文

化研究所)が「中国仏典講読」(大学院と共通)、前川健一講師が「中世日本華嚴教学研究」(大学院と共通)、護山真也講師が「仏教認識論文献講読」(大学院と共通)、根本裕史講師が「チベット仏教文献講読」(大学院と共通)を担当した。

なお、梶原三恵子教授(インド語インド文学専修課程)が担当するサンスクリット語文法は、本専修課程の学生のほとんどが履修する。その単位は本専修課程の特殊講義の単位にあてることができる。また、「外国語」として開講されている「チベット語(1):口語文法」「チベット語(2):文語文法」および「ヒンディー語(1)(2)」も、大乘仏教やインド哲学の研究を深める上で聴講してほしい。

本専修課程の必修単位は 40 単位で、インド哲学概論・インド哲学史概説・仏教概論・比較仏教論から 8 単位、特殊講義 12 単位、演習 8 単位、及び卒業論文または特別演習 12 単位である。その他、選択が 36 単位で、計 76 単位が卒業のために必要な単位である。単位取得に当って、例えば、教養課程でサンスクリット語文法を終えた学生は、改めてその授業を取らず、サンスクリット語を用いた演習によって代用できるなど、意欲ある学生のためにさまざまな配慮がなされている。また、選択履修の 36 単位分は本専修課程の開講科目に限定せず、文学部で開講されている多彩な科目を、各人の興味・関心に沿って、積極的に履修し、幅広い教養を身につけることも大いに歓迎される。

本専修課程では、卒業に当って、卒業論文のほか、特別演習を選択することができる。その場合、学生はサンスクリット文献(『アビダルマ・コーシャ・バーシュヤ』『バガヴァッド・ギーター』など)や漢文文献(『大乘起信論』『八宗綱要』など)、あるいはインド思想(史)・仏教思想(史)に関わる重要な文献・研究書から、3 課題(各 4 単位)を選んで独習し、学年末に試験を受け、合格しなければならない。大学院に進学を希望する学生は、特別演習で原典解読の基礎力を養い、進学後、修士論文の研究課題に沿った原典の読解に着手することが通例となっている。一方、卒業論文に取り組む学生も、2 年間の勉学の集大成として、各自で課題を見出し、有意義な研究成果を上げ、論文として提出している。

本専修課程は、教養学部から進学する学生のほかに、他専修課程、他学部、あるいは他大学を卒業してから学士入学する学生も含まれ、多彩である。

卒業後は大学院に進学する学生が多いが、教職や一般企業に就職する学生もいる。最近ではマスコミ、県庁、コンサルタント会社、出版社、メーカー等に就職する学生や、芥川賞を受賞した小説家も出ている。大学院はインド語インド文学専修課程と共同で、インド文学・インド哲学・仏教学専門分野を組織している。大学院の学生は若手研究者として評価されている者も多く、学部学生の学習を丁寧に補助してくれている。また大学院には、外国からの留学生も多く、文学部の中でも最も国際色が豊かな研究室の一つである。

大学院生に比して一学年の学部生数は4名程度と比較的小人数であり、学生同士、あるいは教員と学生との関係は緊密である。毎年春には、著名寺院の見学などを含む研修旅行を行ない、また年に数回の研究例会では、先輩たちの意欲に満ちた研究発表を聞くこともできる。さらにはゼミ合宿を行っている教員もいる。

あらゆる面で昏迷の深い現代だからこそ、もう一度、人間精神の根本に立ち返り、インド思想や仏教の哲人たちの奥深いことばに静かに耳を傾けながら、現代に生きる意味をともに考え、語りあおうではないか。

## 倫理学

### ◇教員◇

准教授：古田徹也、板東洋介

助教：加藤喜市

### ◇学生◇

学部：11名、修士課程：10名、博士課程：5名

「倫理学」という学問に、人が抱くイメージや期待にはおそらくさまざまなものがあるだろう。日常の行為の善悪について研究するということの思い浮かべる人もあるであろうし、また、ソクラテスの生に重なるような「よき生」の追求を思い描く人もあるだろう。自らの人生についての問いを直接重ねようとする人もあるだろうし、また、今日的な社会問題への積極的な発言を期待する人もいよう。倫理学専修課程に進学してくる学生諸君の思いも、そのようにきわめて多様なものであろう。

しかし、それが文学部のなかで、しかも思想系の学問分野の中での倫理学研究となると、そのありかたも限定されてくる。文学部の学問が原典テキストの精密な読解を身上とするように、倫理学専修課程の学問も、倫理学についての原典テキスト、就中古典のテキストの読解をその基本とすることになる。その点では思想史研究が中心となるのであり、現実的課題との関わりは間接的なものとどまるということになろう。そのことはしかし、倫理という言葉に対する各人各様の思いを否定するものでは決してない。むしろ古典の読解にこそ、それぞれの思いが最も豊かな奥行きをもって現実化する場面があるというのが、われわれの確信である。

したがって、倫理学専修課程は、独断と空理空論を控えるという最低限の謙虚さを要求される以外は、きわめて自由な雰囲気には満ちている。かつてこの研究室の主任教員であった和辻哲郎は、日本近代において特筆すべき倫理学の体系を築き上げたが、それは、西洋思想と東洋思想の融合および規範学としての倫理学と事実の学としての諸学の融合を目指したものである。さらに、和辻は、倫理学以外に広く人文科学一般の分野でめざましい成果を上げたことで知られているが、この多様な学問領野に開かれているという性格は、今日においてなお生きていると言えるのである。学生の

研究対象の選択も各人の大幅な自由に任されており、実際、これまでの卒業生の研究テーマも、洋の東西を問わず、また古代から現代に至るまで、まことに多彩である。

倫理学専修課程の講義・演習の対象領域は、西洋の倫理思想と日本のそれとに二大別される。倫理学がいち早く自覚的な形態をとった西洋の思想伝統を学ぶことは、日本倫理思想史を専攻しようとする学生にとっても欠かすことはできない。一方、西洋の倫理学に関心を持つ者にとっても、自らが背負う伝統との対話は必要である。相異なる領域への幅広い目配りが求められるのが当専修課程の特色である。

以下、教員の紹介を兼ねて、令和五年度に倫理学専修課程が実施した全授業を列举する。

頼住光子教授は、日本文化の根幹を形作っている仏教思想について、道元や親鸞の著作を中心としつつも、日本仏教の全般、さらには大乘仏教の經典論釈全般にわたって幅広く研究している。「倫理学概論（Ⅱ）」では、日本における倫理思想史の展開について、仏教、儒教、神道など主要な教説や文学等を手掛かりとしながら概説した。「倫理学演習」（「日本倫理思想史演習」）では、日本倫理思想史を考えるための基本文献として、主として法然『選択本願念仏集』のテキストを講読した。それを通じて受講者が、日本倫理思想史の基本的な発想方法について習熟し、日本倫理思想史研究の方法論を身につけることを目指した。「東洋倫理思想史概説（Ⅰ）」では、日本の仏教思想の展開についてインド仏教以来の諸仏典の読解をてがかりとしつつ跡づけた。また日本仏教の特色を比較思想的観点から検討した。

古田徹也准教授は、「言語」「心」「行為」の各概念を手掛かりにして、主に英語圏とドイツ語圏の現代哲学・倫理学を研究している。主に関心を向けているのはルートウィヒ・ウィトゲンシュタインの哲学である。「西洋倫理思想史概説」では、「言葉」というキーワードを軸にして、古代から現代までの西洋の倫理思想史を跡づけた。また、「倫理学演習」では、ウィトゲンシュタインの主著『哲学探究』を精読するほか、現代の英語圏の倫理学における基本文献を批判的に検討し、西洋倫理思想に本格的に足を踏み入れるための知識と思考能力を受講生が養うことを企図した。さらに「倫理学特殊講義」（※長野邦彦助教との連名講義）では、倫理思想史全体の鍵となるいくつかの概念および思想家について概観し、倫理学という学問に入門する手引きとした。

その他、令和五年度の非常勤講師による講義の題目は、以下の通りである（肩書きは令和五年度当時のもの）。

|                  |                              |
|------------------|------------------------------|
| 中野裕考講師（お茶の水女子大学） | 倫理学概論（Ⅰ）「倫理学の基本概念」           |
| 吉田真樹講師（静岡県立大学）   | 東洋倫理思想史概説（Ⅱ）「倫理学・日本倫理思想史の基礎」 |
| 石井清純講師（駒澤大学）     | 倫理学特殊講義「日本の禅思想」              |
| 三重野清顕講師（東洋大学）    | 倫理学特殊講義「西洋近代哲学の諸問題」          |

このように、倫理学専修課程は、一方では古典的学問研究を尊重しつつも、他方では、哲学、社会科学、宗教学、日本思想等の諸学問に開かれた幅広い内容を持つ学問を目指しているという点で、思想系学科のなかでも特徴を示していると言える。そのことは、当専修課程を卒業し、その後研究者の道に入った先輩の学問にも明らかである。そのような条件をどう生かすかは、学生諸君の自発的研究に期待されている。

なお、卒業生の進路について言えば、当専修課程を卒業した後、大学院への進学を希望する者、官公庁・民間企業に就職する者等、さまざまである。就職先も、公務員、マスコミ、出版社、金融、広告代理店、製造業等、きわめて多彩である。

# 宗教学宗教史学

## ◇教員◇

教授：藤原聖子、西村明

准教授：富澤かな、渡辺優

専任講師：志田雅宏      助教：佐藤清子

## ◇学生◇

学部：30名、修士課程：6名、博士課程：24名

### (1) 宗教学を学ぶとどうなるか

「宗教学を学ぶとどんないいことがありますか？」——ChatGPTに聞いてみた。回答は以下の通り（2024年3月現在）。

1. **多文化理解**: 宗教学は、世界のさまざまな信仰体系についての理解を深めることで、異文化間の寛容性と共感を促進します。異なる文化背景を持つ人々と効果的にコミュニケーションを取り、共存のための基盤を築くことができます。
2. **批判的思考能力**: 宗教的テキストや慣習を分析する過程で、批判的思考や論理的な議論を構築する能力が鍛えられます。これらのスキルは、学問的な研究だけでなく、日常生活においても重要です。
3. **倫理的・哲学的深化**: 宗教学は、人生の意味、倫理、存在についての基本的な問題を探求する機会を提供します。これにより、より深い自己理解と、周囲の世界への洞察が得られます。
4. **キャリアの可能性**: 宗教学の知識は、教育、国際関係、社会サービス、メディア、文化施設の管理など、幅広い分野でのキャリアを支援します。グローバル化が進む現代において、宗教的な理解は多くの職業で重宝されます。
5. **自己理解の促進**: 宗教学は、自己の信仰や価値観を深く掘り下げ、他者との関係性を再考するきっかけを提供します。異なる視点に触れることで、自分自身と世界を新たな目で見ることができます。

さすが ChatGPT、気持ちを前向きにしてくれる名答だ。2年間の学びでこれだけのことが身についたら素敵だと思った人には意外かもしれないが、



実は、本専修課程の学修効果はこれら5点に留まらない。これらを相対化していく広い視野が身につくのだ。どういうことか。

1は一見もっともだが、異なる宗教を理解することは常に共存につながるのだろうか？ 宗教情報がその地域の侵略に利用された例は枚挙にいとまがない。宗教学はその危うさを含めて多文化理解なるものを掘り下げる。

2の批判的思考力の重要性は全くその通りだが、なぜその対象が宗教的テキストと慣習に限定されているのだろうか？ 宗教はその2つだけから成るのか？ しかも、他人が信じる聖典を批判してしまったら、異文化理解にならず、1と矛盾しないだろうか？

3は宗教学の授業の間接的効果だ。確かに価値や倫理の領域に踏み込むが、教員が特定の教えを示し、それに従えばより良い人生が送れると説くことはない。それは各学生の自由に任されている。これは宗教学と宗教教育（宗教系の学校の宗教科の授業）の違いでもある。

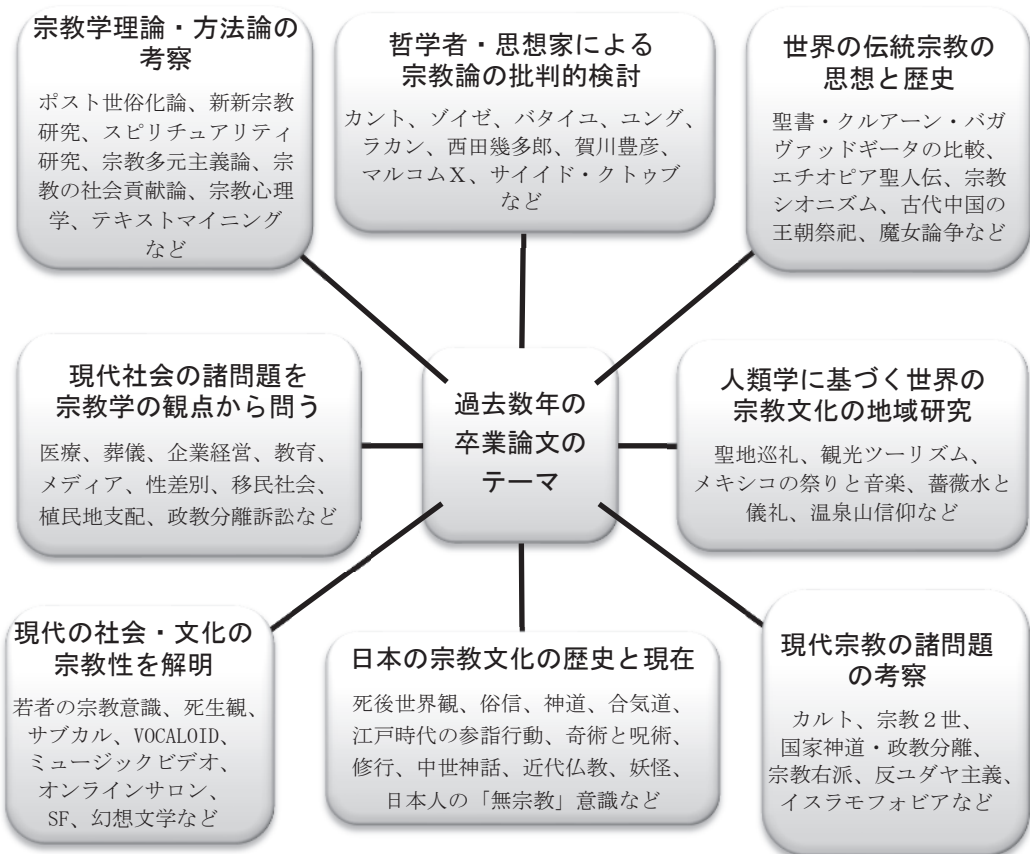
5は3と同じく副次的効果だ。時間がゆっくり流れる文学部では、5のためにひとり静かに宗教書に向きあうことも可能だ。しかし5といい3といい、自己理解の必要性が強調されているが、宗教は社会現象でもある。このご時世、宗教と社会・政治の関係を分析することも重要では？

1～5の全体について気になるのは、いくつかの前提が潜んでいることである。まず、学びを人生や社会に「役立たせよう」という意識がいささか過剰なこと。これは「どんないいことが」という質問のせいかもしれないが、何のために役立たせようとしているのかを見極めずにただ従う態度には危うさも潜む。また、学ぶ側が信仰を持っていること、あるいは宗教は個人的・内面的なものということが想定されていないだろうか。ここから裏返しに推論されるのは、ChatGPTのデータソースは、社会の多くの人が自覚的に宗教的信仰を持ち、さらにコスパを重視する国がメインだということ。それが世界の標準になる前に、あるいはなった後でも、その底にある価値前提をより広い視野から見ることができる本専修課程で学ぶことは誰にとっても力になるだろう。

## （2）学生の関心

本専修課程に集まる学生の問題関心は多彩である。それも研究の分野や方法論が多様なだけでなく、学問的な好奇心の方向、自分の生き方にまで関わる多様性である。それは卒業論文のテーマにもよく表れている。

研究の方法論でいえば、哲学・歴史学・文献学・心理学・人類学・民俗学・社会学などにわたり、問題関心の点からは思想と宗教の関係・地域文化を特色づける宗教的要因・現代人にとっての宗教の意義などが主要なものになっている。近年は、日本人の死生観、医療・被災地現場での宗教的ケアなど、死生学との関連領域のテーマも増えている。



### (3) 専修課程の特質

人類の誕生以来、人間のいるところはどこでも、常に人間と共に存在してきたと考えられるのが宗教である。宗教は人間の価値観や文化形成と密接に関わっているために、古今東西、宗教的世界観や信念に結びつかない・由来しない法秩序や儀礼体系、風俗習慣はほとんど存在しないほどである。当専修課程は、そうした極めて広範かつ多様な領域を相手に、「宗教」とは何かという問題を、様々な視点と多様な方法によって研究する場所である。

学問は客観的であることを目指さなければならない。とはいえ、人間の生死を意味づける宗教を学問の対象として扱うのであるから、単に対象を

突き放して観察すれば済む問題ではなく、他者の理解、他者との絶えざる対話が必要となる。また、宗教は世俗を超越する志向性を有するゆえに、人を魅了すると同時に、その外側の社会にとり、非常に危険なものになる場合がある。しかしそのような宗教はまた、社会と無関係というわけでもない。社会の何らかの問題に対して警鐘を鳴らしていたり、あるいは社会の負の部分映し出す合わせ鏡であったりするのである。つまるところ、正統的宗教であろうと、異端的宗教であろうと、それを知ることは私たち自身を知ることにつながる。宗教学を学ぶにあたっては、批判的精神を失わず、また自己満足や独善に陥ることのないよう、見識を磨いてほしい。

#### （４）教員の紹介と授業内容

他の専修課程との違いとして挙げられるのは、（平成 27 年度より）指導教員を定めてはいるが、いわゆる「ゼミ制」ではなく、基本的に全教員が全学生を平等に指導していることである。学生の側からすれば、その時々に関心にあわせて、自由に授業、指導者を選ぶことができる。

藤原 聖子：学部では宗教を理解するとはどういうことかという方法論的関心から出発し、西洋近代的な枠組みに基づく宗教学の理論を比較研究のためにどう組み直すか、変化する現代の宗教の諸相をどうとらえるかに取り組んできた。本年度は、宗教学の主要な理論を映像作品に対して「使ってみる」ことを目的とした講義と演習、陰謀論などを「虚構」をキーワードに宗教学的に分析する演習、内定者向けにはアクチュアルな問題に宗教学がどう応えるかを知る講義と、宗教学の基礎を学び、ゼミ発表の助走をする演習を開講している。

西村 明：卒論以来、他者への暴力と宗教の関わりに関心を抱いてきた。大学院進学以降は、非常時の犠牲者の慰霊を中心テーマとしている。そこから、より広い戦争と宗教の関わりについても関心の射程となる。本年度は慰霊についての概論と近現代日本宗教史の概説講義のほか、演習ではそれぞれ、第二次大戦期の米国における日系人強制収容時の信仰生活を論じた文献の講読、現代社会の呪術に関する論文集の講読、および研究室所蔵の脇本平也名誉教授の研究・教育資料の整理・分析作業を行う。

富澤 かな：近代インド周辺の宗教性やオリエンタリズムの問題を、特に言説と慰霊表現に着目して研究している。宗教と東洋（インド）と死と、

バラバラなテーマにも見えるかと思うが、これらはみな、近現代において世界と日常から疎外されてきたものである。そこに見られる、人間が自／他を分かち・結ぶ思考のあり方に関心を持っている。初年度となる本年度は、上記の関心に沿い、「宗教・東洋・死を語る視座」の特殊講義と、墓石から宗教史を見直す演習（S ターム）と、オリエンタリズム論と死生学の関係を考える演習（A ターム）を行う。

渡辺 優：「他者学」としての宗教学に惹かれ、信じる者の言葉を共感的かつ批判的に吟味することの醍醐味を知り、宗教思想研究へと向かう。近世西欧キリスト教圏に輩出した神秘主義文献の考究を軸に、「神秘主義」を再定義し、別様の「宗教」思想として現代に語りなおすことを試みている。本年度は、前期課程の比較思想（神秘主義再考）、西洋神秘主義思想史を通覧する特殊講義を担当するほか、演習では、キリスト教神学者の現代宗教論、ヤスパース、「女性」霊性史・神秘主義研究の基本文献を講読する。

志田 雅宏：学部では聖書のヨブ記の解釈をユダヤ教とキリスト教において比較し、大学院では中世スペインのユダヤ教思想を研究した。現在は、中世ユダヤ教世界における宗教論争を専門とする一方、現代的な諸問題にも関心を持つ。本年度は、ユダヤ教における「聖戦」の観念についての講義、現代ユダヤ教におけるフェミニズムについての講義、中世ユダヤ教思想（イエフダ・ハレヴィ『クザリ』）の講読演習を担当する。

佐藤 清子：学部以来、アメリカ合衆国を地域的対象に研究を行ってきた。歴史研究を中心としつつ、現代アメリカ宗教の動向にも常に注目し、近年は政教関係・宗教の自由の歴史を軸に探究を続けている。本年度はジェンダーや人種を分析概念に用いた宗教史研究について（S ターム）、また、現代における宗教と文化という観点から（A ターム）、アメリカ合衆国の宗教を事例に講義を行う。

この他、毎年、3～4名の非常勤講師を招いている。

#### （5）卒業論文と卒論ゼミ

学生は各自の問題関心に沿って履修科目を選択し、各自の研究を進めることになるが、専修課程に進学後、新しい問題に目覚める場合も多い。だから焦って早くから自分の興味の幅を狭める必要はない。期待されるのは自分でよく考え、見極めていく姿勢であり、先人の業績を批判的に継承し

つつ新たな問いを発していく目的意識と気概である。そのための挑戦の場となるのが「卒論ゼミ」であり、その成果となるのが卒業論文である。

卒論ゼミは平成9年度から始められた試みであり、毎年Aセメスターに開講する。その趣旨は、複数の教員の出席のもと、4年生は卒業論文の内容に関する研究発表を行ない、それを元に出席者全員で質疑応答を行なうことで、卒業論文の質的な向上をはかる点にあり、また3年生にとっては自分の問題関心に沿った研究あるいは重要文献の紹介を行ない、将来の卒業論文執筆に向けた準備を整える点にある。

卒論については、この全体の演習のほか、希望者に対する個別指導体制も充実を図っている。卒論執筆は就活と関係ないという思い込みがよくあるが、実際には、卒論ほど問題発見・解決力、コミュニケーション力が総合的に問われる課題はない。また、論文の書き方に関する指導書は数多いが、自ら書いてみて、それに対して他人から指摘を受けてはじめてわかることも多い。一人ひとりにカスタマイズした指導により、納得のいく卒論を書きあげられるようサポートしている。

#### (6) 研究室について

宗教学研究室は迷路のような法文2号館の3階にある。ここには宗教学関係の事典や入門書がそろい、プリンター、スキャンも可能なコピー機があって、学習や発表の準備にはとても便利だ。相談役の助教、事務補佐員が常駐している。非常勤講師の控室でもあり、大学院生も頻繁に出入りする。昭和初期から愛用されてきた、木製の大テーブルを囲んでの、学問的な語らいや雑談、就活の情報交換、有志の勉強会などに利用されている。

研究室の恒例行事は研究会、忘年会、予餞会など多々あるが、最も重要なのは1泊2日の研究室旅行である。学部生・院生・教員の親睦をはかりつつ、様々な宗教施設を見学するもので、3年生の歓迎会の意味もある。

#### (7) 卒業後の進路

就職先は、公務員・コンサル・情報通信・金融など、文学部全体の傾向とほぼ同じである。在籍中に宗教学独自の資格「宗教文化士」を取得することもできる。世界の宗教の歴史と現状について一定の理解に到達した者に認定される。研究者を目指す場合は宗教学専攻の修士課程に進学することが多いが、関心にあわせて他の専攻や他大学の院に進むケースもある。

# 美学芸術学

## ◇教員◇

教授：三浦俊彦、吉田寛

准教授：桑原俊介

助教：鈴木亘

## ◇学生◇

学部：90名、修士課程：15名、博士課程：11名

美学芸術学専修課程は、その名が示すとおり、美や芸術に関する研究を行うところです。しかしその内容は、対象も方法もきわめて多岐にわたっています。提出される卒業論文のタイトルをちょっと眺めてみただけでも、カントやベルクソンの思想といった、美学の「王道」ともいえるテーマの研究に加えて、音楽や映画といった個別の芸術ジャンルにかかわる作家研究や作品研究など、相当に多様です。とりわけ最近では、「美学(aesthetics)」をその語源に即して「感性論」として捉え返す試みが盛んになってきています。そうした感性のあり方に関わる基礎研究はもとより、そのような視点をふまえた、現代の文化をめぐる「感性文化論」的な研究が急速に増えており、都市環境やインターネット・メディアなど、その射程は狭義の「芸術」の枠をはるかにこえた多彩な広がりを見せています。はじめてみた人があるいは、この研究室は単なる「好き者」の集まる同好会のようなものにすぎないと思われるかもしれません。しかしそうではありません。学問としての厳格さを守りながら、他方で、芸術のみならず、文化のアクチュアルな状況と関わる多様なテーマの共存を許容している、このわれわれの専修課程のあり方には、それなりの歴史的・思想的背景があります。

この専修課程が哲学、倫理学、宗教学等と同じA群に属していることからわかるように元来、美学は美という価値について、また芸術学は芸術という人間の営みの本質について探求する哲学として展開されている学問です。ただ単に個別的な芸術作品の歴史や内容について関心をもつだけでなく、美や芸術をめぐる現象の根源にまでさかのぼってその本質や根底にある構造を解明しようとする問題意識が、この美学芸術学という学問領域を支えているのです。この学問を学ぶということは、そういう問題意識を



共有するということであり、一見趣味的な対象を扱っていても、それはたとえば、ただ単に芝居の見どころを解説するとか、音楽の歴史を調べたりするということとは違う視点から対象をみようとする姿勢が背後にあるのです。

そういう意味で、美学芸術学専修課程に進学してくる学生には、美や芸術に関わる体験を当然の如くにただ漫然と積み重ねているのではなく、そのようなごく当然にみえる体験の中で、当たり前のように受け入れてしまっている事柄自体に疑問を抱いて、その根拠をあらためて問い直してみようような態度が求められます。

しかしそのことは、個別的な問題はいつでもよく、本質を問うことだけが重要だというようなことでは全くありません。もともと、美的体験や芸術体験といったものは個人的な体験の色彩が強く、なかなか一般論に解消して論じにくいことから、具体的な事例から出発して思索を深めるという方向をとることはある種の必然でもあったのですが、とりわけ最近では、他の分野同様、美学や芸術学という学問も大きな転機にさしかかっており、そのため具体的・個別的な考察と連動した形で問題を捉えるような態度が強く要請されるようになってきているからです。

早い話が、芸術というような概念自体、このような具体的・個別的な考察を欠いては正しく捉えることはできません。芸術という概念の歴史を調べてみれば、われわれが今日使っているような意味でのこの概念が成立し、「芸術家」と呼ばれるような社会集団が生まれてくるのは、実はそれほど古いことではなく、18世紀以降、どんなに古く見積もってもルネサンス以降のことであるということがわかります。しかしそれもあくまでも理論の上での話であり、18世紀になっても、場合によっては19世紀にはいっても、芸術は現実には必ずしも今日考えられるような自律的な存在として機能したわけではありませんでした。モーツァルトはもちろん今日われわれが「芸術家」として認識するような一面をそなえていた部分もありますが、注文主の希望に応じて仕事をする「職人」に近いような部分もかなり強くもっています。

だから「芸術」などという概念は取るに足らないなどと言っているのはありません。むしろ、「芸術の終焉」などということが取り沙汰される今日でも「芸術」は巨大化しています。過去の芸術の枠組みを解体しようとしているかのようにみえる現代の芸術も相変わらず「芸術」として機能し



続いていますし、それぞれの文化の中では本来「芸術」と呼ばれていなかったような様々な民俗芸能や民芸品などが、今日では「芸術」との関わりのもとに語られています。そういう状況を考えたとき、それらを無反省的に一括して「芸術」という名前で括ってしまい、あたかもその本質が一義的に規定できるかのような形でものを考えることがいかに危険であるかがわかるでしょう。同じ芸術という名でよばれている対象でも、それらが芸術と呼ばれるにいたる過程は千差万別であり、その過程には当の対象を取り巻く社会状況や経済的要因をはじめとする、様々な要素が関わっているのです。それゆえわれわれは、当の対象が芸術であるという自明の前提から出発するのではなく、その当のものが「芸術」として機能するに際して、どのようなメカニズムや論理が働いたのかということを個別的なケースに即して具体的に見極める必要があります。われわれの専修課程が理論的な考察を中心にすえながらも、とりわけ芸術の現代的な状況に関わる個別的・具体的な問題意識や研究を重視しているのは、そのような理由によっているのです。

このことはまた今、美学や芸術学という学問がその内部の論理に閉じこもることなく、歴史学、社会学、文化人類学等の様々な隣接分野とも連動した学際的な研究を展開することを求められているということを示しています。その意味で、美学芸術学に進学してくる学生は、ただ芸術が好きで芸術についてよく知りたいということをこえて、その種の人文・社会的な問題意識の上に立って、むしろその延長上で芸術を対象に考えてみるというような心構えがもとめられるとも言えましょう。

しかしそのことは決して、先人たちが積み上げてきた伝統的な美や芸術についての思考の歴史をないがしろにしているということではありません。たしかに現代のわれわれを取り巻く美や芸術に関わる様々な新しい状況は、これまでの美学や芸術学だけではなかなか捉えきれないところがあることは事実でしょう。しかしだからといって、自分の学問的な基盤を何ももたずに無手勝流でいったのでは、いたずらに対象の新しさに振り回されるだけで、何も得ることはできないでしょう。「芸術」と呼ばれるものが多様化し、新しい状況が生じているという認識自体、伝統的な「芸術」の概念をしっかりと押さえているからこそ可能なのです。美学や芸術学の先人たちの知見を踏まえて、そういう覗き眼鏡を通してみると、同じ世界が違って見えるようになる、そのことにこそ、われわれの専修課程の存在意義がある

のです。一見したところ新しく現代的であると思われたことがらが決してそうではなく、過去にも論じられた問題であったり、またその延長上にあったりすることがわかることもあります（人間なんて、そんなに簡単に「進歩」するものではないのです）。

そんなわけで、われわれの専修課程ではその覗き眼鏡の性能をみがくために、古典的なテキストを精読し、それを厳密に研究する訓練をすることに重きを置いています。美や芸術という概念が、さしあたって西洋の文化に深く根ざした形で出てきたものであるという事実を踏まえるならば、そのためには西洋語のテキストを読むことが不可欠となります。英語に加えて少なくとももう一つは得意な言語を作っておくことが必要でしょう（ちなみに、大学院進学のための試験にも2カ国語が課せられています）。ギリシャ語やラテン語も修得するのは大変ですが、それらを修得して古代・中世から伝わる様々な文献を読みこなすようになれば、覗き眼鏡の性能が格段に上がることは間違いのないところです。

ここで教員スタッフの専門と授業について紹介しておきましょう。三浦教授は英米の分析哲学の手法を美や芸術に関わる問題に応用して、虚構世界、フィクション、多世界解釈、多宇宙モデルといった主題に新たな光を当てています。吉田教授は、現代のメディア環境下における人間の感性のあり方やその変容を、認知科学や工学といった関連諸科学とも連携しつつ、哲学的に探究しており、最近ではとくにデジタルゲーム（コンピュータゲーム、ビデオゲーム）を主な研究対象としています。桑原准教授は、西洋美学や解釈学に関わる概念史研究、さらには西洋中世から近世にかけての虚構存在の存在論的ステイタスを、形而上学・様相論理学・認識論・詩学・技術論などに即して問い直す哲学史研究に従事しています。

これら3人のスタッフを中心に多様なカリキュラムが組まれています。美学や芸術学の概論やそれぞれの専門に応じた特殊講義などの講義科目が開講されるのはもちろんですが、とりわけ重要なのは、原典講読、演習など、学生の参加を前提に成り立つ科目です。原典講読としては、フランス語、ドイツ語、英語の原典講読の科目が開講されていますが、これらは外国語の訓練になる以上に、本や論文をクリティカルに読むという、研究にとってもっとも基本的な姿勢を身につけるためのものです。原典講読が学問的に「読む」ことの鍛錬の場であるとするならば、演習は学問的に「書く」技術を修得する場であり、これは各学年で指定されたコマを履修する

ことが義務づけられています。実際的な技術というよりは、ものの考え方や論の立て方を主眼としたものですから、レポートや卒業論文を書くという具体的な場面で応用できる以上に、ものの見方や考え方を養うという効果の方が大きいかもしれません。また、とりわけ個別芸術学は多様な分野を包含しているため、他大学から演劇学、美術学、音楽学、文芸学、建築学、映画学等諸分野の専門家を非常勤講師として招いています。カバーしなければならないジャンルが多岐にわたっているため、個々の領域について毎年各ジャンルの講義を全て開講するわけにはいかないのですが、可能な限り多彩な領域を、また古典の世界から現代の状況に至るまで、多くの問題意識をカバーできるようなカリキュラムになるよう、心がけています。

卒業には 40,000 字程度の卒業論文を書かなければなりません。論文のテーマは、広い意味での美や芸術に関わっておりさえすればどのようなテーマを選んでもいいのですが、どのようなテーマを選ぶにしても、ただ一生懸命勉強してレポートをまとめたというようなことではなく、自分自身の問題意識を磨き、自分で問題設定を行った上で、その問題に論理的に迫ってゆくことがもとめられます。もちろん最終的には自分自身が頼りですが、そういう問題の立て方にしても、論理の展開の仕方や資料の有効な使い方にしても、講義や演習はもちろんのこと、研究室でのとりわけ大学院生たちとの日常的な交流（時には雑談）からヒントを得る部分が結構多いように思います。それもまた教育のうち、とわれわれは考えています。

卒業後の進路も様々です。この専修課程で学んだ美学・芸術学の知識を狭い意味で文字どおりに生かすということになると、大学院に進学して研究者になる以外には、なかなかそれを有効に生かす就職先はないというのが正直なところですが、それでも、古くは評論家の亀井勝一郎や前衛的ヴィデオ・アーティストとして世界的に知られるナム・ジュン・パイク、作曲家の柴田南雄、映画界やテレビ界を席卷した松本俊夫、中嶋貞夫、倉本聡、久世光彦、鴨下信一ら、さらに最近では小林恭二、中路啓太といった作家、作曲家の笠松泰洋、映画監督の井坂聡、濱口竜介など、芸術の「現場」にも一味違った人材を数多く送り出していることは、この専修課程の特色でしょう。また新聞社や放送局といったジャーナリズムの世界にも、毎年のように就職しています。もちろん、現実には、芸術とは直接に縁のない世界に職を得る人も多く、そういう場合にはたしかに、狭い意味での美学や芸術学の知識自体が直接的に役立つというようなシチュエーションはあま

りないかもしれませんが，それでも，この専修課程で養った覗き眼鏡を通して世界を見る見方，というよりもそのようにして世界を見るということ自体を学んだことが有効に生かされるような場面が必ずや訪れると，われわれは信じています。

# イスラム学

## ◇教員◇

教授：菊地達也

准教授：松山洋平

助教：小野仁美

## ◇学生◇

学部：4名、修士課程：2名、博士課程：3名

### （１）イスラム学とは何か？

イスラム世界を指して、人は時に「中洋」と呼ぶ。東洋とも西洋とも異なる独自の文明をもった世界という意味である。日本は古来、中国、インドから多くを学び明治以降は西洋から多くの文物を摂取して国の近代化に努めてきた。大学教育がそのなかで主導的な役割を果たしてきたことはいうまでもない。しかし、その間、「中洋」への日本人の主体的学問的関心はほとんど欠落したままであったし、ましてや思想的な出会いや対決は皆無であった。それは、日本人とイスラム文明との直接的接触がそれまでなかったこと、また近代において日本人が学んだ科学技術文明は、イスラム世界ではなく、近代西欧において開花したこと、などの理由による。

では今現在の状況はどうか。かつてと比べれば、イスラム世界は随分と身近になってきた。イスラム原理主義、イスラム金融、アラブの春、ハラール認証など日常生活で耳にしたことがあるはずである。しかしその身近さは皮相的なものにすぎないのではないか、前述の思想的対峙はなされているのか、と反省する必要がある。イスラム教というものが世界情勢において前面に出てきて、イスラム教徒人口も増大している今、イスラム教とは何かを問う学問的営為が要請されるのである。祈りをささげる敬虔な信者を目にするかもしれない。しかしその姿に感銘をうけるだけでは不十分である。祈りをささげる際に唱えられるクルアーン（コーラン）には連綿と続けられてきた解釈の歴史があり、あるときには異端すれすれの解釈が加えられることがあった。祈りをささげる信者がこのような歴史の重みを背負っているのだということまで想いを馳せなければならない。そのよう

な想像力から学問的営為は出発する。

我々日本人の多くはイスラム教徒ではない。この事実は結構、重い。何がしかイスラム教の教理があるとして、それを絶対的な真理として非イスラム教徒は受け取ることができないし、イスラム教なるものの未来に関し何が理想的なのかを決定する立場にもない（逆に今現在のイスラム教の在り方が間違っていると指摘する立場にもない）。せいぜいなしうることはイスラム教を信奉する人々が何をどのように考えているのかを彼らに寄り添いながら思考していくことだけである。神から与えられたと彼らが考える真理をまったくのでたらめだと突き放すのではなく、また全面的に受け入れるのでもない、中間的な立場に立つことになる。日本で行うイスラム研究はそうように微妙な立脚点に立っているのである。

ではそのような立場でいかにして学問的営為が成り立つのであろうか。学問的営為はつまるところ問いである。我々が問いを発する場は神を所与のものとする場ではない。あくまで今現在われわれが生活している空間内で発せられる問いである。神を所与のものとする思想空間はあくまで問いの対象であって、問いの場ではない。多くの現代人はすでに神が所与のものとしてある空間にはいない。しかし神が所与のものとしてある空間がいかにして成り立っているのかを考えることはできる。それを考え、問いを発することは我々が今ある空間をより豊かにすることにもつながっていく。イスラム学専修課程ではそのような立場でイスラム教を研究する。

「イスラム教」とは何か、もう少し広くとって「イスラム思想文化」とは何であるか、その領域を画定することは難しい。クルアーンやハディース（預言者の言行録）を中心とした一元論的思想文化であると考えられがちであるが、それは誤りであって、もっと大きな広がりをもつ領域である。便宜的にイスラム研究は文学部の一部門に押し込められているが、イブン・スィナー、ビールーニー、イブン・ハイサムなどの活動を見ても分るように医学、天文学、数学など科学の分野も包摂しているし、法学もイスラム教にとって重要な位置を占めている。結局、総合大学の学問分野のほとんどが研究対象として視野に入ってくるのである。これはイスラム研究の一つの醍醐味であろう。

イスラム世界が何であるかの定義も難しいが、ヒジュラ暦（イスラム暦）が用いられている、もしくは用いられてきた地域がイスラム世界である、という定義もある。もしこの定義を使うとするならば、イスラム世界とは

数限りないほど多種多様な言語が使われている地域ということになる。クルアーンの言語であるアラビア語だけではなく、ペルシア語、トルコ語、ウルドゥー語、中国語、マレー語などもイスラム世界の言語なのである。同様にイスラム教は宗教という点からみると単なる一宗教であり、研究対象として極めて幅の狭いものに見えてしまうが、その内部には莫大な領域が潜んでいるのである。

## （２）研究室での学び

一口に「イスラム学」といっても、その学問的営為の具体的内容は広くかつ深い。それだけに研究の方法也多岐にわたり、一定かつ共通のものがあるわけではない。したがって文献学的研究のみならず、哲学、宗教（史）学、倫理学、美学、比較思想の立場からイスラム教を研究することができるし、法史学、比較法学の立場からイスラム法を研究することもできる。近年提出された卒業論文の題目を見てもそのことが分る。

### 2021 年度

「現代イスラム社会における食肉を避ける食生活の出現」

### 2019 年度

「イブン・タイミーヤのシーア派批判：イマーム論の観点から」

「アイユーブ朝末期のスルタン・サーリフの事績と制度改革、及びその影響」

「聖戦の具体的方法論：サイイド・クトゥブの思想とその発展」

「トルコの宗教教育における諸問題の検討」

### 2018 年度

「ムスリム同胞団保守派：包摂—穏健化仮説の検証」

「中国ムスリムの「和諧思想」についての研究」

「現代エジプトの俗人説教師アムル・ハーレドの思想に関する考察：ハーレドの言説を分析しながら」

### 2017 年度

「近代エジプトにおける一夫多妻についての見解——マラク・ヒフニー・ナースィフの『女性論』を例に」

「英国若者ムスリムの社会統合とメディア利用」

「イブン・トゥファイルの『ヤクザーンの子ハイイの物語』における文章形式とその影響」



2016 年度

「『四典要会』における馬徳新の来世思想」

「アンリ・コルバンにおける Imaginal と Imagination について」

2015 年度

「イスラーム急進派思想の源泉：統治論とジハード論を手掛かりに」

「ジャッサースの法理論：マスラハ論とキヤース論の検討を中心に」

「ムスリム社会における幽霊観：現代中東地域における事例を中心に」

2014 年度

「イスラム教における『天使』論：アリー・ザイヌルアービディーンの祈願集において」

「ニターク・フェスティバルから見るエジプト現代アートの諸相」

「日本におけるモスクの地域的役割とその可能性：大塚モスクの事例を参考に」

イスラム学専修課程では古典文献をしっかりと読むことを主眼におく。イスラム思想研究においては、たとえ中世期を研究対象とせず現代のある地域のフィールドワークに力点をおくにしても、古典文献の基礎知識がないと薄っぺらなものになってしまうからである。したがって演習は主にアラビア語文献講読である。単に文献が読めるというレベルを目指すのではなく、問題点の抽出、その解決方法へいかにたどり着くのかといったところまで含めての文献講読である。このように文献を深く扱うなら、どうしても領域的には狭くなってしまう。それを補うのが特殊講義である。イスラム学専修課程の専任教員は3名であるが、それに加え、他大学や他学部から講師を招き、さまざまな分野に対応できるよう配慮している。参考までに、近年の授業担当者を以下に列挙しておこう。

菊地 達也（専任教員）

イスマーイール派、ドゥルーズ派といったイスラム少数派をフィールドとする。彼らがもつ哲学的な側面を分析するとともに、イスラム世界でどのような地位を占めていたのかにも留意し、イスラム教における少数派のあり方を研究。

松山 洋平（専任教員）

神学・法学を中心としたスンナ派思想を専門としている。古典的な教

説の分析だけでなく、現代のイスラム教徒が古典的教説をどのように理解するのかという問題にも関心がある。その他、日本におけるイスラム教の表象にも着目している。

小野 仁美（専任教員）

イスラム法の規範をジェンダーの視点から分析している。なかでも家族法の領域を中心に、具体的な法規定を例にイスラム法の特徴とそれが社会にもたらす影響について考察している。

池内 恵

イスラム政治思想を中心にアラブ世界の近現代の思想史研究を行っている。思想発展と政治・社会とのつながりを重視し、中東地域研究・国際政治学のなかにイスラム思想史研究を組み込もうとしている。

井上 貴恵

スーフィズム（イスラム神秘主義）が専門。特にイラン地域のスーフィズムの思想的展開について興味がある。またスーフィズム思想とペルシア語圏、トルコ語圏のスーフィー教団との関連に関しても研究を進めている。

五十嵐 大介

中世アラブ・イスラム史が専門。特にマムルーク朝期のワクフ（寄進）制度に注目し、社会とその構成員に対してワクフ制度がもつ多面的な意味と役割を明らかにしようとしている。

榮谷 温子

アラビア語学が専門。正則アラビア語やアラビア語の諸方言について研究してきたが、日本語母語話者に対するアラビア語教育についても分析を進めている。

演習ではアラビア語を主に使うが、自分で研究を進めていく上で、また卒業論文で使用するテキストに関して特にアラビア語を選択する必要はなく、他のイスラム世界の言語を選択することも可能である。ペルシア語やトルコ語に特に惹かれるならばそれでもかまわない。原典を読み、理解を論文レベルにまで高めるのはそう容易いことではない。また、たまたま選択したテキストが難しいものであることもあるが、必要であれば教員や大学院生が読解の手助けをしてくれるので、それほど心配しなくてもよい。また教養課程でアラビア語を学んでいないとイスラム学専修課程に進学で

きないというわけでもない。三年次でアラビア語を基礎から始め、立派に論文を仕上げて卒業した者も多い。学問以外でも、少人数研究室の利である学生、院生、研究者との親密な交流も期待できる。

### （３）卒業後の進路

大学院に進学し、なかには海外で博士号を取得する者もいるが、イスラム学専修課程修了後の進路は就職が多い。就職先としては官庁やマスコミが比較的多く、一般企業に進む者もいる。卒業して就職するならイスラム学専修課程で学ぶ内容はその後の人生に直接役に立つことではないだろう。しかしこれまでほとんど知らなかったことを主体的に学んでいき、またその知識を深めていく過程を経験することは何らかの役に立つはずである。逆にいうとそのような経験ができるのは学生時代しかないかもしれない。

# 日本史学

## ◇教員◇

教授：野島（加藤）陽子、大津透、鈴木淳、高橋典幸、牧原成征、  
三枝暁子

准教授：村和明

助教：

## ◇学生◇

学部：53名、修士課程：20名、博士課程：30名

### （１）日本史学の特質

日本史学は、日本列島およびその周辺の過去の歴史について、多様な側面から総合的に考究しようとする専門分野である。研究の基礎は、古文書・記録・史書・年代記などの文献史料を、正確に読み、内容を批判的に検討し、そこから歴史の文脈や展開を明らかにする論点を引き出すことにあり、その上に立ってあらたな歴史像を構成することがめざされる。したがって、当研究室の教育・研究システムも、そうした歴史研究の力量を養成することを中心に組み立てられている。

演習では、古代・中世・近世・近現代の各時代の歴史理解にとって不可欠の文献史料を原文に即して解読する、あるいは、それらの史料を使って書かれた先学の優れた研究・論文（外国語で書かれたものを含む）を批判的に検討する、といったことが中心的な内容となる。講義では、各教員の行っている先端的な研究の内容をかみくだいて話すことになるが、その場合でも、＜史料を適切に歴史を語らせるか＞を軸とする講義が多い。

一方、日本史学が対象とする歴史資料は、文献のみではなく、絵画や文学を始めとする芸術作品、発掘調査の成果としての遺跡や遺物、習俗や民俗行事、地図や地名などへと、広がりをみせている。それらをめぐっては、専門的には、美術史学・国文学・考古学・民俗学・建築史学・歴史地理学などの諸学問領域があるが、日本史学の側からも、これらの歴史資料を再検討し、あらたな歴史像の提示や問題提起を行うようになってきている。

当研究室の学生も、文献史料に対する専門的能力をしっかりと踏まえた上で、できる限り広範な歴史資料を対象として取り上げる姿勢が望まれる。

## (2) 教員の自己紹介

現在の当研究室の専任教員は7名、助教1名である。時代ごとの専門性を考慮して、古代・中世・近世・近現代に2名ずつという構成であったが、現在は古代が1名となっている。時代区分はあくまで便宜的なものであり、時代の枠を超えて積極的に発言しあう気風がある。

野島（加藤）陽子は、近代政治史を専攻する。外交と軍事、2つの側面から昭和戦前期の政治構造の特質について考えている。著書に『模索する1930年代一日米関係と陸軍中堅層』（山川出版社）、『満州事変から日中戦争へ』（岩波新書）、『天皇はいかに受け継がれたか』（績文堂出版、編著）、『天皇と軍隊の近代史』（勁草書房）がある。なお論文を著す時には旧姓加藤を使用しているのでご留意願いたい。講義では、近代の政治・外交上の一次史料を中心とした文書・記録を読み解き、近代の天皇と天皇制について論ずる。演習では、敗戦・占領期に関する史料（今年度は日本外交文書等）を会読する。

大津 透は、7世紀から12世紀の国制史を専攻するが、吐魯番文書の分析を通じて唐代史にも関心をもっている。天皇制や国家財政を中心に律令制の検討を続けているが、従来検討の遅れていた古記録の分析による摂関期の国制、法のあり方の解明にも力をいれている。著書に『律令国家支配構造の研究』（岩波書店）、『古代の天皇制』（岩波書店）、『日本の歴史06 道長と宮廷社会』（講談社）、『日唐律令制の財政構造』（岩波書店）、『天皇の歴史01 神話から歴史へ』（講談社）、『律令国家と隋唐文明』（岩波新書）がある。講義では古代法の特質から国家構造を検討し、演習では平安貴族の日常を語る摂関期の史料を正確に読む。

鈴木 淳は、明治期の社会経済史が専門である。課程博士論文を書籍とした『明治の機械工業』（ミネルヴァ書房）がある。その後、機械を中心とした新技術の導入、活用を軸として日本近代史を展望しようと試みており、駒場での授業内容を基にした『日本の近代15 新技術の社会史』（中央公論新社）、『日本の歴史20 維新の構想と展開』（講談社）を執筆した。他に『関東大震災』（講談社学術文庫）、編著に『工部省とその時代』（山川出版社）、『経済の維新と殖産興業』（ミネルヴァ書房）などがある。近年は本学の百五十年史編纂にも取り組んでいる。演習では、夏学期に論文を読んで日本近代史の学術論文のあり方を学び、冬学期には学生が史料に基づいた研究発表をする。

高橋 典幸は、中世史を専攻している。武家政権の組織、とくに鎌倉幕府の御家人制に注目し、軍事制度の側面からその特質にアプローチしているが、近

年は社会的・地域的側面にも関心を向け、続く室町幕府の成立過程・特質も検討課題としている。講義ではその成果もふまえて武家社会について広く論じ、かつ古文書学についても概説する。演習では鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』を講読し、史料読解の基礎の習得をめざす。著書に『鎌倉幕府軍制と御家人制』（吉川弘文館）等がある。

牧原 成征は、近世史を専攻している。身分制・土地制度・商品流通などを研究テーマとし、百姓・町人・武士・奉公人・かわた身分など、当時の人々のあり方や、彼らが形づくった社会と国家の特質について追究している。講義ではそれらの一端を提示・紹介し、演習では報告者が任意の地域をとりあげて、そこで見られる諸問題について史料を読み解き、論点を展開・総合してゆく方法を考える。著書に『近世の土地制度と在地社会』（東京大学出版会）、『日本近世の秩序形成 村落・都市・身分』（同）等がある。

三枝 暁子は、中世史を専攻している。主に京都の寺社史料を素材として、寺院社会および都市社会の構造について分析をすすめている。具体的には、中世の「寺社勢力」を代表する位置にあった比叡山延暦寺、およびその末社の史料を分析しながら、13世紀以降に進展する寺社の領主支配や集団編成等について検討している。講義では、その成果をふまえつつ、都市に現出する諸集団の社会的位置づけについて論じる。また演習では、「日吉社室町殿御社参記」を読み解きながら、寺院社会の特質とその変遷について考える。著書に『比叡山と室町幕府—寺社と武家の京都支配—』（東京大学出版会）等がある。

村 和明は、近世史を専攻している。特に天皇・朝廷、豪商三井家を主な分析対象とし、権力構造の変遷や大組織の制度化の過程、これらと密接に関連する史料論について考えている。著書に『近世の朝廷制度と朝幕関係』（東京大学出版会）がある。講義では、具体的な史料や先行研究に即して、広義の政治史の発想・手法を概説する。演習では、政治史史料の正確な読解を目指す。

また、以上の専任教員以外にも、史料編纂所や他学部・他大学の教員の方を講師として招き、特徴ある魅力的な講義を開講していただいている。

### （3）研究室と史料編纂所

研究室は、法文2号館の1-4階に「散在」しているが、その中核は1階東南の隅にある。ここには助教と副手がおり、また学生・大学院生から教員まで、全構成員の「溜まり場」となっている。研究室はきわめて開放的であり、教員はもちろん、助教や先輩の大学院生からも懇切な指導や助言を受けることがで

きる。

研究室図書は、日本・世界においてもっとも充実した規模の日本史関連図書を所蔵している。ただし、法文2号館1・2・4階研究室や文学部2・3号館図書室、史料編纂所1階日本史学研究室などに分散配置されており、求める時代・分野の図書のありかを知るには多少の「慣れ」が必要である。

授業以外にも、ゼミ旅行や史料調査、卒論合宿、各種の研究会・勉強会などが活発に行なわれており、これらを介して多様な学習の機会を得ることができる。研究室全体の行事としては、4月の進学生歓迎会、5月の卒論相談会、6月のインスペクション（研究室蔵書の点検）、2月の卒業論文口述試験後の予餞会などがあり、ソフトボール大会を開催することもある。研究室メンバーの研究成果を発表する媒体として、史料の調査・研究を中心とする論文・翻刻・解説などで構成される『東京大学日本史学研究室紀要』（年1回刊）と、博士論文（甲種）を簡易出版する『東京大学日本史学研究叢書』とが、研究室の編集により刊行されている。

また、当研究室と歴史的に関係の深い部局として、東京大学史料編纂所がある。史料編纂所は、『大日本史料』『大日本古文書』などの史料集の編纂や広範な史料情報の集積・再編成・公開事業を行なっている研究機関で、古代から近代初頭に至る膨大な史料を原本・影写本・写真版その他の形で所蔵している。当研究室の学生は、所定の手続きを行って、これらの史料を閲覧することができる。同所はまた、多くの優れた日本史研究者を擁しており、当研究室の教員と相談の上で、同所の教員から指導を仰ぐこともできる。

#### （4）進学から卒業まで

本研究室は、文学部での専門教育への導入として、教養学部2年次に「日本史学研究入門」という講義2つを毎年開いている。日本史学への進学希望者は、ぜひ受講して欲しい。

3年に進学すると、高度の専門教育を受けることになる。はじめから時代や分野を狭く限定せずに、他専攻の講義を受けたり複数のゼミに参加したりするなど、できるだけ幅広い学習の場をもつよう心がけてほしい。4年次には卒業論文作成に多くのエネルギーを投入することになるので、3年の間に多くの単位を取得しておくといよい。

4年になると、卒業論文の作成が最重要課題となる。例年5月に研究室の卒論相談会が開かれ、このころを目途に専攻分野やテーマを確定し、研究計画を



作成することになる。研究テーマの選定にあたっては、日本史学の範囲内で各自の自由が尊重される。演習などで日ごろから教員や先輩に接触して学習を積み重ねていけば、それほど無理なく自分のテーマを見つけることができよう。

卒論研究は、ほとんどの学生にとってはじめての、そしてもしかしたら人生において一度限りの、学術論文作成の機会となる。日本の歴史に埋もれた無限といってもよい研究対象＝史料・歴史資料と格闘し、先行研究との対話をくりかえし、自分だけの固有の論点を発見し、それを説得力ある論文に結晶させることができるかどうか、そこでは試される。こうした経験は、卒業後すぐ就職して社会に巣立つ学生にとっても、かけがえのない財産になるはずである。

卒業後も専門研究を続けたい学生は、試験を経て大学院に進学し、研究者や専門家などへの途をめざすことになる。例年、卒業生の多くは就職の途を選ぶ。就職先はマスコミ・出版・公務員・銀行・メーカー・コンサルタントなど多様であり、文学部全体の傾向と変わらない。

# 東洋史学

## ◇教員◇

教授：佐川英治、吉澤誠一郎

准教授：守川知子、島田竜登

助教：田熊敬之

## ◇学生◇

学部：17名、修士課程：16名、博士課程：14名

東洋史学（アジア史）のおもしろさ、それはアジア社会がもつヴァイタリティー、それと表裏の急激な社会変化、そして今後の世界を変えていく可能性にある。

アジアの魅力は、アジア社会に一步でも足を踏み込んだ経験をもつ者であれば直ぐに感ずるであろう。喧噪と雑然さと色彩と匂いのあふれる街路、水と光と草原と雪と陽射しの極限から極限までのスペクトル、伝統と現代との整理のつかない混雑……。そのいずれもが、人をアジア社会に引き寄せ、好奇心を煽り、不安感を増幅させ、そして知的冒険心をかき立てる。

東洋史学が対象とするこのようなアジア社会は、落ち着き安定したヨーロッパ社会とは異質なものである。したがって、その社会へのアプローチも、定まったものがあるわけではない。後に個別に紹介するように、佐川英治教授は中国古代文明とその東アジアへの影響について調査や研究を行っている。吉澤誠一郎教授は、近代中国を世界史のなかに位置付けることをめざし、都市や国際関係など多方面からの接近を試みている。また、島田竜登准教授はインドのスーラトや東南アジアのジャカルタなど、かつての国際貿易都市を調査し、南・東南アジアと世界がどのように結び付いていたのかを考察する。守川知子准教授は、西アジアや中央アジアの聖者廟や墓地を中心に、宗教と社会の関係を捉え直そうとする。これらのフィールドに、スタッフはしばしば足を運び、場合によっては学生を引き連れて行く。まずアジア社会の中に入り、体験を積み、アジアを見る目を養っていくという方法の重要性を、東洋史学専修課程が認識しているからである。

もちろん、東京大学東洋史学専修課程が研究対象としているのは、激しい変化の中にあるアジアの現代だけではない。そこには、「史記の世界」か

ら「コーランの世界」にいたるまでの多様な文明世界の、古代から現代にいたる歴史が含まれている。東アジア文明の担い手となった中国・朝鮮、いくつもの騎馬民族国家が興亡した中央アジア、仏教・ヒンドゥー・イスラーム文化が入り組む南アジア・東南アジア、そして古代オリエント文明とイスラーム文明が交錯する西アジア、さらに地中海・イスラーム文明と緊密な交渉を保ってきた北アフリカ・イベリア半島……。これらの地域は、約 5,000 年にわたる長い歴史を持ち、膨大な人口と広大な領域を有している。この地域に生きる人々の生活と文化を知ることなしには、世界を理解することはできないはずである。

近代以降の歴史学は、「西洋」＝ヨーロッパを中心にして歴史の理論を組み立て、世界史の展開を理解しようとしてきた。実際、上述の多様な地域を「オリエント」ないし「東方」として一括しようとする発想自体、ヨーロッパ社会の自己認識と表裏をなす西洋起源の考え方である。その意味では、「東洋史学」という枠組みは自明のものではない。「ヨーロッパの眼」でアジアの歴史を見ることは、単にヨーロッパのアジア観を歪めてきただけではなく、アジアのアジア観を歪めてきた。そうした見方に、大きな疑問を突きつけてきているのが近年非常に盛んになってきたグローバル・ヒストリーの潮流であるが、同じく東洋史学専修課程もそうした見方に安住していない。

では、どのような方法と態度がアジア研究、とりわけ東洋史学研究に必要なのだろうか。そこには、安心して頼れるような確立した「東洋史学研究の方法」があるわけではない。先に紹介したように、フィールドワークをはじめ、それぞれの研究者がそれぞれの方法を模索しており、そこに東洋史の面白さがあるともいえよう。

ただし、東京大学東洋史学専修課程には、長年の伝統が築きあげてきた幾つかの重要な特色がある。第一は、方法的・理論的関心の強さである。本研究室の歴代の教員は、さまざまな隣接学問分野の成果を積極的に吸収し、自らの方法と視角を明示し、相互の批判をも含めて、学界の論争のなかで重要な一翼を担ってきた。したがって、本専修課程に進学する学生にも、方法や理論への強い関心をもつことが要求されるであろう。第二は、「史料を正確に、厳密に読む」という実証的研究態度である。先人の研究に安易によりかからず、史料や対象と直接に接しつつ研究方法の妥当性を常に吟味してゆくという態度が不可欠だと考えている。したがって、史料

を正確に読むために、中国語、朝鮮語、ベトナム語やインドネシア語などの東南アジア諸語、ヒンディー語、タミル語などの南アジア諸語、アラビア語やペルシア語、トルコ語などの西アジア、中央アジア諸語などを習得することが推奨される。ヨーロッパ人の旅行記・伝記・報告書などや既存の研究を批判的に利用するために、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語などの読解力も必要であろう。もちろん、文学部にはこれらの言語を習得する授業が設けられている。したがって、各人の興味にしたがって必要な言語を学ぶことができる。第三は、研究対象にタブーを設けていないという点である。歴史学にはふさわしくないと勝手に思いこまれてきた、例えば絵画、服飾、音楽、食のようなテーマであっても、それを対象として選ぶことを妨げることはなく、むしろ新しいテーマに積極的に挑む学生をおおいに歓迎する。もちろん、「人と物と思想の東西交流」やアフリカやオセアニアの歴史も東洋史の研究対象となる。また、現スタッフでは対応できない場合には、そのテーマにふさわしい研究者を紹介できる力量とつながりを東洋史学専修課程は有している。

東洋史学専修課程では、卒業論文の作成が重視される。それは、学生生活に全力を傾けて一つのテーマを追究した知的経験が、その後の人生に必要であり、また役立つと信ずるからである。東洋史学専修課程の教育の目的は、必ずしも、東洋史に関する広い知識を集積することのみにあるのではない。むしろ、歴史的情報にじかに接して自分のものの見方を自力で練り上げてゆく、そうした知的態度、知的誠実さを身につけることが重要であると考えている。他人から与えられた器をそのまま使うのではなく、自分で鉱石を掘り出し、自分の工夫した方法で精錬し、鑄造していこう。その結果できた器が、たとえ先人のものと似たりよったりであっても、あるいは先人のそれより不格好であっても、その体験はきっと貴重な感動を与えてくれるにちがいないし、東洋史学専修課程は、そうした態度を高く評価する。

東洋史で卒業論文を書くのは難しいと思うかもしれない。しかし、卒業論文の評価の基準は単純である。自分で生の史料、情報に接し、既存の研究を批判的に検討することによって自分の頭で考え、そこから得られた観察を明晰な言葉で論理的にまとめているかどうか、という点が問われるだけである。真摯に取り組めば、必ず評価されるし、評価されてきた。また、進学時には進学生全員と先輩、教員が参加する研修旅行があり、卒論相談会も随時開催され、そうした学生の悩みに応える機会が設定されている。

さらに、東洋史学専修課程のホームページでは、論文作成のためのマニュアルも提供している (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~toyoshi/>)。

東洋史学専修課程の卒業生は、毎年三分の一前後が大学院へ進学するが、他の多くは企業に就職している。就職先は、大手の製造業、金融、商社、出版、マスコミなど、多様である。公務員を目指す者も少なくない。

大学院では、「アジア史」専門分野として、アジアからさらには世界全体を見渡しようとするような専門家の育成を目指す教育が行われている。

次に、各教員について紹介しておこう。スタッフは、中国史 2 名、南・東南アジア史 1 名、西・中央アジア史 1 名であるが、他に、韓国朝鮮文化研究室から 1 名が学部授業を兼担し、加えて毎年、学内外から数名の講師を招き、アジア全域をカバーしている。いずれも、それぞれ独自の領域で、既存の枠組にとらわれない歴史像を描き出そうとしてきた専門家ばかりである。東洋史学専修課程進学を志す学生諸君には、このような教員の研究の積み重ねと現在の興味とがにじみ出た講義や演習から何かをつかみ取ってもらいたい。

各教員の研究の内容を西から順に紹介する。

守川知子准教授は、前近代および近代の西アジア史・中央アジア史、特にイラクやイランのシーア派聖地への巡礼や、ペルシア語の歴史叙述・学術史、アルメニア人などの宗教マイノリティ、文化交流といった社会史や文化史を専門としている。イスラームに限定されない西アジアの多様な宗教・言語環境に関心を持ち、近年では、近世期の旅行記や回想録といった一人称の叙述史料を用いた研究を行っている。主著に、『シーア派聖地参詣の研究』（京都大学学術出版会、2007 年）、編著に『移動と交流の近世アジア史』（北海道大学出版会、2016 年）、『都市からひもとく西アジア—歴史・社会・文化』（勉誠出版、2021 年）、共編著に *Vestiges of the Razavi Shrine, Āthār al-Razavīya: a Catalogue of Endowments and Deeds to the Shrine of Imam Riza in Mashhad* (Tokyo: The Toyo Bunko, 2017)がある。

島田竜登准教授は南アジア史・東南アジア史を担当している。16 世紀から 20 世紀前半の経済史・貿易史が専門であり、とくにオランダ東インド会社文書などオランダ語史料を駆使して南アジア史や東南アジア史、さらには日本から東アフリカに至る海域アジアの諸相を明らかにし、そのアジア史的、世界史的 position を試みている。近年では、バタヴィア（現ジャカルタ）やアユタヤなどのかつての国際貿易都市における異文化交流の歴史

にも関心がある。著書としては、*The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the Eighteenth Century* (Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, 2006)がある。また、『アジア経済史研究入門』(共編、名古屋大学出版会、2015年)、『歴史に刻印されたメガシティ』(共編、東京大学出版会、2016年)、『グローバル経済史』(共著、放送大学教育振興会、2018年)、『1683年 近世世界の変容』(編著、山川出版社、2018年)、『1789年 自由を求める時代』(編著、山川出版社、2018年)などもある。さらに、歴史学の方法にも関心を寄せており、「歴史学はすでに「国境」をこえつつある—グローバル・ヒストリーと近代史研究のための覚書—」(『パブリック・ヒストリー』8、2011年)といった業績もある。くわえて、放送大学客員准教授として、「グローバル経済史」というテレビ講義を担当しており、現在、放映されている。

佐川英治教授は、中国古代史を専門とする。秦漢統一国家の成立から隋唐世界帝国が誕生するまでの中国と東アジアの歴史に関心をもつ。近年は、漢代の軍事制度、古代の碑文習慣、『三国志』の研究、北魏史、東アジアの都城の設計、東部ユーラシアの歴史などに取り組んでいる。主著に『中国古代都城の設計と思想』(勉誠出版、2016年)、『378年 失われた古代帝国の秩序』(共著、山川出版社、2018年)、『中国と東部ユーラシアの歴史』(共著、放送大学教育振興会、2020年)、『ビジュアル大図鑑 中国の歴史』(監修、東京書籍、2022年)がある。

吉澤誠一郎教授は、清代史・中国近現代史を担当している。主な研究領域は19世紀から20世紀前半の中国政治史、社会史、経済史、思想史であるが、とくに近代都市社会の形成を民衆運動、ナショナリズムなどの問題と関連づけながら描き出している。最近では、19世紀のアジア史を全体として鳥瞰する歴史叙述の方式、中国における近代歴史学の形成と日本との関係などについても研究を進めている。主著として、『天津の近代—清末都市における政治文化と社会統合』(名古屋大学出版会、2002年)、『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国をみる』(岩波書店、2003年)、『清朝と近代世界』(岩波新書、2010年)、『愛国とボイコット—近代中国の地域的文脈と対日関係』(名古屋大学出版会、2021年)がある。

東洋史学専修課程に進学しようとする学生諸君は、これらのスタッフによる講義や演習、先輩や同級生との討論などを通じ、歴史学には様々な方法があり、様々なものの見方があるのだ、ということに実感をもって気付

いてほしい。対象地域を深く研究することは、同時に、自分のものの見方を確立してゆく過程でもある。多様な視角、多様な方法、相互の対話を楽しみつつ、新鮮な感覚とたくましい意欲をもって、自分の個性的なアプローチを追求することを期待したい。

また、学部時代は、受け身の学習から抜け出し、研究上で自らの問題を見つけだすとともに、これからの長い人生についての重要な選択を迫られる大切な時期でもある。コーチ役・助言者としての教員、先輩、同級生の集まる研究室での交流は、互いに大きな刺激をもたらすであろう。研究室には、アジア各地からの留学生も少なくない。本郷への進学後は、積極的に研究室に顔を出し、新しい学生生活の拠点としてほしい。



# 西洋史学

## ◇教員◇

教授：橋場弦、長井伸仁、勝田俊輔、池田嘉郎

准教授：北村陽子、菊地重仁

助教：小西正紘

## ◇学生◇

学部：48名、修士課程：15名、博士課程：17名

### (1) はじめに

グローバル化の波にさらされ、変化し続ける現代社会においては、短期的な現状分析ではなく、過去から現在までを長期的・複眼的に見通す歴史学の思考法こそが、錯綜する情報を的確に選り分け、未来を見据えた判断を可能とする。すなわち我々の目指す歴史学とは、悠久の時の流れの中に揺るぎない視座を確保する営みに他ならない。

西洋史学専修課程における研究と教育は、時代的には古代から現代まで、地理的にはヨーロッパを中心としながら、南北アメリカやアジア・アフリカとの関係も射程におさめる。西洋史学専修課程の専任の教員（教授、准教授）は現在 6 名であり、それぞれの研究分野を代表する歴史家である。授業は、教員各々の専門研究にもとづいた「特殊講義」と「演習（ゼミ）」が中心となる。前者は教員が講義する形式で授業が行われ、後者は史料や文献の講読、および参加者の研究発表が中心となる。また教養課程 2 年生を対象に、必修の講義として「西洋史学研究入門」および「史学概論」を開講している。2023 年度からは、1・2 年生向けに教養志向の講義として「西洋史学へのいざない」も開設されている。

西洋史学の学生各自の研鑽は最終的に「卒業論文」にまとめられるが、その指導のために、教員による「卒論ガイダンス」および博士課程の大学院生（TA：ティーチング・アシスタント）が主催する「サブゼミ」も実施される。このように授業以外の場でも、最新の知識や方法論について助言できる体制が整っているが、西洋史学は学問の自由と自主性を重んずる。学生は機会を捉えて積極的に教員や大学院生などから話を聞き、主体的に自らの学習・研究に取り組むことが求められる。

## （２）研究室について

西洋史学は、文学部屈指の大所帯である。2024年度に在籍する学生の数  
は、大学院生をふくめて合計で80名になる。大学院生の存在感が大きいこ  
とも西洋史学の特色であり、教育とならんで研究にも大きな比重がかけら  
れている。助言を与えてくれる先輩には事欠かないだろう（ただし、常に  
10名前後の大学院生がアメリカやヨーロッパ各地に留学している）。

法文2号館1階、総合図書館に最も近い一角に西洋史学研究室があり、基  
本的に出入り自由である。入口近くには新着雑誌の棚があり、その右手で  
助教、事務補佐の嘱託が勤務している。助教は若手研究者であると同時に  
学生と教員の重要な仲介者であり、研究室事務をとりまとめる。奥の談話  
室には、辞書や項目事典をふくむ様々な参考図書が配架されている。西洋  
史学の対象範囲の広さを反映して、英・独・仏はもちろん露・西・伊・羅・  
希など、西洋諸言語の図書が四方の壁を埋めている。

進学後は教室や図書館に通うのと同じように、研究室に顔をだすことが  
望ましい。授業の予習や調べ物をすることもできるし、履修のコツや教職、  
卒論、サブゼミなど、様々な情報の交換もなされる。飲食も自由である。  
文字通りのサロンである談話室を大いに活用し、研究室で同級生、先輩学  
生、助教等と交流することで、学生生活を豊かなものにできるだろう。

また、研究室旅行も重要な伝統行事の一つである。学部4年生が幹事と  
なり、5月の中旬に2泊3日の日程で開催される。近年では、伊東（2013  
年）、箱根（2014年）、伊豆熱川（2015年）、伊豆長岡（2016年）、下田  
（2017年）、信州上田（2018年）、鴨川（2019年）、伊豆高原（2023年）  
を訪れている。教員全員と大学院生の有志も参加する。例年、夕食後は教  
員を囲んで、あるいは学生同士で立場や年齢の違いをこえた熱い議論が交  
わされる。この旅行を通じてはじめて「研究室の一員になった」という実  
感を抱く3年生も多いことだろう。

このほか、研究室では進学者歓迎会や卒業祝賀会が開かれ、またゼミご  
とに交流会・懇親会が開かれるなど、教員・学生間の交流がさまざまな機  
会でなされていることも、西洋史学の特色の一つである。

## （３）専任教員の紹介

橋場弦教授は、古代ギリシア史、とくにポリスの民主政研究を専門とす  
る。主著は『アテナイ公職者弾劾制度の研究』（1993年）、『丘のうへの民主

政』（1997年）、『古代オリンピック』（共編著、2004年）、『賄賂とアテナイ民主政—美德から犯罪へ』（2008年）、『民主主義の源流』（2016年）、『古代ギリシアの民主政』（2022年）である。

長井伸仁教授は、フランス近現代史を専門とし、パリの政治史・社会史、近代フランスにおけるカトリシズム、歴史意識と政治文化などについての研究を行っている。著書に、*Les conseillers municipaux de Paris sous la Troisième République (1871-1914)*（2002年）、『歴史がつくった偉人たち—近代フランスとパンテオン—』（2007年）、『近代パリの社会と政治—都市の日常を探る—』（2022年）がある。

勝田俊輔教授は、近代のブリテン諸島（グレートブリテンとアイルランド）を専門とし、とくにアイルランドにおける農民運動やダブリン都市史、連合王国の国制史などに着目して研究を重ねている。また近年、近世・近代のヨーロッパにおけるコスモポリタニズムの研究も行っている。著書に『アイルランド大飢饉—ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル』（共編著、2016年）、*Rockites, Magistrates and Parliamentarians: Governance and Disturbances in Pre-Famine Rural Munster*（2017）などがある。

池田嘉郎教授は、ロシア近現代史を専門とし、第一次世界大戦からスターリン時代までの国制史を、帝国論や政治文化論を取り入れながら研究している。著書に『革命ロシアの共和国とネイション（山川歴史モノグラフ）』（2007年）、『ロシア革命』（2017年）、編著に『第一次世界大戦と帝国の遺産』（2014年）、『国制史は躍動する』（共編著、2015年）がある。

菊地重仁准教授は、西欧中世史、とくにフランク王国史を専門とし、カロリング朝期の政治文化、統治構造、修道制などを、文書形式学・書冊学的観点も取り入れつつ研究している。著書に*Herrschaft, Delegation und Kommunikation in der Karolingerzeit. Untersuchungen zu den Missi dominici (751-888)*（2021年）がある。

北村陽子准教授は、ドイツ近現代史を専門とし、とくに二つの世界大戦期の戦争犠牲者（戦争障害者、戦没兵士遺族）をめぐる社会史を、ジェンダー関係論や表象文化論の視角を取り入れて研究を進めている。著書に『教育支援と排除の比較社会史——「生存」をめぐる家族・労働・福祉』（共編著、2016年）、『戦争障害者の社会史——20世紀ドイツの経験と福祉国家』（2021年）がある。

大学院への進学を希望する学生には、各教員の著書をはじめ、西洋史に関する書物を繙き、西洋史学の学問的雰囲気さをぐることを勧めたい。

『岩波講座 世界歴史』（新シリーズ）や、近藤和彦（編）『西洋世界の歴史』（山川出版社）、『世界の歴史』全30巻（中央公論新社）、『世界歴史大系』（山川出版社）なども有益であろう。

専任教員以外にも、他大学から非常勤講師を招き、それぞれの専門に即した授業を担当していただいている。2024 年度には 5 名の専門家による古代ギリシア史、ヘレニズム史、中世ベルギー史、近世イングランド史、近代フランス史を主題とする講義が開講される。

#### （４）進学のまえに

西洋史学専修課程への進学希望者は、教養学部時代から多くの読書体験を重ね、知的関心を広げておいてほしい。ただし、ただの歴史ファン、もしくはクイズ型の知識のみに偏った歴史マニアでは、専門的な歴史研究はおぼつかない。専門研究のためには、まずは歴史関係の講座やシリーズ、新書を含む単行本はもちろん、人文・社会科学の基本文献や話題の書物を読んでおくのがよいだろう。古典に属する文芸作品も有益である。こうした幅広い読書によって、進学するまでに、研究したい時代・地域・分野をおおまかに見つけ出せるとよいが、しかしそれにあまり固執する必要はない。研究テーマは進学後に変更されることも多い。むしろ専門外の知識を積み重ねることを通じて、専門研究がもつ意味合いを広い視野から眺め、教養と専門とを知的に往復できるようにすることが肝要である。

第二に、外国語は西洋史学にとって生命線とでもいうべき手段である。教養学部時代にじっくりと勉強しておいてほしい。すくなくとも、英語と第二外国語を正確に「読む」力をしっかりと身につけておくことが不可欠である。その場合、「読んだ」内容を正確に表現することも求められるので、日本語の表現能力も軽視すべきではない。なお、古代史を志す場合にはギリシア語・ラテン語を、中世史ではラテン語あるいはギリシア語を、また近現代史ではそれに対応する地域の言語の学習を始めておくことが望ましい。

第三に、当専修課程に限ったことではないが、人文系の学問にあっても電子メディア・デジタルツールの利用は必要不可欠である。電子データ解析に熟達すると、従来の歴史学では見えなかった新たな問題や解法がひら

けてくることがある。デジタル技術の基本は早めに体得しておいてほしい。

#### (5) 卒業後

卒業生は、マスコミ・出版、金融・保険、サービス、製造、商社など、各種の一般企業、国家公務員、地方公務員、高等学校の教員など、幅広い分野で活躍している。歴史的視野を備えた人材を育成し、各界に送り出すことも、西洋史学専修課程の大切な役目である。

また例年、東京大学大学院人文社会系研究科(西洋史学専門分野)をはじめ、国内及び海外(欧米)の大学院に進学を希望する者が少なくない。進学を考えている者は、教員や大学院生、助教と早くから接触し、研究や生活などについて話をきくことが望ましい。自分の道を発見する機会となるだろう。昨今では、人文系の研究者を志望する人たちの将来について悲観的な見解がメディアを賑わせているが、こうした情報にはかなりの偏りも見られる。大学院生には各種の奨学金が用意されているし、能力と努力によって道はひらかれることも付言しておきたい。

# 考古学

## ◇教員◇

准教授：福田正宏、根岸洋、森先一貴

客員教授：林部均

助教：新井才二

## ◇学生◇

学部：14名、修士課程：5名、博士課程：9名

### (1) 考古学とは

考古学とは、遺跡や遺構、遺物の研究によって、人類の歴史を明らかにする学問である。文献を通じて歴史を明らかにする文献史学とともに、歴史学の一翼を担っている。文字のない時代や地域の研究は、考古学の独壇場である。では、文字のある時代は考古学の守備範囲でないかといえば、そうではない。例えば、古代国家の中核である藤原宮跡や平城宮跡から発掘された多量の木簡は、編纂された文献史料からは知り得ない生々しい都の様子を明らかにしたし、東京大学本郷キャンパス構内でも江戸時代の加賀藩上屋敷に関連する遺構群が明らかになり、考古資料・文献史料の双方から近世大名屋敷のあり様を具体的に知ることになった。エジプトのピラミッドもヒエログリフという文字の時代だが、考古学の研究対象であることは言うまでもない。

こうしたことから分かるように、考古学が文献史学と大きく異なる点とは、「発掘調査」である。フィールドにおいて発掘調査を通じて遺構や遺物といった研究資料を獲得し、分析することこそ、考古学の学問的な固有性がある。

考古学が扱う分野は多岐にわたる。発掘調査を通じて遺跡周辺の古環境と人がどう関わってきたのかを扱う環境考古学、動物と人の関係史を研究する動物考古学、儀礼や祭祀などを扱う祭祀考古学、民族誌や現存する民族に分け入って考古事象と比較研究する民族考古学など、特定の名を冠したさまざまな研究分野がある。また、遺跡や遺物の年代決定には考古学独自の方法に加え、具体的な数値年代を得るための放射性炭素年代測定など各種の方法があり、今日では自然科学分野との連携が必須とされる。ほか

にも、古人骨の DNA 分析をもとにした人類拡散の歴史や人間社会の親族組織の研究も進んでいるし、炭素・窒素同位体比分析から過去の人々の食性の傾向を評価する研究もある。考古学は文系の学問というイメージが強いが、理系の学問とも連動した学際的な文理融合の学問といえよう。

このように考古学の裾野が際限ないほどに広がっているのは、考古学が過去の人類活動全般を研究対象としているからである。人類は数百万年という長い時間をかけて世界中に拡散し、森羅万象と関係しあいながら多種多様な文化、文明を築きあげてきた。今日、考古学は発掘調査を独自の方法として多岐にわたる分野を統合し、体系化することで、私たち人類が歩んできた過去すべてに迫る役割を担っているのである。

## (2) 考古学では何を学ぶのか

考古学専修課程の必修科目（括弧内は単位数）は、史学概論（2）、考古学概論（4）、考古学特殊講義（16）、考古学演習（6）、野外考古学（4）、卒業論文（12）である。

さきに考古学独自の方法として発掘調査をあげたが、上のカリキュラムでは「野外考古学Ⅰ・Ⅱ」がそれに相当する。発掘は遺跡の掘削をおこなう以上、ある種の破壊をとまなう。だからこそ遺跡の発掘には慎重に当たらなくてはならないし、発掘過程で得られた成果を厳密に記録する必要がある。そのための手順の習得が必須となる。

また、発掘調査に際しては遺跡の位置や地形を正確に把握するとともに、検出遺構や出土遺物を正確に記録するための測量が必要であり、測量機器を使いこなせるようになる必要がある。発掘調査を進めるにあたっても、ただ闇雲に掘ればよいわけではなく、周辺の地質条件を把握し、遺構や遺物が包含される土層の堆積状況を精査しながら、図面や写真、三次元情報などを記録しつつ慎重に掘り下げていく。調査後はそうした記録を整理し、出土した遺物の水洗いや台帳作成を済ませ、接合して図面や写真、拓本をとり、必要な場合には三次元計測をしてから、調査研究成果を総括した発掘調査報告書を刊行する。このように、発掘調査によってやむなく失われていく情報は、できるかぎり正確な情報として記録され、この記録が遺跡や遺構、遺物を分析するための大事な基礎データとなるのである。

野外考古学Ⅰは、野外調査のさまざまな基礎的技術を本郷キャンパスで学ぶ。野外考古学Ⅱは、北海道北見市常呂町のサロマ湖畔にある人文社会



系研究科附属「北海文化研究常呂実習施設」で実施される。教員と大学院生、学生が専用の宿舎に滞在し、実際に遺跡の発掘調査や整理作業を経験する。机上の学習だけでは知り得ないフィールド調査の楽しさや調査技術の奥深さにふれる機会にもなるし、打ち解けた雰囲気、教員、先輩の垣根を取り払って日頃抱いているさまざまな疑問をぶつけることもできるだろう。なお、学生諸君が慣れない環境でも日々の生活を快適に過ごせるよう、宿舎には各種設備が整えられている。日本の大学のなかでは他に類を見ない恵まれた環境で発掘実習に参加することができるので、堪能してほしい。

発掘調査によって取得した遺構や遺物はそのままでは歴史を語ってはくれない。考古学的方法論によって整然と分類、分析されて学術的な意味での歴史資料になる。なかでも最も基礎となる方法論は型式学である。型式学は物がもつ年代的、地方的特徴をとらえてその変化や相互関係を明らかにする。これとともに重視されるのが層位学で、地質学・堆積学的な理論と方法を参照しながら型式の組み合わせやその新旧関係を説明する方法である。いずれも編年や地域性といった、人類の歴史を考古学的に明らかにするために不可欠の方法である。さらに、遺構や遺物から往時の社会や文化を総合的に語るためには、物質文化から人間行動を読み解くために民族考古学や実験考古学がもたらすモデルを参照する必要がある。歴史時代では文献・絵画史料が同種の役割を果たす。地質学・堆積学・古生態学・古生物学などの諸分野と連携して実施される自然科学分析も今や不可欠である。それでも未発見あるいは見過ごされてきた情報があることも理解しながら、現時点で最も蓋然性が高い人類史を構築しようとするのが考古学の目標であり、そのためには多くの実践例を学ぶ必要がある。

「考古学特殊講義」では、こうした考古学的方法論を中心にさまざまなテーマについて講義形式で、「考古学演習」ではすぐれた内外の文献にもとづいて方法論およびその具体的な実践方法を演習形式で学ぶ。

守備範囲の広い考古学では、あらゆる理論と方法論をすべてにわたって教えることは不可能だが、書物などを通じて基礎的な知識を一通り身につけられるようにサポートする。さらに、専任教員だけではカバーできない専門的な知識については、学内外から専門家を非常勤講師としてお招きし、幅広い分野を学習することができる場を提供している。

学部3年生までにこのような基礎を身につけたあと、4年生には卒業論

文という大仕事がまっている。自らが選んだテーマを深く研究して論文にするのだが、研究史にもとづいて課題と目的を明確にし、解決に必要な資料の収集と分析方法の設定を行い、分析結果に基づく考察を加え、結論を導くという作業は準備に多大な時間を要する。しかし、この作業は4年間の学業の集大成であり、論理的思考と努力の結晶として一生の財産になるであろう。研究職を希望するにせよ、就職を希望するにせよ、この経験を大切にしてほしい。

大学の外にも考古学を学ぶ場はさまざまにある。考古学研究室の教員は全員フィールド調査を行っており、大学院生を中心に希望者が参加している。海外を含め、各地で行われている発掘調査に、教員や先輩の紹介で参加する人もいる。他大学や博物館、あるいは埋蔵文化財センターなどで有志が集まり特定のテーマで開かれるシンポジウムやワークショップに出かけ、現在学界ではどのようなことが議論されているのかを把握しておくことも大切である。各地の博物館や資料館で、それまでに学んで関心を持った遺物を実際に見学して、これまでになかった新たな研究を模索することも効果的である。考古学はフィールドと実物の学である。実際の遺跡や遺物がいかに雄弁であるか、ぜひ実感してほしい。

### (3) 教員の紹介

福田准教授は、シベリア・ロシア極東・日本列島における土器出現期以降の先史文化について、環境への適応という視点から復元を試みている。また、広く東北アジア史のなかで日本列島の先史を捉えている。

根岸准教授は、縄文時代から弥生時代への移行を専門分野とし、その過程を人類史の中に位置付ける研究を志向している。また、先史時代の文化・社会の解釈に役立てるため、民族考古学的研究にも取り組む。

森先准教授は、日本列島を含む東アジアの旧石器時代が専門であり、人類がユーラシアから日本列島に進出し適応を果たした過程を研究する。また、考古遺跡をはじめとする文化財の保存・活用にも取り組む。

新井助教の専門は動物考古学であり、西アジアや中央アジア、南コーカサスをフィールドに、牧畜の成立と内陸アジアへの拡散プロセスを探っている。

考古学専修の専任教員ではないが、北海道にある常呂実習施設に勤務する熊本教授は北海道がおもなフィールドで、周辺の北方古代文化を視野に

入れながら、アイヌ文化の成立過程を追究している。北見市常呂町でおこなわれる「野外考古学Ⅱ」という発掘実習期間中の指導を担当する。

総合研究博物館には西アジアの先史考古学を専門とする西秋教授、年代測定や同位体分析を専門とする考古科学の米田教授、人類化石の形態分析からアジアの人類史を研究する人類進化学の海部教授がいる。学内には大学施設の新設等に伴い事前の発掘調査を担当する埋蔵文化財調査室があるが、この調査室には近世江戸の考古学を専門とする堀内准教授がおり、「野外考古学Ⅰ」を通して野外調査に必要な技術の手ほどきをしてくれる。このような方々は卒業論文などの相談にもものってくれる。

#### （４）進学を希望する諸君へ

考古学は広義の歴史学の一分野だから、歴史関係の講義はできるだけ受講しておいてほしい。とくに歴史時代の考古学を専攻するためには、文献史学の素養を身につけておく必要がある。先史考古学では、人類学や生態学の知識が必要となる。外国考古学を志す者は、外国語がすべての基礎になるから、とくにその習得に努めてもらいたい。日本考古学を目指す者であっても、方法論を学ぶために外国語文献の講読は必須とされるから、その重要性に変わりはない。

考古学に進学しようとする学生は、駒場Ａセメスターに、必修科目となっている「考古学概論Ⅰ」、「史学概論」の授業を必ずとるように注意してほしい。「考古学概論Ⅰ」は本郷で開講されているが、「史学概論」は駒場での開講だから、とりそこなうと、本郷進学後も駒場に通うことになる。同じく駒場Ａセメスターに開講される「人類学概説」は、必修科目ではないが考古学研究の基礎として重要なので、進学予定者にはできるだけ受講すること。

#### （５）卒業後の進路

考古学専修課程のカリキュラムは、考古学研究の専門家を養成することを目的として組み立てられている。過去に生きた人間の学を通じて人間社会や文化のあり方について理解を深めること、また考古学特有の論理や思考法を駆使して卒業論文を計画し、文章を練り上げていくプロセス、そして座学のみでは得られない常呂での活やチームワークが求められる発掘調査の経験は、考古学に関わる仕事を選択した場合はもちろんのこと、考古

学と直接関わらない進路を選んだとしても、必ず糧になるはずである。

卒業後、引き続き研究を続けていこうとする場合は大学院を目指し、そうでない場合は一般就職することが多い。近年の比率は1対3ほどで、就職のほうが多くなっている。就職先は、新聞社、テレビ局などマスコミ関係をはじめとして、銀行、商社、運輸、情報、地方公務員などさまざまである。マスコミで考古学出身という経歴をうまく活かしている卒業生もいる。

修士課程進学者は、修了後一般就職する場合もあるが、その多くは博士課程に進学し、研究を続けるために大学や博物館、研究機関への就職をめざすことになる。理想を高く掲げそれに向かって突き進むことは大切だが、研究職への就職が容易でないことは考古学も例外ではない。専門を活かせる場として、都道府県や市町村など地方公共団体にも埋蔵文化財を保存・活用する部署が数多く存在する。この場合は、学部卒ないしは修士課程修了の段階でも就職することができる。

#### (6) その他

考古学研究室では独自のホームページを開設しているので、こちらも参照してほしい。<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/archaeology/> 遠慮せずに研究室を訪問して先輩たちの話を聞くことが、実情を知るのには得策である。法文2号館の地下では先輩たちが学業に勤しんでいるので、一度訪ねてみてはいかがだろうか。

# 美術史学

## ◇教員◇

教授：秋山聰、高岸輝

准教授：増記隆介

## ◇学生◇

学部：27名、修士課程：10名、博士課程：11名

### （１）美術史学へのいざない

形あるもの、眼に見える世界への飽くなき追究、それが美術史学です。芸術の研究は文学部の重要な使命のひとつですが、なかでも視覚が捉える色と形、そこに宿る美を具体的な造形に即し、歴史的に考究する点に美術史学の特徴があります。

研究対象となるのは、古典的な芸術作品としての絵画・彫刻・建築、実用と美を兼ね備えた工芸やデザインだけでなく、写真・映像・インスタレーションなど現代アートの領域まで含みます。扱う地域も日本、アジア各地、中近東、欧米まで広がっています。

美術史は、高校までほとんど教育が行われていないため親近感が湧きにくいと思います。しかし、コンピュータ処理による画像や情報通信端末など、視覚表現の技術と可能性が日進月歩で進化する現代において、それらのリテラシーに長じ、容易に使いこなしている皆さんにとって、ビジュアルな学問である美術史は決して敷居の高い分野ではありません。

必要なのは視覚的な美に対する強い関心、ものを作り出す人間の営みに対する敬意、創造という行為への参加意欲。美術史学は、机上と造形が所在する現場とを往還する、アクティブな学問です。視覚で世界を認識する感性と、遺された作品や文献の断片をつなぎ合わせて巨大な歴史の潮流を把握する知性、両者のハイブリッドが重要です。

美術やデザインに強く惹かれる人、世界中を旅することに憧れる人、美術館・博物館での学芸員や文化行政に携わりたい人、あるいは自ら表現者たらんと欲する人、そんな人々を歓迎します。最高の作品を体験し、鍛え上げられた眼と感性と知性は、将来、どの分野に進もうとも強い武器になるはずです。

## （２）美術史学研究室の人々

研究対象となる時代や地域の広さに応じて、講義や演習も多彩に用意されています。美術史学研究室は赤門のすぐ近く、赤門総合研究棟の７階にあり、３名の専任教員が所属しています。

秋山聰教授は、ドイツ・ルネサンスの巨匠デューラーなど西洋美術史が専門。現在は各地のキリスト教会に秘蔵される聖遺物（キリストや聖人にまつわる遺品）の研究でも知られ、宝物と美術の境界、宗教儀礼と美術の関係、東西の聖地や宗教文化の比較へと広がっています。『天才と凡才の時代—ルネサンス芸術家奇譚』（芸術新聞社、２０１８年）、『聖遺物崇敬の心性史—西洋中世の聖性と造形』（講談社学術文庫、２０１８年）、入門書として『西洋美術史（美術出版ライブラリー歴史編）』（共同監修、美術出版社、２０２１年）を参照するとよいでしょう。

高岸輝教授は、中世の日本美術史が専門。絵師に活動を支える社会基盤や権力との関係を軸に、絵巻を中心とする国内外の作品調査を進めています。著書に『日本美術史（美術出版ライブラリー歴史編）』（共同監修、美術出版社、２０１４年）、『中世やまと絵史論』（吉川弘文館、２０２０年）、『ボストン美術館日本美術総合調査図録』（共同監修、中央公論美術出版、２０２２年）があります。また、人文情報学（デジタル・ヒューマニティーズ）の手法を日本絵画の研究に導入する方法についても共同研究を進めています。

増記隆介准教授は、古代の日本美術史が専門。日本における仏教絵画の形成過程を広く東アジアの文化交流という視野から描き出した『院政期仏画と唐宋絵画』（吉川弘文館、２０１５年）のほか、『天皇の美術史』１（古代国家と仏教美術）（編著、吉川弘文館、２０１８年）、『鳥獣戯画決定版（別冊太陽）』（監修、平凡社、２０２１年）があります。文化庁での勤務経験をふまえ、文化財の修理や保護についても精通しています。

加えて、学内から４名の教員が美術史学に関する講義・演習や論文指導に当たっており、地域や時代を幅広くカバーしているという点で国内随一の充実度を誇ります。文学部次世代人文学開発センターの芳賀京子教授は、地中海地域の古代美術史が専門。近年の著書に『西洋美術の歴史』１（古代：ギリシアとローマ美の曙光）（中央公論新社、２０１７年）があります。古代彫刻の３Ｄ計測・分析やVR（バーチャルリアリティ）技術を活用した展覧会会場の撮影などにも取り組んでいます。

東洋文化研究所の梶屋友子教授はイスラーム美術史の専門で、東洋と西洋をつなぐ美術の交流についても論じおり、著書に『イスラームの写本絵画』（名古屋大



学出版会、2014年）があります。同研究所の板倉聖哲教授・塚本麿充教授は中国の絵画史が専門。東アジアや欧米を中心に作品調査を進め、『中国絵画総合図録』（世界中に所在する中国絵画を総覧する巨大プロジェクト）の編集事業を継続し、『アジア仏教美術論集』（2017年～、中央公論美術出版）各巻の責任編集を務めるなど、中国美術史の研究拠点を形成しています。学芸員の経験を生かし、国内の展覧会企画にも数多くかかわっています。

授業は上記のほか、学外から非常勤講師を招き、各分野の最先端を語っていただいています。本年度の開講科目は下記になります。

奥健夫講師（武蔵野美術大学教授）「日本彫刻史」

尾関幸講師（東京学芸大学教授）「ドイツ 19 世紀美術」

京谷啓徳講師（学習院大学教授）「イタリア・ルネサンスのフレスコ壁画」

栗田秀法講師（跡見学園女子大学教授）「プッサンの歴史画と美術アカデミー（文化交流特殊講義）」

野口剛講師（根津美術館学芸部長）「博物館資料論（美術工芸品）」

### （3）美術史学専修での日々

美術史学研究室に進学すると、S セメスターに 3～4 泊の関西見学旅行が行われます。「旅行ゼミ」と通称される授業で、3 年に進学した学生は各自が担当する作品を決め、それに関する研究をまとめたうえで、美術館・博物館や寺社の場で口頭発表を行うという内容です。美術史学の入り口となる授業であり、偶然ここで担当した作品に惹かれて、そのまま一生の研究テーマとする人もいます。図録に掲載された写真やネット上の画像と、現場で観る作品とは印象が大きく異なります。机上の印刷物や講義で映写される写真と、本物から受ける感覚との差。それを認識し、補正し続けることが研究には必須です。

語学についても、駒場時代に引き続き研鑽を重ねる必要があります。日本・東洋美術史を目指すなら、古文、漢文、くずし字、中国語などを読む必要があり、西洋美術史であれば、英語、フランス語、ドイツ語のほか、研究対象によって古代ギリシア語、ラテン語、イタリア語、オランダ語、スペイン語などに挑戦することになるかもしれません。

講義や演習に関しては、全てに出席することは不可能なほど幅広く設定されていますので、3 年生のうちは、日本、東洋、西洋とバランスよく受講することをお勧めします。少人数で開催される演習は、外国語文献の講読だけでなく、一枚のスライドを巡って活発な議論が展開される切磋琢磨の場です。また、大学院進学を少



しでも考えている人は、学芸員資格の取得についても検討する必要があるでしょう。

やがて、4年生の6月になると卒論指導会が開催され、教員と同級生の前で卒業論文の構想を発表することになります。卒論テーマの設定や論文執筆については、伝統的に学生の自主性を尊重する形をとっています。ですが、放任というわけではありませんので、教員や先輩を積極的に活用し、美術史学の方法論と研究史を着実に踏まえた、力作を期待しています。扱う作品は著名なものほど謎に満ち、研究論文も多いため、知的訓練としての卒論には好適です。

#### （４）研究室の外へ

東京大学で学ぶということは、首都圏をキャンパスとすることにほかなりません。東京という都市は、美術館・博物館の数やコレクションの質、世界中から巡回してくる展覧会の内容において、ニューヨーク・パリ・ロンドンに匹敵します。美術史を学ぶ上で、これほど有利な位置はありません。本郷キャンパスから徒歩20分以内で、上野公園のミュージアム群（東京国立博物館、国立西洋美術館、東京都美術館、東京藝術大学大学美術館など）にアクセスでき、東京国立博物館、国立西洋美術館では、東大の学生証を提示すれば常設展が無料（特別展は割引）で観覧できることも憶えておいてください。東京国立博物館資料館、東京文化財研究所では、写真や図書の閲覧を行うことも可能です。本郷から電車で30分以内ということになると、訪問できる美術館は無数といってよいでしょう。

海外での調査や留学なども、明るい兆しが見えてきました。遠方に所在する美術作品を現地に足を運んで見ることの感動は何ものにも代えがたく、研究の原動力となります。一方で、国内外の美術館・博物館・図書館では、作品の高精細デジタル画像のインターネット公開が急速に進んでいます。実作品をひとつひとつ手に取って分析するという古典的な研究手法と、デジタル画像やテキストを駆使したデータ処理による作品群の総合的な把握とを両立させることによって、これからの美術史は新たな展開を見せていくことになるはずです。

#### （５）文化を支える仕事

卒業生の進路はさまざまです。学部卒に関しては、銀行、証券、商社、メーカー、情報通信、公務員など幅広く、新聞社の文化事業部や出版社など美術史を学んだことを直接生かせる就職をする人もいます。社会のなかで、美術や文化を支える人材として、活躍することを願っています。

大学院は、年度によって増減があるものの学内外からの志望者を集めています。進学のためには充実した卒業論文を提出、外国語2科目と日本・東洋・西洋美術史についての専門試験からなる1次試験に合格し、卒業論文に基づく口述試験を突破する必要があります。修士論文は、専門について深く掘り下げ、作品そのものの調査や作家に関する一次資料を実証的に考究し、学術論文として公刊できる水準が理想です。優れた修士論文の場合、博士課程進学後に学会発表や学会雑誌への投稿を勧めており、査読を通過して論文が公刊されると研究者への第一歩を踏み出したことになります。その後は、博士論文の執筆に向けての研究ということになりますが、外国の美術を扱う場合、博士課程の時点で留学する人も多く、留学先で博士号を取得するケースもあります。修士課程修了後、あるいは博士課程在籍の段階で、学芸員の採用される人もコンスタントに出ています。

駅や街角で見かける美術展覧会のポスターの陰には、学芸員がいます。華やかな展覧会の裏側で、研究、文化財の修理や保存、社会人や青少年に対する教育普及などが地道に行われています。美術史研究室の教員は、展覧会の企画・監修、展示作品の調査、カタログの執筆、講演会の講師といった形で、ミュージアムの現場、そして学芸員と密接に交流しながら、研究教育活動を進めています。

学芸員を目指すにせよ、大学教員を目指すにせよ、研究職への就職は決して広き門ではありませんが、美に対する情熱を維持しつつ、じっくり腰を据えて研究に励むことで、おのずと道が開けてくるものと思います。卒業生たちの活躍は、明治以来の美術史学を牽引するとともに、我が国の美術の振興に大きく寄与しています。

#### (6) 美術という新しい視点を獲得すること

美術は、個人の「趣味」の領域に留まるものではありません。社会が高度に成熟する一方で、戦争・貧困・疫病・差別・環境問題など人類共通の課題は複雑化しながら広がっています。現代を生きるアーティストたちは、これら諸問題に対し表現を通じて対峙しています。美術史学もまた、文明の発生以来、美術がいかに社会と関わり続けてきたのかを長期的に把握することを通じ、現代の位置を理解し、未来を展望することを目指すものです。大学で、美術、芸術を専門的に追究することは、これまでの経験とは異なる角度から世界を俯瞰する、新たな視点を獲得することにはかなりません。

## 言語学

### ◇教員◇

教授：西村義樹、小林正人

准教授：長屋尚典

専任講師：白井聡子

### ◇学生◇

学部：57名、修士課程：12名、博士課程：18名

### (1) 言語学専修課程で学ぶこと

言語学専修課程では「言語」を研究対象とします。ではそれが、同じく言語を対象とする、文学的あるいは哲学的な研究とどう違うかという、言語学的な研究では、言語を科学的な研究対象として扱うことが求められるのです。すなわち、研究の結果は、客観的に検証できるような形で提示されなければなりません。これは、個々の言語を扱う場合でも、また、広く言語一般を扱う場合でも（その時にも個別言語のデータが基礎となりますが）、忘れてはならない大切な点です。

言語学専修課程進学の必要条件は、言語について深く調べることに興味をもつことですが、研究対象として選ぶ言語に制限はありません。日本語・中国語・韓国語などのアジアの言語はもちろんのこと、英語・スペイン語のようなヨーロッパの言語からアフリカ・南北アメリカ・オセアニア地域の言語まで、本人の興味により自由に選択できます。話者が数億人いるような大きな言語から、話者数の限られた危機言語まで研究することができます。また、音声言語だけでなく手話を研究したり、ラテン語やサンスクリット語のようにある程度の言語資料を残したまま母語話者がいなくなった言語を研究したりすることも可能です。研究対象だけではなく研究方法にも様々なものがありますが、将来どのようなアプローチをするにせよ必要となる基礎的な研究方法の訓練を受け、そういう訓練を通じて、自分に最も適した分野を自ら選んで行くことになります。

哲学・文学・歴史などの分野に興味のある人は、専修課程に進学する前

に、ある程度自分で専門書を読んで既に予備的な知識を身につけていることが多いでしょう。しかし、言語学に関して、それはなかなか困難です。本屋などで手に入る書物で言語学について独学した人は、実際に言語学専修課程で学び始めると、それまでに抱いていたイメージの変更を余儀なくされると思います。これには色々な理由が考えられますが、上述の「言語を科学的な研究対象として扱う」ような研究の書籍は、しばしば流通ルートに乗りにくく、したがって、それを目にする機会も少ない、ということが一つでしょう。それでも最近では言語学の専門書を一般の書店で目にする機会もふえましたが、言語を研究対象として扱うための前提や手続きにまで立ち戻って基本的な知識を与えてくれる本は少なく、特定のテーマを扱うものに限られる傾向があるようです。また、全国の大学で、言語学を専門課程として持つところがまだ必ずしも多くないことも、言語学的知識の普及に障害となっています。そういうわけで、言語学専修課程に進学する学生は、ほぼ全員が白紙の状態からスタートする、といっても過言ではありません。

## （２）言語学専修課程を卒業するために必要な科目と単位

言語学専修課程では、「言語学概論」、「音声学」、「比較言語学」の３つの講義を必修科目としています。言語学概論は言語学の基本的な考え方と、音声・音韻・文法・意味など言語学の諸分野の基礎知識を与えるものです。音声学は世界の言語で用いられる様々な言語音を聞き取り、発音し分け、また正確に記述する方法を学ぶ授業です。比較言語学は、言語学のうちの重要な分野のひとつである通時的な言語変化を扱います。これらの必修科目のうち、「言語学概論」、および「音声学」は持ち出し専門科目（前期課程２年生も履修することができる文学部の専門科目のことで、後期課程進学後の単位となります）として、２年生のＡセメスターに本郷キャンパスで開講されますので履修するようにしてください。（「音声学」は、３年生のＳセメスターにも開講されます。）なお「比較言語学」も持ち出し専門科目なので、希望者は２年生のＡセメスターに本郷キャンパスで履修することができます。

言語学専修課程を卒業するためには、まず、これら必修の３科目のほか、「言語学演習」が８単位必要です。その際、必ず６ターム（３セメスター）

以上取る必要があります。これに加えて、「言語学特殊講義」を 12 単位、その他に文学部（言語学専修課程のものを含む）ないしは他学部の授業から 36 単位を取らなければなりません。

なお、一部の「言語学特殊講義」は 2 年生のうちから履修することができます。令和 6 年度の持ち出し専門科目は次のとおりです。「認知文法入門(2)」「国語学概論 I」「国語学概論 II」。これらのうち、「認知文法入門(2)」以外は言語学以外の専修課程の授業として開講されますが、言語学専修課程の単位としても認定されます。

さらに、卒業のためには、以上に加えて、「卒業論文」または「特別演習」による 12 単位が原則として必要です。卒業論文は、単に読んだものをまとめるというだけでは不十分で、最初に述べた「言語の科学研究」によって、言語学に何か新しい知識をもたらすものであることが期待されます。最近の卒業論文のテーマの例は以下のとおりです。

- スペイン語の叙述補語構文について、前置詞選択を中心に
- 韓国語の語尾 *-essessess-* に関する分析—語尾 *-essess-* との比較を中心に—
- コーパスから量的に捉えるペルシア語の軽動詞構文における前部要素の並列と分離可能性
- 会話分析を用いた制度的場面『漫才』の質的研究—オズワルド「友達」を事例として—
- インフォーマルな書き言葉における仮名の送られ方
- 家庭内の会話における日本語と英語のコードスイッチング研究
- 現代語における動詞「終わる」「死ぬ」の意味拡張
- 所謂「覚え書き」に代表されるソーシャルの前半生における印欧祖語研究が「一般言語学講義」に対して及ぼした影響について
- 日本語ラップの韻に関する考察
- 補助動詞「イタダク」とガ格の共起について
- 古代ギリシア語諸方言における R 音化について
- イロカノ語重複法の音韻的分析
- 辞書の空き間になっている表現“有無を言わず”の研究
- Omission of Subjective Case Particle in Spoken Language of Modern Korean: Focusing on Nouns *muo/mwo*, *got/go*, *sigan*
- 現代文学と比較した近代文学らしさ—受動文の計量的比較から—

● 富山県射水市方言における「が」の発音について

「特別演習」は文献精読、言語調査、言語データ分析等の課題から3つを選んで行い、言語学の基礎的な知識や方法論の修得度を審査します。

言語学専修課程に進学した学生は、あまり狭く専門を限ることなく、なるべく広範囲の授業を受け、演習に参加することが望めます。これは、繰り返しになりますが、ほとんどの人にとって言語学を学ぶのが初めての経験であるため、特に、大学院に進学しようとする場合には、少なくとも言語学の代表的な分野について、基礎的な知識を持っていることが不可欠です。

### (3) 教員の専門分野

言語学専修課程の教員はそれぞれ専門を異にしており、認知言語学をはじめとする理論言語学、フィールド言語学、歴史・比較言語学、言語類型論、印欧語、オーストロネシア語族、シナ・チベット語族、ドラヴィダ語族の研究など、その専門分野はさまざまです。

また、多岐にわたる言語学の諸分野をできるだけカバーするために、言語学専修課程以外の教員の授業科目を、必要な範囲で、「言語学演習」または「言語学特殊講義」として認定するほか、毎年数人の非常勤講師を他大学からお招きして、言語学特殊講義を開講しています。参考のために令和5年度と令和6年度の非常勤講師の授業の例をあげますと、令和5年度は「バントゥ諸語研究」「太平洋の言語の形態音韻論」「名詞句の認知意味論と認知語用論」「ドラヴィダ語比較研究: ブラフイー語」が、令和6年度は「東南アジア大陸部諸語研究」「社会言語学」「言語の対照研究」「Topics in Cognitive Linguistics: Digital and Non-digital worlds」「Sociolinguistic Approaches to the Languages of Japan」が開講されています。また、前期課程で言語学に親しむ機会を提供するため、総合科目「言語文化論 言語の多様性から考える言語学」を教養学部で開講しています。

### (4) 進路その他

学部卒業生の進路の割合は毎年様々ですが、最近は約2割が大学院進学を目指し、残りが社会に出る道を選びます。就職先は、公務員・教員・放送・出版・一般の商社など、どの専修課程にも共通する分野に加えて、情

報技術や出版のように、多少言語学と関係する業種も以前から見られます。大学院に進学した学生の中には、それぞれの選んだ言語の研究や言語学の特定の分野の研究のために、外国留学する者も毎年出ています。

最後に、「学生室」の活用ということを強調したいと思います。言語学専修課程の授業の大半は、コロナ禍以前には文学部 3 号館 6 階の言語学演習室で行われていました。同じ 6 階には、助手室と並んで、学生が勉強のために使える学生室があり、ここには各種辞書、新着雑誌、コピー機、プリンタ、スキャナ、数台のパソコンや録音機器などがあり、自由に利用できます。

教員・学生の研究・教育活動やさまざまな行事は、言語学研究室の Web ページ <http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp> で見ることができます。なお、言語学研究室の Web ページには進学に関する情報も掲載されています。ぜひ参考にしてください。

学生室はまた、日常的に同輩・先輩・後輩が交流して自由に情報交換をする場でもあります。基本的な文献の探し方や機械類の使い方を教わることもできるでしょうし、興味の方角を異にするもの同士の会話から啓発されることも多いでしょう。なお、教員の研究室も同じ階にあるので、学生は適宜容易に指導が受けられます。学生室を中心としたこのような学生生活は、教養課程との大きな違いであり、積極的な活用が期待されます。



# 日本語日本文学（国語学）

## ◇教員◇

教授：肥爪周二

准教授：小西いずみ、林淳子      助教：近藤明日子

## ◇学生◇

学部：30名、修士課程：24名、博士課程：31名（大学院学生数は、日本語日本文学専門分野としての総数）

### （１）「日本語日本文学、カッコ国語学」専修課程とは

国語学というのは、日本語学と呼ばれることもあるように、日本語を一つの言語としてその構造や歴史を研究する学問であって、国文学とは別個の学問である。ただ、日本語の歴史的研究においては、古典文学研究と資料面で共通するところが多く、また一方は言語を通して、一方は文学を通してという違いはあるものの、ともに日本の文化を研究するという大きな共通性をもっているので、大学院では両者が一緒になって「日本語日本文学専門分野」という一つの単位を形成している。

しかし、学問としての目的も、方法も、それを達成するために身に付けるべき訓練の内容も、国語学（日本語学）と国文学とは異なるので、学部の専修課程としては、昭和 50 年以來ずっと二つの専修課程として独立して運営してきた。独立した二つの専修課程であるということは、国語学と国文学とが別個の取得要求単位を指定し、それぞれの独立した研究室を持つということまで含めて、今後とも変わるものではない。ただ、教員組織としては、「国語学」「国文学」の二つの学部専修課程が名目上「日本語日本文学」という一つの共通の看板を掲げることになっているので、専修課程名はカッコ書きとなっている。

### （２）日本語学と国語学とは同じか。それはどういう学問か。

日本語学あるいは国語学とは、要するに日本語の構造や歴史を研究する学問である。日本史学が国史学と呼ばれることもするように、日本語の学は伝統的に国語学と呼ばれて来たが、日本語は必ずしも日本国内でのみ使われ研究されるわけではないことから、日本語学と呼ばれることが多くな

り、全国学会の名称も国語学会から日本語学会に変わった。こうしたことをふまえ、われわれの専修課程名としては、共通看板に新しいほうの呼び名を用い、カッコ書きに伝統的な呼び名を使っている。

従って、言うまでもないことだが、「国語学（日本語学）」と高等学校までの「国語」とは全く違う。「国語学（日本語学）」は日本語を一つの言語としてその構造や歴史をいろいろな角度、観点から研究する学問である。

では、日本語学（国語学）と言語学とはどういう関係にあるのか。日本語学（国語学）は日本語という個別言語を研究するものだが言語学は言語一般を研究するものであると考えられがちである。が、これは間違いである。そもそも「言語一般」というようなものがこの世にあるわけではなく、研究対象として存在するのは〇〇語という個別言語のみであって、その個別言語のあり方を究明し、場合によってはそれを通して言語一般のあり方を問うていくのが、**linguistics** である。すなわち日本語学（国語学）、英語学、中国語学などをはじめ〇〇語学の総称としての呼び名が **linguistics**、言語学なのであって、個別言語のあり方を研究する学問であるという限りでは、日本語学（国語学）もいわゆる言語学の一つである。

総称としての本来の意味の言語学から日本語、英語、仏語、独語、中国語、露語など、長い文化的伝統を持つ言語の学問がそれぞれに独立して「〇〇語学」として学問、教育上の単位となっているのが日本の大学の大かたの傾向であり、それらを引き去ったあとの諸言語を含めて全ての言語を対象にするというスタンスをとっているのが、いわゆる狭義の言語学である。日本語学は、たとえば言えば、総合電器店ではなく、日本語という対象言語に特化した専門店である。日本語に関する品揃えと商品知識はどの店よりも充実しているはずである。

さまざまな言語の中でも、日本において長く使われ、それによって日本の文化を形成している、日本語という言語を研究することの必要と重要性は特に大きく、そのために国語学という学問分野が早くから独立したのであった。百二十年前に上田万年教授が東京大学に（というより、日本に）「国語学」という学問分野を設定した当初から、世界の諸言語の中の一つとしての日本語を研究するという姿勢と、日本社会の近代化と日本語のあり方との関係を強く意識するという姿勢とは、「国語学」の中に濃厚に流れているものであった。

いわゆる言語学の日本語研究が現代語中心であるのに対して国語学は日

本語の歴史的研究が中心であるというイメージを持つ人もあるが、これも誤りである。日本語学会の研究発表の約半数が現代語に関するものであり、学会誌「日本語の研究」の掲載論文もおよそ半数が現代語に関するものである。現代語に関する実証的、理論的研究と国語史に関する研究との両方に等しく目を向けているのが国語学である。われわれの国語研究室の教員の専門分野を見ても、現代語中心の教員と国語史中心の教員とがいる。

国語学の日本語研究は古い時代の資料をめぐる実証的研究が中心で、生きたことばを対象にする研究や理論的な研究は少ない、と思いこんでいる人がいる。これも大まちがいである。たしかに、日本語の歴史的研究のためには文献資料しかないから、その実証的調査が基盤となるのは当然のことであるが、現代語の研究においては文字資料も音声資料も含めた言語行動の全般が研究の対象となる。現代語の研究には方言の研究も含まれるが、そこでは主にフィールドワークで得たデータを用いる。また現代語研究では、データの分析による実証的記述のほかに、日本語の文法構造や意味と文法の問題を正面から問う理論的研究の比重が大きい。

われわれが国語学の日本語研究に魅力を感じる点は、もう一つある。それは文法の理論的研究の深さである。あまりよく知られていない言語における文法の研究は、当然ながら文法的事実の記述が中心であるが、日本語、英語など研究の歴史が深い言語においては、文法研究とは文法的事実の理論的解釈とそのための理論の構築が中心であり、文法事実の側の研究も、理論的解釈を有効に組み立てるための必要から新たな観点によって事実を調べ直すという色合いが濃い。ただ事実を事実として記述するだけでなく、それが語り出してくる理論的な意味を掬いあげのおもしろさ、既存の枠組みを適用するだけでなく日本語の事実に立脚して理論を作っていくおもしろさが、国語学の魅力の一つである。

国語学（日本語学）は、資料も研究の蓄積も大きく、背後に文化的伝統を持つ言語の学として、このようにいくつもの魅力を持つ学問である。本学の国語学専修課程の特徴は事実を決しておろそかにしないという態度であり、その裏づけとして、貴重な江戸以前の資料を大量に保有し、現在も新たな資料の拡充につとめている。

### （３）日本語学（国語学）の領域

日本語研究への動機はさまざまにあり得る。日本語母語話者が感覚的にも最も深く把握し得る言語である日本語の研究を通して言語とは何かを問うという動機もあり、古い時代の日本語はどのようなものであったか、現在の日本語はどのような経過をたどって成立したか、また、現在の日本語にはどのような地理的・社会的変異があるかを究明しようという動機もある。また、古典文学への語学的アプローチを通して日本の文化のあり方を明らかにしたいという動機もある。日本語の文法構造やその歴史的変遷の究明によって、また日本語話者の言語行動の分析を通して、その思考様式のあり方を探るという研究もあり得るし、さらには、言語情報処理や、日本語を外国語として学ぶ人に対する日本語教育といった実践的な動機に基づく日本語研究や対照研究もある。それらのすべてが日本語学（国語学）である。要するに、日本語を対象とする限り、どのような目的、関心を持つ研究も、どのような方法による研究も、すべて日本語学（国語学）なのであって、その意味ではきわめて範囲の広い、自由な学問である。

日本語学（国語学）の分野としては、日本語の言語体系を構成する各領域に対応して、文法論・意味論・語用論・語彙論・音韻論・文字論などがあり、言語の（広い意味での）使用をめぐる、談話分析（文章論）・社会言語学などがある。また、これらの諸分野の一部または全体を、時間的、空間的な展望において扱う国語史学、方言学がある。また、これらの成果の上に立って、日本語情報処理のための理論的研究や日本語教育法の研究などもある。学生諸君は、このような広がりの中から、各自の興味と関心に従って自由に研究テーマを設定することができる。

### （４）各教員の専門分野と授業内容

授業は講義と演習とに分かれており、講義はおおむね、各時代の日本語の実態やそれを知るための資料について解説するものと、文法や意味をめぐるその理論的研究のあり方を解説、検討するものがある。それらが相互に深い関係を持っていることは言うまでもない。演習は、各時代の文献を資料とし、実地について、言語事実を正確に把握する方法の習得を目指すものと、専門の研究論文の読解、検討を通して言語研究の視点や理論の理解、習得を目指すものがある。

国語学専修課程には現在４名の専任教員がおり、その専門分野と近年の

授業内容は、ほぼ次のとおりである。

肥爪周二教授は、悉曇学（仏教におけるインド語学およびその影響のもとに発生した日本語音韻学）を中心とする日本音韻学史、悉曇資料・漢字音資料による日本語音韻史の研究を行っている。

小西いずみ准教授は、方言研究、なかでも方言文法を中心に、方言の音韻、方言研究の方法などについて、フィールドワークによって集めたデータをもとに研究を行っている。

林淳子准教授は、専門は文法論で、現代語文法の記述および文法構造の理論的研究を行い、またその知見に基づく文法史の研究も行っている。

近藤明日子助教は、コーパスの設計と構築に携わり、それを用いて近現代語の語彙・文体の研究を行っている。

このほかにも、日本語学（国語学）の多様な分野をカバーするために、毎年、非常勤講師を招いて、講義を願っている。

最近の非常勤講師の講義は、次のとおりである。

#### 2022年度

- ・小田勝講師「日本語の歴史的対照文法の研究」
- ・小磯花絵講師「日本語コーパス研究」
- ・坂本清恵講師「伝統芸能にみる日本語の歴史」

#### 2023年度

- ・岩井一成講師「日本の言語政策」
- ・櫻井豪人講師「洋学資料研究―単語集・辞書を中心に―」
- ・森山卓郎講師「文法的文章論」

この他に本専修課程の紹介により、2016年度に次の科目が「多分野講義」として英語を用いて開講された。

- ・Timothy J. Vance 講師「Topics in Japanese Phonology」

また、2019年度は大学院科目「新・日本語学」として次の科目が開講された。

- ・John B. Whitman 講師「比較写本学―東アジアとヨーロッパの注釈付きテキストをめぐって―」

### （５）当専修課程における学習活動

文学部に進学してから卒業までに必要な単位は76単位であるが、当専修課程においては、そのうち国語学概論、国語学特殊講義、国語学演習、言語学概論、国文学特殊講義など計32単位と卒業論文または特別演習12単位、合計44単位が必修であり、残り32単位は、どの学部などの授業から選択してもよい。国語学の特殊講義や演習にしても、多数開講されている中から自由に選ぶことができる。学部学生時代は、狭い専門に閉じこもらず、できるだけ幅広く、多様な学問に触れることが望ましい。

学生諸君は、講義や演習を通じて様々な問題に出会いつつ、必要に応じて教員に相談しながら、おおむね4年生のはじめまでに卒業論文のテーマを各自で決めることになる。5月には卒論の題目発表会、7月には研究計画発表会、さらに10月には中間発表会があり、ここでもらったアドバイスを踏まえて、1月の提出まで論文作成に奮闘することになるが、この経験は文学部生活最大の思い出となるであろう。せっかく文学部を選んだのだから、たとえ未熟でも稚拙でも、自分の考えたことを自分の言葉でまとめてみたいものである（なお卒業論文を書かず、特別演習を履修して卒業することもできる。これは日本語に関するデータ採取、研究文献精読、古い文献の翻刻などを2科目行うものである）。遠く、なじみのない対象ならいざ知らず、日本語という身近な対象についてなら、科学的な手続きを経た上で、確かな実感をもって自分の言葉で自分の考えを組み立てることができるはずである。多くの学生にとって母語として無意識に使っていることばの来し方と現状に光を当て、自分自身を理性的分析の対象とする。日本語学はそういうことができる唯一の言語学なのである。

卒業後の進路としては、マスコミ・出版・広告代理店・コンピューターソフト会社・メーカー・旅行業など一般企業に就職する者が多いが、大学院に進学して研究者を目指す者、官界・教育界に入る者、言語療法士の資格を取る者などもいる。社会に出る者も将来研究を続ける者も、学部学生の2年間、われわれがそれによって生活している日本語というものと向かい合って思索を深めることは、何にも増して有意義な経験となるであろう。

# 日本語日本文学（国文学）

## ◇教員◇

教授：鉄野昌弘、高木和子、佐藤至子

准教授：木下華子、河野龍也      助教：阿部真也

## ◇学生◇

学部：51名、修士課程：24名、博士課程：31名（大学院学生数は、日本語日本文学専門分野としての総数）

## 国文学とは

### Q：国文学は何を研究する学問ですか？

A：私たちは膨大な情報に囲まれて生きています。それらを讀んだり、見聞きたりして、わかったような気分になることもあります。しかし、本当に自分の頭で考えて理解したと言えるものはどれだけあるでしょうか。文学研究の基本は、第一次資料を前にして、予断を排して思考を巡らすところにあります。国文学は、それを主に日本語で書かれた文献に対して行います。

### Q：研究対象について具体的に教えてください。

A：中心となるのは、日本の古代から現代までの文学作品です。戯曲、歌詞、言葉と共に表現された絵画、そして漢文も研究対象になります。研究対象が身近に、しかも大量に存在するのが国文学の特色です。

研究方法も多様ですが、あくまで文献を対象として実証的に研究するというのが国文学研究の最大公約数といえるでしょう。

## 国文学専修とは

### Q：国文学専修の特色は何ですか？

A：国文学専修では、世間で流行している議論に目を奪われたり、メディア受けする大仰な物言いに踊らされたりすることなく、研究対象に真摯に向き合い、自分の頭で考えることを重視しています。国文学研究室では存分に調べものをして、思索を深めることができます。研究室には貴重な写本・版本を含め、古典籍（和古書）が数多く所蔵されていて、学生でも手続きをすれば閲覧することができます。古典籍そのものが身近に



あることも、国文学専修の特色の一つです。

**Q：専任教員の専門分野を教えてください。**

A：国文学では、文学史を上代・中古・中世・近世・近現代の5つに区分することが一般的です。国文学専修には各時代を専門とする教員が揃っています。詳しくは、後掲「専任教員の自己紹介」を見てください。

**Q：第一次資料を前にして思考を巡らすとありましたが、どのような授業によってそれを学ぶのですか？**

A：「国文学演習」の授業では、個別の作品を対象に、その表現の成り立ちや意義を細密に分析していきます。演習は5人の専任教員全員が開講しており、学生の報告をもとに議論する形式で行われます。

また、古典籍を扱う方法を学ぶ授業として「日本書誌学概論」（必修科目）があります。講義に加え、研究室所蔵の古典籍を実際に手に取り、その扱い方を基本から学びます。

**Q：駒場生でも受講できる授業を教えてください。**

A：「国文学概論」（Aセメスター開講）は駒場キャンパスの教室で開講されます。国文学研究の基本を講じる必修科目ですので、2年生の時に受講することを強く推奨します。その他の科目についても、持ち出し専門科目の指定がある科目は受講できます。演習に参加している2年生もいます。詳しくはシラバスを参照してください。

**Q：他にはどのような授業がありますか？**

A：各教員が自らの専門分野について講義する「国文学特殊講義」があります。専任教員が覆い切れない分野は、毎年2～3人の非常勤講師を招聘して講じてもらっています。

また、毎年一つのテーマを決めて専任教員全員が連続講義をする「総合日本文学研究」があります。2020年度は「日本文学における「虚」と「実」」、2021年度は「日本文学における「夢」」、2022年度は「日本文学における〈作者〉」、2023年度は「翻案」をテーマに開講しました。

**Q：他の学部のような、固定したゼミはないのですか？**

A：文学部には、一人の学生が一つのゼミに所属するという制度はありません。複数のゼミ形式の演習に参加しながら、できるだけ幅広く学んでほしいと考えています。

**Q：卒業論文は必修ですか？**

A：必修です。ぜひとも納得のいくものを書いて卒業してほしいと思いま

す。研究者になるわけでもないのに、と思う人もいるかもしれませんが、本当に自分の手で調べ、自分の頭で考えたことを綴ってゆく喜びと苦しみを経験することは、社会に出ても必ずや意味をもつと信じています。

**Q：卒業論文で、村上春樹などを題材にしてもよいのですか？**

A：現代文学の研究に限らず、国文学では一つの言葉や表現がどういう経緯で存在しているか、ということを重視します。ですから、同時代のさまざまな言説はもちろん、そこへ至る歴史的な流れをなにより大切にしています。一つの言葉を考えるにも、さまざまな調査・分析が必要です。現代文学でいえば、近代文学の流れをトータルに見返すことが要求されるでしょう。つまり時代が新しくなるほど大変だ、ということになります。その覚悟さえあれば、かまいません。

**Q：研究指導はしてもらえるのでしょうか？**

A：教員は皆、教える情熱をあふれるほど持っています。場合によっては個別に時間をとって話をすることもあります。ですが、手取り足取りの指導は期待しないでください。親切すぎる指導は、主体性・自主性を奪うという意味で、かえって不親切になることもあります。もちろん、学生の皆さんが問題意識を持って質問にあれば、できるだけ丁寧に答えます（ただし、予約をとってください）。

上級生に学ぶという方法もあります。国文学研究室には、学部・大学院を含めると、教員・学生・研究員・研究生・外国人研究生を合わせて100名前後が所属しています。さまざまな専門の人がいますので、わからないことは積極的に尋ねてみましょう。学生どうしが教え合う文化は、国文学研究室的の美点のひとつです。

**Q：研究室の場所を教えてください。**

A：国文学研究室は、法文2号館の3階・4階、法文1号館の1階・4階に部屋を持っています。ほぼすべての部屋が書庫を兼ねています。中心となる部屋は、法文2号館3階の研究室です。ここに助教の阿部さんと事務補佐員の小高さん・澤田さんが常駐していて、学生・院生に図書の出納や鍵の受け渡しなど、いろいろ便宜を図ってくれます。

**Q：研究室の課外活動はありますか？**

A：国文の年中行事の一つに「研究室旅行」があります。教員全員と学生が参加して、秋に1～2日の日程で文献資料を調査したり、文学遺跡を実地踏査したりします。2016年度は山梨、2017年度は小田原、2018年度

は日光、2019年度は筑波山・香取神宮へ行きました。2020～2023年度は感染予防の観点から見送りましたが、状況が落ち着いたら再開を検討したいと思います。

## 国文学専修を卒業した後

**Q：大学院への進学について教えてください。**

A：毎年、数名の学部生が大学院に進学しています。他大学からの受験生も多く、競争率は低くはありません。

修士課程を修了して博士課程に進み、博士論文を書き上げて博士号を取得したとしても、研究職に就くことは簡単ではありません。しかし、研究職への就職も、高等学校の国語科教員への就職も、他大学に比べればだいぶ恵まれています。大学教員の採用試験では、実際に教育現場に立ったことがあるかどうか問われます。その際、高校で教えた経験があれば役に立ちます。大学院進学を考えている人には、教員免許を取得しておくことを強く勧めます。

中学・高校の教員や出版関係の仕事に就きたい人にとっても、修士課程で学ぶことは色々な意味で有益でしょう。学部卒業後すぐに就職する道も、もちろんありますが。

大学院は、学部よりもさらに研究に特化した学びの場です。モラトリアムで進学するのはあまり勧められませんが、日本の文化をより深く専門的に学んでおくことは、ビジネスや政治の世界でもきっと役に立つでしょう。特に海外で仕事をする際には、日本のことを必ず尋ねられます。修士課程修了後、一般企業や官庁に就職して活躍している卒業生もたくさんいます（末尾「卒業生の進路」参照）。

**Q：文章を書くことが好きなのですが、国文で勉強して作家を目指すことはできますか？**

A：創作方法を教えるような授業はないので、それは自分で勉強することになります。国文の卒業生には、大勢の作家がいます。例えば、中勘助や堀辰雄、川端康成などは有名です。舟橋聖一、阿川弘之、杉浦明平、大岡信、宇野鴻一郎、橋本治も国文の卒業生です。

**Q：外国人に日本語や日本文学を教える仕事にも興味があるのですが…。**

A：国文には外国人の留学生が常に在籍していて、接する機会は非常に多いです。もっとも、外国人に教える仕事を目指すには、英語などの外国

語の学習が必要となるのは言うまでもありません。

## 専任教員の自己紹介

### 鉄野昌弘教授（上代）

「日本」という国が立ち上げられたころの「文学」、つまりは「日本」最初の「文学」を主に扱っています。この頃は、まだ日本語専用の文字が無い時代です。それは未開ということでもあります。漢字というツールで東アジア全体がつながっていたとも言える。そのような国際的に開かれた中で、日本語話者たちが何を作って行ったのか、という観点から、上代文学を見たいと思っています。

### 高木和子教授（中古）

『源氏物語』を中心に、平安時代の物語や日記や和歌などの仮名文学について研究します。高校の古文の教材の大半は平安文学ですから馴染み深いことでしょうが、大学での古典文学研究には高校では経験できなかった方法上の発展があり、これまでの印象は一変するはずです。古文は苦手だったという人にも、知的遊戯の場として参加してほしいものです。

### 木下華子准教授（中世）

平安末・鎌倉・室町時代（中世）の文学を担当します。中世には、韻文である和歌、散文である物語・軍記・説話など様々な文学の領域が存在します。中世文学の担い手は、藤原定家も鴨長明も、私たちが思う以上に複数の領域を横断する多面的な存在でした。授業では、作品の言葉・表現の分析を通して、このような時代に生成した表現意識や言葉が創り出す世界を拓きたいと考えています。

### 佐藤至子教授（近世）

近世（江戸時代）の文学を担当しています。近世文学を理解するには、近世の人々が何を読み、何を常識としていたかを知ることが大切です。演習では、原文に注釈をつける作業を特に重視しています。近世の文献をひたすら読み、調べていると、雑学も含めていろいろな知識が身につく、くずし字も読めるようになり、江戸っ子の言う洒落も

理解できるようになります。近世に生きた人々と同じ視線で作品を読む楽しみを味わってみませんか。

### 河野龍也准教授（近現代）

文学が近・現代の社会の中で果たした役割について考えています。絵画と文学が共通して向き合った表現課題や、文学における国民意識の形成、外地文学・紀行文学と日本語の問題など、時代状況との応答関係から文学を捉える研究を目指しています。授業では、地図を使った作品研究や、論争から再検討する文学史、自筆原稿の検証など、様々なアプローチに挑戦し、近・現代文学の価値を考察して行きます。

### 国文学専修への進学を考えている皆さんへ

進学までに、ぜひ、たくさんの本を読んでおいてください。本選びに迷う人は、秋に行われる進学内定者ガイダンスで配布する推薦図書リスト「国文学志望の皆さんへ―読書の手引き―」を参考にするといいでしょう。狭い視野や、こわばった思考の中に閉じこもらないでほしい。好奇心をもって、未知の分野、知らない作家、読んだことのない作品にチャレンジしてみてください。

一緒に、研究したり議論したりできる日を楽しみにしています。

### 卒業生の進路

#### 2023年度

香川県庁職員、カンディハウス、集英社、農林中央金庫、ミルボン、明治安田生命保険相互会社、楽天グループ、ラセングル、鉄道模型製作業（以上、各1名）、大学院進学（3名）など

#### 2022年度

信金中央金庫、ベイカレントコンサルティング、松竹、三井住友海上火災保険、FUNtoFUN、三菱商事、公募ガイド、埼玉県庁、ブレーンバンク、日本航空、芙蓉総合リース、丸紅、スマートゲート、旺文社、ゼンリン（以上各1名）、大学院進学（9名、うち他専門分野1名）、未定（1名、公認会計士受験準備）

#### 2021年度

オースビー株式会社、講談社、PwC コンサルティング合同会社、エア・ウォーター株式会社、神戸市役所、読売新聞、野村信託銀行、マッキンゼー&カンパニー、くまざわ書店、学習塾 ena（以上各 1 名）、教員 2 名、大学院進学（4 名、うち他大学院 1 名）

#### 2020年度

ADK、NHK、鹿島建設、プロレド・パートナーズ、McKinsey&Company、楽天、経済産業省、光村図書出版、ダイキン工業（以上、各 1 名）、大学院進学（6 名、うち他大学大学院 1 名）

#### 2019年度

NTTコミュニケーションズ、楽天、パナソニックシステムソリューションズジャパン、朝日広告社、中央法規出版、ディスカヴァー・トゥエンティワン、SMB C、第一生命（以上、各 1 名）、大学院進学（9 名）

#### 2018年度

国際石油開発帝石、レイスグループ、シーエー・モバイル、日本航空パイロット、住友商事、国立国会図書館、モルガン・スタンレー、野村證券、NHK、芳文社（以上各 1 名）、大学院進学（6 名）

#### 2017年度

SGホールディングス、日本調剤株式会社、アクセンチュア、経済産業省、World CARP Japan、経営共創基盤、りそな銀行、日本経済新聞社、株式会社電通、光村図書出版、株式会社オリエンタルランド、四国電力、損害保険ジャパン日本興亜株式会社、GREE（以上各 1 名）、大学院進学 4 名（うち他大学大学院 1 名）など。

#### 2016年度

フロムスクラッチ、バンダイナムコエンターテインメント、日本レコード・キーピング・ネットワーク、農林中央金庫、集英社、アヴァンザ、芳文社、久月、コンベンションリンケージ、住友商事、三井住友銀行、東京都庁、河合塾マナビス、関西テレビ放送、47株式会社、シンメトリック、福岡県庁、三井住友信託銀行（以上各 1 名）、大学院進学（4 名）など

# 中国語中国文学

## ◇教員◇

教授：大西克也、齋藤希史、鈴木将久

助教：市原靖久

## ◇学生◇

学部：5名、修士課程：10名、博士課程：7名

### （１）中国語中国文学専修課程の概要

亀の甲羅や牛の骨を焼いて神の意志を問いかけていた時代から 21 世紀まで、中国語ほど長い歴史を持ち、多種多様な思惟や感情を記録してきた言語は世界でも稀である。中国語中国文学専修課程が対象とするのは、この歴史の全てである。中国文明はその周辺に無数の多彩な文化を育み、日本・韓国・ヴェトナムでは漢字を学んで作られた文字がそれぞれに独自の思惟や感情を綴ってきた。また中国の西方は砂漠や大山脈によって隔てられながらも、常にインドや西アジアの大文明に向かって開かれ、多くのものを吸収した。中国語中国文学の歴史は絶えざる文化交流の歴史でもあった。

本専修課程には、この長い歴史を扱うにふさわしい多彩な教員が揃っており、中国語中国文学の幅広い領域をカバーする。

次に本専修課程の特色として挙げたいのは、学生や研究員に外国人の多いことである。特に大学院生や研究生には中国・台湾・香港などアジア諸地域からの留学生が多く、また、海外からの外国人研究員（訪問学者）も常に数名が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、授業や合宿にも外国人研究者の参加を迎えて、学生との交流が活発に行われている。

外国人留学生の数は、研究生も含めれば、2024 年 4 月現在、中国・台湾からの留学生 17 名が在学している。留学生の参加は授業のあり方にも影響を与えており、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。日本人学生にとっては、いながらにして中国語会話が上達し、我が国とは異なる様々な見方や研究方法が学べるという点で極めて恵まれた環境である。



## （２）専任教員の紹介

大西克也教授は「上古漢語」と呼ばれる紀元前の中国語文法を専門としており、『論語』『孟子』『左伝』『史記』などの日本人にも馴染み深い古典を研究材料とし、個々の動詞や名詞の文法的特性を丹念に記述しつつ、上古の中国人が言葉によってどのように身の回りの世界を認識し、カテゴリー化していたのかという関心から、上古中国語の文法構造の解明に力を注いでいる。また、近年脚光を浴びている戦国秦漢時代の出土文字資料をいち早く文法研究に取り入れるとともに、文法、音韻などの総合的な角度から新出土の文字を解読、言語表記システムとしての漢字の歴史にも関心がある。主な著書・論文に、『アジアと漢字文化』（共著、放送大学教育振興会、2009）、「中国語における指示性範疇化の胎動（『中国語学』261号、2014）」「戦国縦横家書/馬王堆出土文献訳注叢書」（東方書店、2015、大櫛敦弘との共著）、「論上古漢語代詞“之”和“其”的替代功能」（『歴史語言学研究』第13輯、2019）などがある。

授業では、戦国時代の出土文字資料の解読や、漢字・文法・音韻史をテーマとした講義、古代中国語文法に関する論文の講読を行っている。

齋藤希史教授は中国古典詩文を専門としつつ、近代に及ぶ東アジアの言語と文学にも研究領域を広げている。先秦以来の歴史をもつ伝統詩文は、それを記した漢字とともに東アジア全域に広く伝播し、多様な文字世界を形成した。齋藤教授の近年の関心はこうした世界における“読み書きする主体”のありかたに向かっており、『漢字世界の地平 私たちにとって文字とは何か』（新潮選書、2014）、『漢文脈と近代日本』（角川ソフィア文庫、2014）などでは、古典詩文研究者ならではの切り口で東アジアの文字や言説を分析する。また、『漢詩の扉』（角川選書、2013）では、詩によって自らの生の輪郭をさだめた詩人たちの姿を描き、『詩のトポス 人と場所をむすぶ漢詩の力』（平凡社、2016）では、洛陽から西湖や涼州などを経て、長安、江戸へと至る土地と詩の結びつきを浮き彫りにする。『漢文脈の近代 清末=明治の文学圏』（名古屋大学出版会、2005）でサントリー学芸賞、『漢文スタイル』（羽鳥書店、2010）でやまなし文学賞を受賞。新刊に『漢文ノート 文学のありかを探る』（東京大学出版会、2021）、『アジア人物史 第2巻 世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア』第4章「六朝時代とは何であったか——アジアの名文集『文選』の誕生まで」（集英社、2023）がある。

授業では、2年生以上向けに、「古典詩文入門」として中国古典詩文を読

むための基礎と新たな視点を身につけるための初級演習及び東アジアの漢詩文を視野に入れた「古典詩文選読」を開講している。学部・院生共通の「漢魏六朝詩文選読」「古典文学芸術論選読」では、原文を正確に読み解く読解力を養い、漢籍に直接触れることを重視している。大学院向けの「東アジア人文学の諸問題」では、多様な研究テーマの学生との討論を主体に講義を進めている。

鈴木将久教授は中国現代文学を専門としている。特に 20 世紀初頭から中頃にかけて、中国が西洋と接触し、近代に向き合わざるを得なくなった中で、伝統文化をどのように変容させながら新しい文化を生み出したかを、西洋発の思想と中国の現実の相互関係として動態的に読み解くことに関心を持っている。著書『上海モダニズム』（中国文庫、2012）では、西洋伝来のモダニズム文学が中国においてたどった複雑な運命を、中国の歴史に即して考えることを試みた。また現代中国の知識人の活動にも関心を持ち、現在の中国の人がどのようなことを感じ、考えているかを日本に紹介している。主な翻訳書に『中国が世界に深く入りはじめたとき』（賀照田著、編訳、青土社、2014）、『中国メディアの現場は何を伝えようとしているか』（柴静著、共訳、平凡社、2014）、『誰も知らない香港現代思想史』（羅永生著、共編訳、共和国、2015）、『中国はここにある：貧しき人々のむれ』（梁鴻著、共訳、みすず書房、2018）、『思想史の中の日本と中国』（孫歌著、東京大学出版会、2020）などがある。

授業では、中国現代文学のテキストを深く読む訓練と広く読む訓練をそれぞれ別の科目で行っている。深く読む授業では原文を正確に読み解く力を養成し、広く読む授業では、参考文献を使いながら、テキストに関連する事項を広く理解し、その作業によってテキストの豊かな意味を複眼的に読み解く力を養成している。

市原靖久助教は、先秦の中国語文法を専門とし、特に代名詞が文中あるいは文章中で果たす役割、意味や機能に関心を持っている。主な業績に、「上古中国語の一人称代名詞“我”と“吾”について」（『中国語学』265 号、2018）、『春秋左氏伝』における指示詞の意味と機能」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』24 号、2021）などがある。

### （3）学内外講師など

本専修課程では、学内外から講師を招聘し、授業科目の充実を図ってい

る。学内の講師の科目には、東洋文化研究所の上原究一准教授による「明清通俗文学研究法」「明清白話小説選読」、総合文化研究科の谷口洋教授による「楚辞『天問』講読」、吉川雅之教授による「香港の文学と言語」、田口一郎教授による「釋大典『詩語解』講読」がある。

学外からは、中国語圏の語学・文学・文化について、佐々木勲人・筑波大学教授による「中国語学概論」、松浦史子・二松學舎大学教授による「漢～隋唐代の中国神話の受容と発展」、宮本徹・放送大学准教授による「中古音概論」が開講される。この他、張佩茹・東北大学准教授による中国語の授業、王俊文・成城大学准教授によるアカデミック・ライティングが開講される。

以上、先秦から現代までの中国の言語・文学・文化を扱う授業を展開しており、受講者は幅広く学ぶことができる。

#### （４）中国留学制度と就職状況

本専修課程からは毎年、日中両国政府交換による政府奨学金留学生として、学部生や大学院生が、北京大学、復旦大学、南京大学などに留学している。また香港中文大学との交換留学協定によるサマースクールへの参加など、様々な留学・訪問制度が充実しており、それらを活用して研究の進展や語学力の向上を図っている。

学部卒業後は大学院に進学し、研究者への道を歩む者が多いが、中国に対する社会的関心の高まりから、日本経済新聞社・NHK・吉本興業・東方書店・明治安田生命・野村證券・JCB・コニカ・ミノルタ・アフラック・NTT 東日本など、新聞・テレビ・出版のほか、メーカー・商社・金融・通信・コンサルティングなど各種企業に就職して活躍する者も多い。

私たちはみなさんがともに中国研究の大海に乗り出してくださることを心待ちにしている。授業風景や留学・就職状況などについては、中文のホームページ委員会が編集している中国語中国文学研究室ホームページ(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/chubun/>) も参照していただきたい。

# インド語インド文学

## ◇教員◇

教授：梶原三恵子

助教：友成 有紀

## ◇学生◇

学部：1名、修士課程：4名、博士課程：14名（大学院学生数は、  
インド文学・インド哲学・仏教学専門分野としての総数）

### （１）はじめに

本専修課程では、サンスクリット語などの古典語を中心に、インド亜大陸の言語と文化を総合的に研究しています。インド文化は紀元前二千年紀から現代までの三千年にわたって豊かな文献資料を伝え、ヒンドゥー教や仏教を介して、南アジアから東南アジア、および日本を含む東アジアに至るまで、大きな影響を及ぼしてきました。インド語インド文学の対象となる時代も領域も広大ですが、本専修では古代（紀元前十二世紀頃）から古典期（紀元数世紀頃）を中心に研究しています。

### （２）インド語インド文学とはなにか

専修名はインド語インド文学ですが、「インド語」という単独の言語はありません。本専修では、インド亜大陸で用いられている、あるいは用いられてきた諸言語をインド語（インド諸語、Indian languages）と総称しています。サンスクリット語をはじめとするインド・アーリア系諸語は、ヨーロッパの多くの言語と同一の起源をもち、インドからヨーロッパに至る地域の諸言語を比較する印欧比較言語学にとっての一大資料でもあります。一方、タミル語をはじめとするドラヴィダ系言語などの非インド・アーリア系諸語も、インドの言語文化の大きな一角を占めています。

「インド文学」も、物語や詩歌などの狭義の文学に限りません。本専修では、「言語によって伝えられているインド文化」の総体をインド文学（Indian literature）と呼んでいます。過去数年間の教員および学生の研究テーマには、次のように、さまざまなジャンルのものがあります。

古代インドの家庭儀礼の成立と発達  
 ウパニシャッドと初期仏典の接点  
 古代ジャイナ教の在家信者の生活規範  
 パーニニ文法学とヴェーダ聖典  
 サンスクリット説話集『ブリハットカター』の成立史  
 大叙事詩『マハーバーラタ』の語りの構造  
 タミル恋愛文学  
 タミル二大叙事詩の相互関係  
 鳥の形の祭火壇を作るヴェーダ祭式  
 伝統インド医学（アーユルヴェーダ）  
 古代インドの葬礼  
 インド最古の文献『リグヴェーダ』の詩論  
 古代インドの占星術理論  
 古典インド演劇論  
 『マヌ法典』における訴訟主題  
 カシミール王統記 など。

### （３）進学したら

本専修の授業では、サンスクリット語、パーリ語をはじめとする中期インド諸語、タミル語など、古典語を中心にインド諸語の文法を学び、原典を講読します。このうちサンスクリット語は必修です。サンスクリット語の文法規則は、紀元前から三千年にわたって基本的な部分是不会で、いったん初級文法を学べば、さまざまなジャンルの文献の研究に進めます。ジャイナ教文献や仏教文献に必要な中期インド諸語、ヒンディー語などの近現代インド・アーリア諸語は、サンスクリット語の流れをくんでいます。ドラヴィダ系のタミル語など非インド・アーリア諸語も、語彙などにサンスクリット語の影響を受けています。サンスクリット語を学ぶことで、広い時代と分野のインドの言語と文学に扉が開かれます。

インド哲学、仏教学、言語学、西洋古典学ほか、他専修の授業も積極的に受講することが推奨されます。原典講読の予習は時間のかかるものですが、うまく時間を管理すれば、教員免許の取得や就職活動などとも両立できます。

#### (4) 教員と授業の紹介

梶原教授はサンスクリット語学文学が専門です。ここ数年の主な関心は、紀元前インドのいわゆるバラモン教（ヴェーダの宗教）の家庭祭礼の研究を通じて、古代インド社会文化史を解明することにあります。友成助教はサンスクリット語の文法学と論理学の関係解明が専門です。このほか毎年、数名の非常勤講師を学外からお招きし、さまざまな専門領域の講義を担当していただいています。もっとも、教員の専門研究が講義・演習にそのまま反映されるわけではなく、狭義の専門分野を越えて、インド古典のさまざまな領域の講義や演習が行われることが少なくありません。授業の詳細については文学部便覧、シラバス、研究室ホームページをご参照ください。

#### (5) むすび

インドの言語と文化には三千年以上の歴史があります。その間には当然、変革と発展がくりかえされてきましたが、インドの面白さは、古代の言語と文化が、ときに形を変えながらも長い歴史を超えて生き残り、近現代文化のそこここに継承されているところにあります。

「サンスクリット語は、その古さはどうであろうとも、驚嘆すべき構造をもっている。それはギリシャ語よりも完全であり、ラテン語よりも豊かであり、そのいずれにもまして洗練されている。」

ウィリアム・ジョーンズ (1746－1794)

原典の一語一語をじっくりと噛みしめながら取り組むうちに、インド語学習と原典講読のおもしろさはもちろん、学問の楽しみをも味わうことができるようになっていただければと思います。大学時代に堅実な学問を経験することは、きっとみなさんの人生を実り豊かにしてくれるでしょう。

研究室HP <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/indlit/index.html>

# 英語英米文学

## ◇教員◇

教授：後藤和彦、新井潤美、渡辺明、阿部公彦、Barnaby Ralph

准教授：諏訪部浩一、中尾千鶴

助教：6月着任予定

## ◇学生◇

学部：41名、修士課程：5名、博士課程：15名

英文科の中身は、英語学、英文学、アメリカ文学にだいたい専攻が分かれている。「食わず嫌い」はしてほしくないものの、学生諸君には三分野のうちいずれか、好みの専攻の勉強におおむね集中できる仕組みとなっている。そしておのおのが選んだ分野にまつわる卒業論文を仕上げること（分量は、英語の場合 7500 語程度、日本語の場合 20000 字程度）で、英文科ライフの「あがり」となる。

英語学は様々な分野に分かれるが、どの分野の研究をするにせよ、言語の一般的性質・仕組みについて正確な理解をもつ必要がある。そのため、授業では、英語の詳細な事実と、その理論上の意味合いを総合的に把握する訓練に重点をおく。その際、日本語との比較も可能な限り試みる。

一方、英米文学は、英米に限らない英語圏全般の文学作品（詩、小説、演劇、批評など）を対象とする。作品テキストの精読と解釈を不動の出発点としつつ、その背景にある歴史をさかのぼって当時の社会や文化の動向に考察の対象を広げることもあれば、児童文学・大衆文学などのいわゆるサブ・ジャンル、あるいは文学と美術や音楽との諸関係などへと射程を広げることもある。

さて、個々の教員から授業・研究の内容をかいつまんで自己紹介しよう。

後藤教授：アメリカ文学、特にアメリカ南部の小説を主たる研究対象としている。南部は、自由と平等の国アメリカにあって、戦争まで起こして奴隷制度を守ろうとした土地柄。その土地に、戦争の敗北からほぼ半世紀を経た 20 世紀前半、突如独特の文学が花開き、すぐれた作家が陸続と登



場、この現象は「南部文芸復興(ルネッサンス)」とも称されるが、それはただの偶然だったのか。「偶然」といえば、無論それまでのこと。だが、もしもそれが偶然ではなかったなら、つまり「南部文芸復興」の百花繚乱が長い雌伏のときを経て訪れた南北戦争後の「戦後文学」の暴発なのだとすれば——この「もしも」が私の研究の起点にあり、私の研究をいまだに駆動している——ならば、一般に、戦争と、いや戦争の敗北と文学との関係はいかなるものか、と自然に問いがつながっていったのは、やはり私が敗戦国日本に生まれたからだろうか。こうして戦後文学としての南部文学の秘密を探るべく、これとはあまりに違って見える祖国の戦後文学を横目で見ているうち、昨今ではむしろ南部文学の側を横目で見ているような気もしており、授業中にそのあたりを口走る可能性は高いが、アメリカ小説をできるだけ正しく深く読む努力をするというのがすべての建前であることは言うまでもない。

新井教授：専門分野はイギリス文学と比較文学。主な関心はイギリスの「階級」の概念と文学における表象であり、特にイギリスの小説と18世紀以降のイギリスの演劇、文化を研究対象としている。「階級」との関連で、「郊外」「教養」「教育」「消費文化」「観光」「他者」といったテーマも扱っている。また、文学作品の映像化を中心としたアダプテーション研究、イギリス文学における「日本」の表象、そして最近ではイギリス文学、文化におけるエスニック・マイノリティの表象と受容の研究も行っている。

渡辺教授：統語理論が専門。高度な理論的判断がどのような形でデータの分析に反映されるかということに特に興味がある。最近は移動現象に焦点を当てて理論開発の研究をすすめている。授業では、さまざまなレベルにおいて、理論の基礎をおさえていくようにしたい。理論的研究というものは、(素人がよく誤解するように)一時のはやりすたりではなく、長年の積み重ねの中から生まれてくる重要な問題をいかに解決するかがその本質である。そのような研究伝統を身につけ、理解に努めるのが授業の主目標となる。そこから、どのようにして新しいものを創り出していくかは、それぞれの努力と工夫次第ということになる。

阿部教授：現代英米詩を主要研究対象とする。英語詩における〈伝統〉

の持つ呪縛力に敬意を払い古典的な作品をも考察対象とするが、出発点はあくまで現代であり、それ故「今、この現代世界において、わざわざ詩が書かれることに意味があるのか?」、「このような環境で我々が詩を読むとはいったいどういうことか?」、「どうして詩について語る必要があるのか?」といった学生諸君が当然持つ(べき)であろう疑問と関わり合うような授業展開が理想である。また刺激的な作品世界を体験してしまったときの、「ああ、何かこれについて語りたい。何とかしたい」という、ムズムズするような衝動にはけ口を与えうる批評の可能性を探るのも大きな目標のひとつである。

諏訪部准教授：アメリカの20世紀小説を主な研究対象としてきたが、そもそも小説とはいったい何なのかという大問題に関心があり、したがって19世紀小説を無視しているわけではない。この「大問題」を、個々の文学作品をどうすれば面白く読めるかという実践において考えるのが、当面の方針ということになる。教員の「文学」へのそのような関心は、授業にも当然反映されることにはなるが、それぞれの作品を、それぞれに相応しいスタンスを模索しつつ読んでいく以上、アプローチは限定的というより包括的となるはずであり、そのようにいわば柔軟性を強制する形で受講生自身の問題意識を拡大深化させることを目標としたいと思っている。

中尾准教授：専門は生成文法統語論。言語における文法規則の言語間変異を、主に日本語と英語の比較を通して探っている。特に、文における語の移動や語の削除(省略)の規則について、それぞれの構文がどのような場合に認可されたりされなかったりするのかを言語ごとに考察している。また、子供がどのようにそれぞれの母語の規則を習得するか、子供の文法と大人の文法がどのように異なっているかといった言語獲得に関する問いにも興味がある。

Barnaby Ralph 教授：2024年度着任。My main research interest is to do with early modern literature, culture, and comparative aesthetics in Britain. To that end, I often work with rhetorical texts from the seventeenth and eighteenth centuries, which offer useful insights into not only novels, plays, and poetry, but also a broader

range of arts such as music, painting, and architecture. Aside from this, my teaching includes courses on critical theory, regional literatures, writing technique, and research methodologies at both the undergraduate and postgraduate levels.

上記の7名の専任教員が担当する専門科目（概論・概説や演習・特殊講義）に加えて、教養学部や学外から招いた非常勤講師の先生方による専門科目（英語学特殊講義・英米文学特殊講義）や学部後期課程の共通選択科目としての英語科目（「英語後期(Speaking, Writing, Reading)」や「アカデミック・ライティング(Introductory, Intermediate, Advanced)」）も開設されている。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会も常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムも開かれている。

本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職をめざして大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、金融、製造など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。

以下、参考までに最近の卒業論文の題目を分野ごとに一覧しておく。（順不同）

#### <英語学>

The Japanese *Tough*-Construction and The Complementizers *no* and *koto*

Erroneous Use of Past Participles by Japanese Learners of English

The Comparison of Comparative Correlative Constructions in English and Japanese

A Study on Classification of Japanese Indirect Passives

#### <英文学>

Three Women of *The Moon and Sixpence*

What Ishiguro Expresses through Stevens in *The Remains of the Day*

*Pride and Prejudice*: The Presentation of a New Type of Heroine

The Comedic Element of Misunderstanding of *Emma*

Peer Pressure and Exclusion in *Brave New World* and *Ninety Eighty-Four*

Literacy and Esther's Character in *Bleak House*

What Is Wrong with Nelly Dean?: The Sense of Order in Emily Brontë's *Wuthering Heights*

Bernard's Narrative Failure in *The Waves*

Views on love in *The Taming of the Shrew* and *Kiss Me, Kate*

Law and Order on the Ship: The Language of Sailors in *The Bird of Dawning*

< 米文学 >

Interpreting Diaspora: An Analysis of Min Jin Lee's *Pachinko*

The Ending of *Adventures of Huckleberry Finn*

A Study of the Narrative of *Winesburg, Ohio*

Narrative and Context in Poe's "Ligeia"

Loquacious and Obscene Portnoy: The Self-Conscious Discourse of an Intellectual Jew

Narrative and Vision in *The Turn of the Screw*

Caroline Compson as the Mother in *The Sound and the Fury*

A Study of the Jewishness in *Goodbye, Columbus*

A Study of *Adventures of Huckleberry Finn*: On Huck and Jim's Separation and Reunions

F. Scott Fitzgerald's View of Class in *The Great Gatsby*

The Requirements for Being a "Beautiful" Grotesque: What George and Helen Get on the Hill in *Winesburg, Ohio*

# ドイツ語ドイツ文学

## ◇教員◇

教授：大宮勘一郎、宮田眞治、KEPPLER-TASAKI, Stefan

准教授：山本潤

## ◇学生◇

学部：3名、修士課程：8名、博士課程：15名

### (1) 独文研究室について

独文研究室は、文学部3号館4階、東に三四郎池を見おろし、西に総合図書館前広場を見渡す位置にあって、四季の移ろいと一日の時の流れを鮮やかに感じることができます。ここでの学生生活は、ときには木洩れ日を浴びながらゆったりと、ときには激しく自己の内部の時間と対峙しながら営まれることになるでしょう。

一番大きな中央の部屋にはコーヒー・紅茶・緑茶等も用意されていて、いつも学生や教員が出入りし、研究室全体の談話室ともなっています。そのほかに、ゼミ室、辞書室（兼自習室）、学生室、教員室があります。中央の部屋と辞書室には共用パソコンが置かれ、ゼミ室にはビデオ・オーディオ装置もあって、リートやオペラ、演劇、映画等の鑑賞会場にも、また、コンパ会場にも化けます。

### (2) ドイツ語とドイツ文学について

ドイツ語のあり方をわたしたちの日本語と比べるとき、言語構造以前に目につくのは、英語などとはまた違った意味で国境を越えた言語だということでしょう。国があって国語がある、あるいは、ひとつの言語を使う集団がまとまってひとつの国家を作ってきた、というのではなくて、この言語は中央ヨーロッパの広い地域で使われてき、現在はそれが、おもにドイツ、オーストリア、スイス（の大きな部分）に集中している、ということなのです。日常的に使用しているという意味のドイツ語人口は、現在、およそ1億人をかぞえますが、とくに東欧でドイツ語を理解する人は少なくなく、歴史的なドイツ語文化・文学圏となると、さらに大きく広がります。

また、汎ヨーロッパ的な移動・移住の歴史も手伝って、ドイツ文学史に登場する詩人・作家・批評家には、ユダヤ系はもちろん、フランス系、イタリア系、スラブ系の名も多く見出されるのです。

ドイツ語・ドイツ文学の歴史は、ゲルマン大移動後、カール大帝の帝国がまもなく成立する時期にあたる、8世紀半ばの古期ドイツ語の成立をもって始まるとされています。日本では奈良時代のことです。そして12～13世紀、日本でも武家文化が始まったころ、ドイツ文学は騎士文化の一翼を担って最初の隆盛期を迎えます。それから16～17世紀にはルターの聖書翻訳を大きな契機とする新高ドイツ語（近現代ドイツ語）の成立を見、それを言語上の基礎として1800年前後（ゲーテやロマン派の時代）に近代前期の、また、モデルネ期（19世紀末からの約40年）に近代後期の、多様な文学が咲き誇る時代を迎えます。それに続く狂乱の10数年は文学状況にも暗い影を投げかけ、多くの文学者が国外に逃れることにもなりましたが、20世紀後半、分裂国家の状況を背景に東西それぞれに新しい文学が生まれ、さらに20世紀末の再統一を経て、ベルリンに象徴されるように、東西対立とその解消した時代の問題をいわば最前線で経験しているドイツの文学は、現代の状況を集中的に体現しているもののひとつとも言えるでしょう。

ドイツ語といえば、「カタイ」とか、格変化が面倒だとか、の声をよく耳にしますが、ひとつの言語空間は、そうした表面的な印象でまとめてしまえるほど狭いものではありません。グリム童話もエンデの作品もドイツ語で書かれています。ドイツ歌曲の詩も、『ファウスト』も、ホーフマンスタールの流麗な文章も、ドイツ語が紡ぎ出したものです。どの言語も、その言語独自の構造を、メロディーとリズムを、美しさと緻密さを、柔らかさと硬度をもっています。ドイツ語も例外ではありません。そしてドイツ語にも、ドイツ語特有の思考形式と、言語としての全体性が宿っているのです。日本語と比べた場合、概念性が際立つ一方、その概念性もとても具象的なイメージとつながっており、それが概念性を、つかみやすい、生き生きとしたものになっていることは、もうこれまで学ぶ中で気づいている諸君も多いことでしょう。母語と英語以外に今ひとつ、別の言語を獲得することは、とても知的刺激に満ち、かつ、自己を相対化しながら広げてゆくのにきわめて有効なことでしょう。

### (3) 専任教員の紹介

現在の専任教員を簡単に紹介すればつぎのとおりです。

大宮教授：近現代文学担当。19 世紀末から 20 世紀の文芸と思想の関わりを、ベンヤミン、エルンスト・ユンガー、ハイデガー、アーレントなどを結節点にして考えている。

宮田教授：近現代文学担当。リヒテンベルク、ノヴァーリス、ヴィーランドなどに重点を置いて、現代の文芸理論も参照しつつ、＜啓蒙主義とロマン主義＞がはらむさまざまな問題と可能性を、その前史と後史のなかに探ろうとしている。

KEPPLER-TASAKI 教授：近現代文学担当。ゲーテを研究の中心としながら、近世から 20 世紀半ばに至るドイツ近現代文学を、祈り・アイデンティティ・メディアという諸領域との関わりで捉えようとする研究を精力的に進めている。

山本准教授：中世文学・ドイツ語史担当。『ニーベルンゲンの歌』をはじめとする英雄叙事詩を中心に、ドイツ語圏中世文芸を文化史的視点から研究している。また、中世文芸の近代以降の受容史研究に取り組んでいる。

そのほか、毎年数名の非常勤講師の担当する授業があります。

### (4) 卒業論文および卒業後の進路について

ドイツ語ドイツ文学専修課程を卒業するには、卒業論文を書かねばなりません。日本語の本文にドイツ語の要約を付します(逆でもかまいません)。ときに卒論を嫌がる学生もいるようですが、独文の学生のなかには、そういう人はほとんど見かけません。卒業後、たとえドイツ語が直接には役立たないところに職を得るとしても、ある程度息の長さを必要とする卒論という形で読みとを考えをまとめることは、思考の訓練であるとともに人生において大きな節目を刻むことになります。参考のために、最近の卒論タイトルを少し下に掲げておきました。

卒業後の進路は他研究室と同じく、大きく分けて、すぐに就職する人たちと大学院へ進む人たちに分かれます。就職先は出版・ジャーナリズム関係、コンピューター関係、銀行や商社、公務員ないし教員等、さまざまです。



~~~~~

「„Das Urteil “のテキストが持つ加速性について」

「シラー『ヴァレンシュタイン』における合唱団の効果とその背景」

「ブラームスのティーク受容—作品 33《ティークのマゲローネによるロマンス》を例に一」

「『ガラス玉遊戯』におけるキリスト教世界の役割とその象徴」

「ゲーテのタッソーについて」

「„Iwein “における zuht と triuwe」

「『晩夏』における教養的美学と『ヴェニスに死す』における退廃的美学の比較」

「『ヴィルヘルムマイスターの修業時代』と『ファウスト』におけるゲーテの女性像について」

「20 世紀ドイツ自然詩史におけるヴォルフガング・ベヒラー」

「Werner Herzog の作品における動物のイメージの変遷の分析」

~~~~~

#### (5) その他

もっと詳しく知りたい人は、本郷のドイツ文学研究室を気軽に訪ねてください。学部生や院生、教務補佐の人たち、あるいは教員がよろこんで相談に乗ってくれるはずです。

#### 「学生から」

僕は進学ガイダンスのための原稿を依頼され、談話室で頭を抱えていた。ふだん居心地良く過ごしている独文研究室の日常を、くだけ過ぎずに文学的な矜持を保って紹介するためにはどうすればいいか見当がつかなかったのだ。そこでコーヒーを淹れていた教務補佐の<sup>ヘー</sup>Hさんは、『魔の山』に研究室を例えてみてはどうかと提案をしてくださり、僕は粗筋を思い起こそうと試みた。この教養小説の主人公が経験する雰囲気と生活は、独文科のそれに比することができるだろうか？

『魔の山』の主人公ハンス・カストルプは、造船技師として就職する直前に、高原のサナトリウムに束の間だけのつもりで滞在する。そこでは無為徒食の安逸な生活が営まれている。社会人としての義務から当分解放されて心に余裕ができた彼は、療養のために豪華な食事を食べ、たっぷり昼寝をしつつ、雑多な本を読み漁り、愉快的先輩の病人たちからも多くの思

想を吸収していく。不治の病が支配する、死の世界、一度入ったら二度と出られない『魔の山』で、彼は「教養」を積むのである。下界の日常生活から隔離された高山での、いつ終わるとも知れない療養生活、「永遠の水平状態」の中で、ハンス・カストルプは浮世離れし、時間の感覚を失い、気づけば何年も経ってしまっている。

「そんな空恐ろしい例えをするなんて！」隣で授業の予習をしていた同級生の<sup>イ</sup>さんが叫んだ。たしかにこの比喩には問題がある。独文科が「一度入ったら二度と出られない」「不治の病が支配する世界」だなんて！ 研究室の学生たちがいかに学問に熱中して現実感覚を失っているとしても、決して病人や社会不適合者ではありえないし、面倒見の良い教授たちもその病気を助長して一生退院できなくさせる悪い医者などでは決してないはずだ。それに皆が僕のように、「永遠の水平状態」を、すなわち就活もせずに大学院に入院し、談話室にいつもある高いお菓子を遠慮なく食い散らかし、研究題目と関係のない本ばかり寝転がって読み、それを「教養」と称して両親を煙に巻くような、のらくら者の学生生活を送っていると決めつけるのは、真面目な学友たちに非常に失礼であろう。

かれこれ一時間も I さんが分厚い辞書で単語調べをしている光景からも分かるように、独文科の多くの学生たちは、無為徒食どころか、きわめて勤勉である。読書が単なる暇つぶしではなく、地道な研鑽に値する精神の修養であることを心得ている。しかし彼らの禁欲的な努力は心を揺さぶられた読書体験に根ざしているものであり、またその努力こそが再び感動へと通じる道であることも彼らは知っている。素朴な感動と深まる知識とを調和させようと日夜心がけている若い学生たちは、死の世界だなんてとんでもない、真に生き生きとした精神の世界の住人なのだ。

つまり、文学好きの陥りがちな銜学とは縁遠い、真摯で物静かな、上品なユーモアを持った人々が共に学ぶのが、この独文科である。原稿を無事書き終えた僕は、Hさんの淹れてくれたコーヒーを飲みながら、明日の新歓コンパで多くの人と語らうのを楽しみにしている。思えば初めてのコンパから、楽しい仲間と過ごしているうちに、あっという間に丸二年が経ってしまった。僕が時間感覚を失っているとしたら、やはりここは『魔の山』なのだろうか？ そんな空恐ろしいことは、考えないでおう。

(小林重文 2013 年進学)

# フランス語フランス文学

## ◇教員◇

教授：塚本昌則、塩塚秀一郎、王寺賢太

助教：浜永和希

## ◇学生◇

学部：22名、修士課程：11名、博士課程：18名

### (1) 仏文研究室はどんなところか

フランス語をキーワードとして、文学的テクストを読み解く力を養うべく切磋琢磨しあう者たちの集う場所。それがフランス語フランス文学研究室、略して仏文研究室である。

わが国ではこれまで、フランス文学は世界の文学の中でも特別の位置を占めるものとして熱心な受容の対象となってきた。泥棒詩人ヴィヨンの詩やラブレーの破天荒な『ガルガンチュア』から、バルザックやブルーストによる偉大なる小説の探求、ボードレールやランボーによる尖鋭的な詩の冒険。そしてシュルレアリスムから実存主義、構造主義に及ぶ、さまざまな思考の展開に至るまで、フランス文学の歩みは私たちに惹きつけてやまない刺激的局面に満ちている。その魅力と真に触れあうためには、フランス語の原書をひもとく以外に道はない。原典のページを開き、辞書を頼りにひたすら読み進める。それは異国の言語のただなかをさすらう旅への出発にほかならない。仏文研究室では、その旅に必要な知力、体力をはぐくむためのトレーニングが多様な形でほどこされる。

同時にまた、仏文研究室が根本的にきわめて自由で、学生がそれぞれの道を進むがままに任せる寛容の精神を旨とする場所であることも強調しておこう。ラブレーが『ガルガンチュア』中で描き出した理想境である、テレームの僧院を律する規則「汝の欲するところをなせ」は、そのまま仏文のモットーである。小林秀雄や太宰治、大江健三郎を始めとして、これまで東大仏文がおびた数々の文学者、著述家、そして芸術家を生み出してきた背景には、そうした不羈独立を尊ぶ精神的土壌がある。その伝統はいまも脈々と受け継がれている。

もちろん、教員側はただ放任をこととするのではなく、学生からの質問

や相談に喜んで応じ、学生との対話を何よりも大切に考えている。また仏文研究室は修士・博士課程の学生を多く有する。彼らは先輩として気さくにアドバイスを与えてくれることだろう。

## (2) 仏文ではどのような授業がなされているのか

講義、演習ともに仏文の授業の基本は「訳読」である。読んで訳すという語学習得のスタイルは今日、不当な蔑視にさらされている。だが、初級文法の知識を実践の場に活かしつつ、日常会話のレベルを超えた複雑で豊かな意味を含みもつ文章をじっくりと読み解くために、そして自らの理解度を確認しつつ進んでいくためには、訳読ほど頼りになるメソッドは存在しない。冠詞ひとつおろそかにせず、時制や法に十分注意しながら自分の読み取ったところを日本語に移してすることで、いったい自分には原文がどこまで読めているのか、そしてどのような点に理解の不足があったのかをはっきりする。そうやって講義は、各自の準備してきた解釈と教師の解釈とが時にはしのぎを削り、照射しあう場となる。フランス語という異国語で書かれたテキストの「正体」を、ともに力を尽くして明らかにしていくことが、仏文の授業の醍醐味である。

もちろん、訳読だけで十分だというのでは毛頭ない。フランス語を聞き、話し、そして書く練習もまたたつぷりと積む必要がある。仏文では現在、フランス人教師による授業を週 2 回開講しており、実践的なフランス語力をいくらかでも伸ばしていけるだけの環境が整っている。

2008 年度からジュネーヴ大学への、そして 2018 年度からはさらにパリ第 8 大学への留学生派遣制度が設けられたことも特筆しておこう。毎年、学部ないし大学院の学生を派遣し、一流の教授陣の講義・ゼミに出席してフランス語の習得に励むと同時に、文学研究の基礎的知識・方法論を学んでもらう。有意義な留学生生活を満喫した後の進路は、大学院で研究を続けたり、社会に出て活躍したりとさまざまである。留学を希望する学生は、フランス語力に研ぎをかける必要があることはもちろん、留学事情について自分で情報を収集したり、経験のある先輩方に話を聞くなどの準備を進めたりする必要もある。全学交換留学に制度が変わったことにより、フランスのストラスブール大学、グルノーブル・アルプ大学への語学研修留学が可能となったことも付言しておく。

また、仏文研究室は世界のフランス文学研究者や作家、批評家がひんば

んに訪れる、国際的な交流拠点の一つであり、いわば東京にいながらにしてソルボンヌの講義に連なる気分を味わうような機会に事欠かない。近年では、ノーベル賞作家ル・クレジオを招いての講演会や、小説家ジャン＝フィリップ・トゥーサンを招いての討論会が開催され、広く話題を呼んだ。

### (3) 教員の専門と授業

ここで仏文科の教員をご紹介します。現在、専任教員は3名である。

塚本昌則教授の専門は、ポール・ヴァレリーを中心とする20世紀文学。とりわけヴァレリーにおける眠りと夢の主題に着目し、研究している。この視点を20世紀フランス文学全体に押し広げ、『目覚めたまま見る夢——20世紀フランス文学序説』（岩波書店）という研究にまとめている。また20世紀文学を再検討する研究プロジェクトを推進しており、共編著『声と文学——横断する身体の誘惑』（平凡社）等にその成果をまとめている。さらにクレオール文学を中心とする現代フランス文学の翻訳にも取り組み、ラファエル・コンフィアン『コーヒーの水』、シャモワゾー『カリブ海偽典』（いずれも紀伊国屋書店）等の訳書がある。近年の演習・講読では、ボードレール、ランボー、ボヌフォワ等の詩、フロベールの小説などの19世紀文学、ヴァレリー、プルースト、ブルトン、レリスなどの20世紀文学、セゼールの詩などのクレオール文学の講読をおこなっている。

王寺賢太教授は、モンテスキュー、ルソー、ディドロなど18世紀フランスの哲学者の政治・経済・歴史思想が専門。そのかたわらアルチュセールやフーコー以下、20世紀の哲学者たちの仕事にも旺盛な関心を示してきた。現在、Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des Européens dans les deux Indes* (Centre international d'étude du XVIII<sup>e</sup> siècle) の批評校訂版共同編集責任者。著書に『消え去る立法者 フランス啓蒙における政治と歴史』（名古屋大学出版会）。著編著に日本の「近代の超克論」を再検討する *Éprouver l'universel. Essai de géophilosophie* (Kimé、共著) や、「68年の思想」の意義を説く『現代思想と政治—資本主義・精神分析・哲学』（平凡社、共編）など。講義では、上記の18世紀と20世紀の作家・思想家を中心に、＜考えること＞と＜書くこと＞・＜読むこと＞の関係に焦点をあわせて講義を行っている。

塩塚秀一郎教授の専門は、ジョルジュ・ペレックなどウリポ作家を中心とする近現代文学。著書に『ジョルジュ・ペレック 制約と実存』（中央公

論新社)、『レーモン・クノー 〈与太郎〉的叡智』(白水社)、『逸脱のフランス文学史 ウリポのプリズムから世界を見る』(書肆侃侃房)、クノーにおける〈知〉の概念を検討した仏文著書 *Les Recherches de Raymond Queneau sur les fous littéraires. L'Encyclopédie des sciences inexactes* (Eurédit) がある。近年はフランソワ・ボン等の近現代作家について、都市の日常、プロジェクト・アート、歩行などのテーマを設定して研究している。また、E の文字を使わずに書かれたフランス語原文を〈い段〉抜きの日本語に翻訳したペレック『煙滅』(水声社)のほか、クノー『あなたまかせのお話』(国書刊行会)などの訳書がある。近年の演習・講義では、レリス、ゾラ、ポンジュ、ヴェルヌ、ネルヴァルなどの原書講読のほか、アトリエ・デクリチュール(文章教室)の実践を行っている。

フランス語学フランス文学の研究対象は多岐にわたるため、専任教員だけではとてもカバーしきれない領域が残る。そうした領域については、毎年学外から専門家の方々を非常勤講師として招き、その研究成果をご披露いただいている。今年度は、高名康文講師(成城大学・中世文学)、畑浩一郎講師(聖心女子大学・19世紀小説)、鈴木和彦講師(明治学院大学・近代詩)、廣瀬純講師(龍谷大学・映画批評)、木島愛講師(千葉工業大学・言語学)に出講をお願いしている。それぞれの専門を活かした講義では、フランス語学および近代詩、シュルレアリスムの専門的研究を通じて、幅広い専門分野を学ぶことが可能である。

フランス文学は時代順にいったって武勲詩・聖杯伝説などの中世文学、人文主義、古典主義、啓蒙主義、ロマン主義、自然主義、シュルレアリスム、実存主義という文芸思潮をたどり、しかもそのすべてにおいて時代の先端をゆく作品を産み出してきた。一国文学でありながらヨーロッパ世界の精神史の流れを先取り、ないしリードしたとってよく、これをたどることによって、副産物として、世界文学への展望を容易に把握することもできる。学部でその基本をまず学ぶことによって、複雑な様相を呈している現在の状況への認識をさらに深める道が切り開かれることだろう。

#### (4) 卒業後の進路

一般企業や金融関係、公務員、あるいは新聞・放送・出版、さらには図書館関係や教職など、多岐にわたっている。ただし教職に関しては、現状では高校段階まではフランス語担当で教職につくことはほとんどありえな

いため、在学中に英語、国語その他の教科単位を修得するものが多い。

また、学部 2 年間の学習では物足りないという諸君は、大学院修士課程に進学して研究を深めることをお勧めしている。大学院入学希望者は、本学以外からの志望者も含めて定員の約 3～4 倍程度。最近、修士号を取得した上で就職する学生が増え、一般企業や、新聞・出版関係に就職している。なお、博士課程に進学すると将来はほぼ教育職研究職に限定され、その就職先は容易には見つからない。博士課程への進学に際しては、自分の適性と待ち構えている苦しい将来を考えあわせた上で、相当の覚悟をもって臨む必要がある。

なお就職状況に関して、詳しくは仏文研究室ホームページをご参照いただきたい。毎年、社会のさまざまな分野に人材を送り出していることがわかりいただけるだろう (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/futsubun/career/>)。

#### (5) 最後に

仏文においてすべての基本となるのはフランス語力だが、これは地道に練習を重ねればだれでも等しく上達を望めるものである。努力さえ怠らなければ、ある時点で急に自分が「離陸」した実感を抱けるはずだ。聞き、理解する力さえあれば、インターネットを通して 24 時間フランス語に接することができる現在の環境を積極的に活用し、世界をどんどん広げてほしい。各自が自由に、のびのびと学ぶのが仏文研究室の伝統であることをもう一度、強調しておこう。臆せずその門をくぐっていただきたい。



# スラヴ語スラヴ文学

## ◇教員◇

教授：楯岡求美

准教授：平松潤奈

助教：宮川絹代

## ◇学生◇

学部：1名、修士課程：3名、博士課程：5名

## スラヴ語スラヴ文学研究室とは

スラヴ語スラヴ文学研究室は小さいながらも個性あふれた研究室です。ロシアはもとより、西はドイツに至るまでのヨーロッパ中部、北はバルト海沿岸から南はバルカン半島まで、広くスラヴ世界の言語文化の研究に取り組んでいます。地域の多様さだけではなく。研究分野も、スラヴ諸語比較言語学、ロシア、ポーランド、チェコなどスラヴ諸地域の言語と文学、映画・演劇など諸芸術や文化、フォークロアなど、多様です。その広大で多彩な領域を逍遙し、自分のテーマを見つけ出すことは必ずしも容易ではありませんが、大きな楽しみでもあります。

## 特色

本専修課程の特色は、中世から近代・現代に至るまでの約 1000 年に及ぶスラヴの語学・文学・文化を、幅広く視野に入れている点にあると言ってもよいでしょう。スラヴ学においては、文学研究と言語研究は車の両輪のように不可分の関係にあるという考えを持ち、言語と文学の双方の教育と研究に力を入れてきました。したがってロシアのみならず、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ等、さまざまな地域の言語と文化について学習できるよう、授業を開講しています。また映像を扱う授業では、時に専門家や各国の文化広報センターなどにも協力をいただき、みなさんが文化的多様性を具体的に理解できるよう工夫しています。

個人の人生経験は狭く限られたものでしかありませんが、言語の形成・変遷を追うとき、また、作家たちの深い洞察力によって描かれたスラヴ文

学のしばしばエキセントリックにも思える世界に入りこむとき、多彩なものを見方をシミュレーションのように体験する機会を与えてくれます。

## 国際交流

教員、大学院生、学部生を問わず、学問上の経験や専門分野の違いを超えた自由な交流を尊ぶ気風は、研究室の良き伝統として受け継がれてきました。開かれた研究環境をモットーに、国内外から研究者、作家、アーティストなどの来訪者を積極的に受け入れ、講演会、シンポジウム、映画上映会なども積極的に開催しています。

研究会や読書会では授業とは一味違う「スラヴ文化体験」をすることもできるでしょう。

## 駒場からの進学にあたって

ロシア語の基礎的な学力を身につけておくことが望ましいですが、進学を希望するようになってからロシア語などを勉強しはじめた学生も少なくありません。スラヴ語も印欧語族ですから、英語、ドイツ語、フランス語など西欧諸語についての知識も、スラヴ文化を学ぶ際に強力な武器になります。広い視野をもって積極的にさまざまな言語を学び、幅広い知識を習得されるよう、お勧めします。

## 留学

東京大学は、ワルシャワ大学、サンクトペテルブルク大学などスラヴ圏の大学とも協定を結んでいます。その他の大学への留学に際しても個別に相談にのったり、語学研修などについても各大使館等からの情報を提供しています。

## 卒業生の進路

出版社や報道関係、一般企業などさまざまな仕事に就く人と、大学院進学を目指す人がほぼ同じぐらいの比率です。近年では修士課程修了後に一般企業へ就職するのも普通になりました。セルビアやカザフスタンなど専門調査員として在外公館に赴任したりする人もいて、選択肢が多様化してきました。

## 研究室のヒストリー

本専修課程は 1972 年に創設された「ロシア語ロシア文学」専修課程を母体とし、1994 年「スラヴ語スラヴ文学」専修課程と名を改めました。といっても、ロシアはスラヴの周辺諸国はもちろん、フランスやドイツとの文化的つながりも深いので、1972 年当初からロシアに限らず「スラヴ学」というより広い視点からのアプローチが重要だとする認識があり、スラヴ語スラヴ文学に関する多言語多文化の授業を開講してきました。

チェコ語については、2013 年度に授業を開設し、2016 年度からは現代文芸論研究室にチェコ文学が専門の阿部賢一先生が赴任したことで、スラヴ研究室でもチェコの言語と文化の研究指導を受けることができるようになりました。

## 授業の一例

**【スラヴ諸語の初級】** 上述のように、本研究室では現在、ロシア語以外に、**ポーランド語**や**チェコ語**、**ブルガリア語**の授業が開講されています。

**新設【ウクライナの多様な文化を学ぶ】** 2022 年度から、日本ではこれまであまり取り上げられてこなかったウクライナに焦点を当て、多言語多文化状況への理解を深める授業「ウクライナの多様な文化を学ぶ」を開講しました。

授業ではしばしば、他大学や外国からもゲスト講師を招き、広い視野で多角的な研究を行うことを目指しています。

他大学のスラヴ学科との研究交流の機会も増えています。

## 2 年生も単位履修できる持ち出し授業

**【旧ソ連東欧の映像と文学】／【スラヴ映像文化研究】** 言語学的な授業や、文学作品の講読・分析を行う授業の他に、ソ連・旧東欧の映画を鑑賞し、その地域の専門家が解説を行い、歴史や文化に対する理解を深めることを目的とする授業もあります。

**【スラヴ文学史概説】** の授業とともにロシア語を必須としない授業とし、スラヴ研究室以外の学生・院生のみなさんとも、スラヴ地域について学び、考える機会を作る試みです。

## 最近の学位取得論文

本専修課程で最近、学位を取得した学生の論文も一部ご紹介しましょう。

### 博士論文：

『アレクサンドル・ブローク詩学と生涯』未知谷、2021年（東京大学而立賞、サントリー学芸賞受賞）

『オレーシャ『羨望』草稿研究：人物造形の軌跡』成文社、2021年（東京大学而立賞、日本ロシア文学会賞受賞）

『ロシア啓蒙主義の迷景 エカチェリーナ二世時代の官僚作家が目指した近代』群像社、2024年。

「ボリス・パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』におけるモチーフの構造研究」

### 修士論文：

「ナスターシャ・フィリーポヴナの美の二重性：「世界をひっくり返す美」のダイナミズム」

「ガルシン戦争作品群における人々の苦しみの分析」

「ドストエフスキーにおけるアフェクト論研究—感情・情動概念によるアプローチ」

「ヴァルラーム・シャラーモフの短編作品群『コルイマ物語』における自然観」

「ユーリー・ノルシュテインとエドゥアルド・ナザーロフのアニメーション作品における自然描写の比較」

「ソルジェニーツィン『第一圏のなかで』について スターリンと外交官ヴォロディンの人物像形成を中心に」

「アンドレイ・ベールイ『ペテルブルク』における都市空間についての分析 —ドゥートキンの屋根裏部屋を中心に—」

### 卒業論文：

「ゴーゴリ作品におけるペテルブルク表象—「ネフスキイ大通り」を中心に—」

「イヴォ・アンドリッチ『ドリナの橋』における「永続性」と「忘却」

『カラマゾフの兄弟』イワンの無神論について」

「カレリア共和国と『カレワラ』」

「書記言語の社会的意味：北イタリアのスロヴェニア語レジア方言を例に」（2023年度文学部長賞、総長賞受賞）

## スタッフからの自己紹介です

以下、研究テーマと授業で扱う内容などについて紹介します。

学生・院生の多様なテーマに対して、丁寧に相談に応じることを心がけ、国内外のつながりのある専門家にアドバイスをもらえるよう、環境を整えています。

**楯岡求美教授：**多民族国家ロシア・旧ソ連圏のロシア語文学、演劇、映画などを研究対象としています。特に 20 世紀初頭のロシア・アヴァンギャルドの時代、戦争や革命などによる大きな社会変動の中で、使い古された表現を捨て、意味と記号の関係を刷新する実験的な表現が探究された時代に興味を持っています。テレビやハリウッド映画などに見られる喜怒哀楽を自然に表現する演技もこの時代のロシアで形作られ、今の私たちの意識や世界観の土台となっています。ユートピアや自分探しを志向し続けるロシア語文化をモデルケースとして、近現代の意識を形作ってきた価値観を相対化するような研究をめざしています。

**平松潤奈准教授：**19 世紀後半から 20 世紀にかけてのロシア・ソヴィエト社会が、どのように西欧近代の諸価値を受け入れ、発展させるとともに、反発し、対抗原理を生みだしてきたのか、その過程を文学テキストのなかを探っています。身体表象、メディア論、検閲論、新経済批評などの多様な観点を取り入れ、文学テキストを歴史的・社会的文脈に開くようつとめています。特に専門としてきたのは、スターリン時代の公式文学や反体制作家ソルジェニーツィンの作品ですが、最近では、19 世紀文学（主にドストエフスキー作品）や、21 世紀のポストソヴィエト時代の記憶の問題にも関心をもっています。

**宮川絹代助教：**1917 年のロシア革命を機に国外に亡命した作家や詩人による第一次亡命ロシア文学を研究対象としています。第一次亡命ロシア文学は、亡命前に文学活動を開始した「年上の世代」と、亡命後に開始した「年下の世代」という二つの世代の間で異なる特徴を持っていますが、どちらも失われた「ロシア」に対する強い希求を宿します。そこに生まれる「ロシア」という幻想を探りながら、国や文化の個別的特殊性について、また、それを超えた普遍的な自己と他者の問題について考え続けています。特に文学作品に現れた知覚イメージに関心があります。

FB では研究室の企画以外にスラヴ文化に関するいろいろな情報を提供するようにしています。

二次元バーコードがありますのでご利用ください

スラヴ HP



[https://www.l.u-tokyo.ac.jp/  
slav/index.html](https://www.l.u-tokyo.ac.jp/slav/index.html)

スラヴ FB



[https://www.facebook.com/  
SlavicStudiesUTokyo/](https://www.facebook.com/SlavicStudiesUTokyo/)

## 南欧語南欧文学

### ◇教員◇

准教授：Lorenzo Amato, 土肥秀行

助教：長野徹

### ◇学生◇

学部：3名、修士課程：2名、博士課程：4名

研究室の名称は、2025年4月1日をもって「イタリア語イタリア文学」に変更予定である。一方、研究教育活動はこれまで通り継続される。学部と大学院の正式名称については要問合せ（[l\\_sel@l.u-tokyo.ac.jp](mailto:l_sel@l.u-tokyo.ac.jp)）。

### ○本研究室の概要

国内では京都大学に次いで2番目、現時点で最新の、イタリア語イタリア文学に特化した研究室である。1979年、文学部に「イタリア語イタリア文学」研究室として設置され、1994年から2025年3月までの31年間は「南欧語南欧文学」と称する。目下、創設から半世紀となる2029年を目指し、研究室の再活性化を図っている。

現代のイタリア語を学ぶと、800年前に成立したダンテ『神曲』まで読めてしまうとまことしやかに言われるように、文学語の伝統の強さはイタリア文学の特徴のひとつである。古典の時代以降、各年代（ルネサンス、バロック、近現代）を代表する作家と作品によって、イタリア文学の伝統は力強く受け継がれてきた。それは明治中期以降、日本に積極的に紹介されてきたとおりである。イタリアの文学と文化の受容には、ヨーロッパやキリスト教の精神を知るため、同盟国間の文化理解を深めるためといった社会的・政治的意図がはたらいていたが、文学テキストをそれそのものとしてとらえようとするアプローチが、20世紀の後半になってようやく可能となってきた。その受け皿としての意義が本研究室に認められる。

現在は3名の専任教員（日本語母語者2、フィレンツェ出身のイタリア語ネイティブ1）、および5名の非常勤講師が授業を担当し、なによりもまずイタリア語で書かれたテキストを正確に読解する訓練を行う。それだけでなく、作文や会話の面でも学生が現代イタリア語の運用能力をしっかりと身



に付けられるようカリキュラムが組まれている。学生は各自の興味に従い、卒業論文のテーマを選ぶことになるが、その幅は、古い時代の韻文からファシズム期以降の小説までと限りなく広い。学生数は、平均では、教養課程から進学する者、学士入学する者、大学院に進む者、それぞれ1から2名である。学部卒業後の進路はさまざまであるが、大学院を修了したのち、研究職に就くだけでなく、翻訳業で活躍する者もいる。本研究室における研究活動は、紀要『イタリア語イタリア文学』に収斂する。この学術誌は、年1回発行、査読付きで、伊語もしくは日本語での執筆が可能な体制となるよう再整備中である。しばしば国内外の研究者が訪れては、夏季集中講義、講演会やシンポジウムを行っている。イタリア文学とはいえど、東アジア圏での連携をまずは研究者同士で図っていくことを近年の課題としている。

#### ○イタリア語イタリア文学について

イタリア語は、ラテン語の故地で形成された言語だけあってラテン語の風格をよく保っている。最古文献の作成された年は西暦960年（モンテカッシーノ修道院の所領地をめぐる裁判記録の中に見いだされる）であり、フランス語の初出文献より120年ほど遅れるが、これは西欧中世の共通文語であったラテン語が、イタリア半島の文化に深く根づいていたためである。

イタリア語（俗語）を用いた文学作品は13世紀初頭より現われるが、同世紀末より14世紀にかけてダンテ（叙事詩）、ペトラルカ（抒情詩）、ボッカッチョ（散文）というイタリア文学史の最高峰をなす作家の輩出をみる。その背景に他の西欧諸国に先駆けてイタリアに興ったルネサンス運動のあったことはいうまでもない。トスカーナ地方出身のこれら三大作家の功績により、イタリア標準文語の実質的な形成が14世紀になされたことは特筆すべき事柄である。以後今日に至るまでイタリアの標準文語の基本的性格は大きくは変わっていない。

14世紀以後も、叙事詩（アリオスト等）、抒情詩（レオパルディ等）、劇詩（メタスタジオ等）、戯曲（ゴールドーニ等）、小説（マンゾーニ等）、批評（クローチェ等）、思想（ヴィーコ等）など、イタリア語を用いるあらゆるジャンルで活発な活動が展開されてきた。また、地方文化の多様性を特色とするイタリアでは、標準語と同じくラテン語から派生したとはいえ、標準語とは様相を異にする方言が全土で根強い生命を保っている。方言を用いた文学作品にもみるべきものが少なくない。

イタリア語は西ヨーロッパ文化圏において有数の豊饒さを誇る文学を生み出し、イタリア文学はその文化的先進性によって、他地域の文学に大きな影響を及ぼしてきた。イタリア語イタリア文学を学ぶことは、近代西欧文化の根底に触れ、その行き届いた理解を得る上で重要な契機となろう。

#### ○イタリア語イタリア文学の授業について

講義を通して、できるだけ多様な作家・時代・ジャンルに触れられるようカリキュラムが組まれている。

講義を担当する専任教員2名（詳しくは後述）のうち、ネイティブ教員のロレンツォ・アマートが、実践的なイタリア語運用能力（話す、聞く、書く）を育むレッスンのみならず、専門のルネサンス文学における諸ジャンル（韻文・説話・評論文）それぞれについての講読授業を担当している。対象作家には、ダンテ、ボッカッチョ、ペトラルカがかならず含まれる。もうひとりの専任教員である、近現代文学を専門とする土肥秀行が、18~20世紀のイタリア文学史を講じ、前衛芸術における言語表現の講読を行っている。

非常勤講師の面々は、人文主義の中心に位置するアルベルティ（横田太郎）、18世紀の劇作家アルフィエーリ（大崎さやの）、19世紀最大の詩人レオパルディ（古田耕史）、初期レアリズム文学を代表するヴェルガ（倉重克明）といった、思想史・文学史上重要な文人を専門としており、授業でもしばしば扱う。くわえてイタリア語学を専門とする講師（土肥篤）が、イタリア語史と文学の関係を講じる。

#### ○3名の専任教員の紹介

卒業論文と大学院生の研究に関して、専任教員が積極サポートを行う。

准教授のロレンツォ・アマートは、16世紀韻文を扱う文献学者として、未刊行の資料をアーカイブから掘り起こしている。過去には、フィンランド語フィンランド文学を母校のフィレンツェ大学で講じ、フィンランドのユヴァスキュラ大学ではイタリア語とイタリア文学を教えた経験をもつ。北欧から南欧までに広がる古典学の国際的な研究者ネットワークの一翼をなし、国際学会に定期的に参加、また国内でのシンポジウム開催を年に数度催している。2025年10月から一年間、在外研究期間を予定している。

もうひとりの准教授の土肥秀行は、20世紀文学を中心に研究を行ってき

た。なかでも映画で知られる詩人パゾリーニのフリウリ方言詩、日本の詩歌の影響で短詩形を試みたウンガレッティ、ヨーロッパ前衛のはしりである未来派の宣言文を扱ってきた。授業では、現代文学のほかに、日本であまり研究されることのないバロック文学、詩人マリーノを取り上げている。イタリア、アルゼンチン、アジアのイタリア研究者との連携を深めるシンポジウムやセミナー活動を行っている。

専任の助教である長野徹は、研究室運営に携わる一方、現代イタリア文学と児童文学の数多くの作品を訳してきた。ディーノ・ブッツァーティ『動物奇譚集』の訳業により、2023年に須賀敦子翻訳賞を受賞した。

#### ○進学を考えている人へ

進学者は、教養学部において、イタリア語の授業（初修クラスあるいは第3外国語初級・中級その他イタリア語関連の授業）を履修した人が中心となるであろうが、やる気さえあればイタリア語未習でも構わない。本研究室では、スペイン語やポルトガル語の授業も開講しているので、旺盛な好奇心でチャレンジしてもらいたい。またラテン語（できれば併せて古典ギリシャ語）の知識は、ハードルは高いが、イタリア語とイタリア文学についての深い理解のためにマストと考えてもいい。文学部では、多様な世界文学に浸るだけでなく、思想や歴史や社会学といった諸分野への無限な広がりをも十分に味わう2年としてほしい。

常に少人数の授業は、理想的な学びを可能とする一方、質的・量的に負担となる場合もあろう。教員側としては、できるだけ風通しのよい研究室運営により、様々な声があげやすくなるよう心掛けている。

# 現代文芸論

## ◇教員◇

教授：柳原孝敦

准教授：阿部賢一、藤井光

助教：須藤輝彦

## ◇学生◇

学部：16名、修士課程：16名、博士課程：23名

### （１）現代文芸論はどんなところで、どういう人に向いているか？

現代文芸論は 2007 年に発足した、比較的新しい研究室です。この研究室が何を目指し、どういう人に向いているか、最初に簡単に説明しておきましょう。

現代文芸論は、世界の文学を、日本文学も世界文学の一部として視野に入れながら、現代的な観点から研究する場所です。きちんとした枠組によって規定され「できあがった」ディシプリンとはまだ言いにくいかもしれませんが、私たちが目指しているのは、新しいディシプリンの確立というよりは、むしろ、伝統的な一国一言語別の「縦割り」を越え、様々な言語や作家たちの声が響き交わす出会いの場を作り出すことです。そういった研究室の精神を反映して、雰囲気はとてもオープンで、他専修課程の学生の皆さんや、様々な国の研究者が研究室に常時出入りしています。

そして、様々な分野に挑戦する学生・院生たちの交流の場を作るために、現代文芸論研究室では年に一回研究合宿を行うほか、作家や詩人や他大学・外国の研究者をゲストとして招いてシンポジウムや講演会などを活発に行っています。このように活気ある新しい研究室の輪郭をいっそう魅力的なものにしていくのは、私たち教員とともに、従来の枠組みを越えて開かれた可能性を探求していく学生みなさん、君たち、あなたたちのひとりひとりです。ぜひ、目の前に開ける未踏の沃野の開拓者となってください。

現代文芸論研究室の創設の出発点となったのは、広く世界の文学のありかたを視野に入れ、現代の文芸研究の成果を踏まえて広く世界の文学を研究する場を文学部に作る必要があるという認識でした。誤解のないように強調しておけば、この専修課程名はもっぱら「現代文学」を扱うという

意味ではありません。20 世紀の越境的な文学・文化研究の成果を踏まえ、21 世紀の現代の観点から文学に新たな光を当てたいという意味で「現代」なのであって、近代以降の文学全般が視野に入ります。したがって、ここで扱い得る具体的な研究対象（作家、言語、地域、時代など）は多様です。

そのため現代文芸論での勉強は単位選択の幅も広く、とても自由だとも言えますが、その反面、広い選択の幅の中で自分なりの研究の筋道を作っていかなければならないだけに、他の専修課程よりも自律性を求められることも覚悟してください。私たちの専修課程は、既存のディシプリンの枠にはまらない領域に挑戦しようという意気込みのある学生を歓迎します。また、文学を研究したいのだけでも、まだどれか一か国に専門を絞りきれない、といった皆さんに対しても、現代文芸論は門戸を開いています。

## （２）現代文芸論の発足

現代文芸論専修課程は、西洋近代語近代文学専修課程（以下「西近」と略記）を基礎にし、それを改組して 2007 年度に発足しました。これにともなって、「西近」の略称で親しまれてきた専修課程はなくなりましたが、実質的に西近の研究・教育内容はそのまま現代文芸論専修課程に引き継がれています。それまで西近は、専任教員を持たず、他専修課程の教員の兼任によって運営されてきましたが、現代文芸論は専任教員を持つ、完全に独立した専修課程です。

また、西近には大学院課程がありませんでしたが、2007 年 4 月には人文社会系研究科欧米系文化研究専攻の中に、現代文芸論専門分野の修士・博士課程が新設されることになりました。これは学部の現代文芸論専修課程の上に直結した大学院課程で、その趣旨や基本的な教授陣は学部の場合と同じですが、欧米のバックグラウンドから近現代日本文学を研究対象として視野に入れることも可能になるので、大学院課程では日本文学研究を目指す外国人留学生を積極的に受け入れる点が、これまでと異なる大きな特徴になっています。

## （３）授業カリキュラムと研究分野

具体的な授業カリキュラムについて言えば、従来の西近の基本的な枠組みを受け継ぎ、西洋近代を中心に、複数の言語や地域にまたがって世界の文学を幅広く見ることを基本方針としています。そして、欧米の近現代文

学の研究を基礎としながらも、伝統的な一国一文学の枠内に収まらないような分野や、既存の専修課程で扱い切れないような言語・地域なども視野に入れてカリキュラムを編成します。

授業の履修のしかたについて言えば、現代文芸論の専任教員による演習や講義が中心になるのは当然ですが、それ以外に、各自の興味と専門に応じて欧米文学および日本文学に関する様々な他専修課程の授業を履修し、一定程度まで卒業に必要な必修科目として認定を受けることができます。このように柔軟な「認定科目」制度を設けている点は、西近以来受け継がれてきた大きな特徴です。また現代文芸論の学生は、従来の西近と同様、広い知見を養うため、三言語以上の分野にわたって学習することが求められます。

具体的には、以下のような分野を積極的に扱うのが、現代文芸論専修課程の特色と言えるでしょう。

- ・ 翻訳論——その理論と実践
- ・ 批評理論
- ・ 欧米の一国一言語に限定されない視点からの文学研究全般（亡命文学、越境的な文学、世界文学論、文学におけるバイリンガリズムなど）
- ・ ラテンアメリカ文学、広域英語圏文学、中東欧文学など、既存の専修課程の枠内では専攻できない言語文化

専任教員の専門をごく簡単に紹介すれば、柳原孝敦教授はラテンアメリカ文学・広域スペイン語圏文化を扱います。阿部賢一准教授はチェコを中心とした中欧文学論、ボヘミア文学概説、比較文学の観点からは現代文学論、文化批評などの授業を担当します。藤井光准教授は現代英語圏の小説の読解と翻訳の授業を担当します。須藤輝彦助教は 20 世紀チェコおよび中央ヨーロッパ、そして啓蒙期のフランス文学を中心とした授業を通じて学生指導の一翼を担うとともに、学務上の事柄全般について研究室の要となります。

その他、文学部内からの協力教員として、英文の阿部公彦教授が批評に関する演習を受け持ちます。

ただし、現代文芸論の扱う範囲は非常に広く、文学部のスタッフだけでは扱い切れない分野については学外からの非常勤講師の方々に補っていた

だいています。非常勤講師陣による授業が多彩で充実していることも、本専修課程の特色の一つです。過去数年の実績の中から、非常勤講師による授業をいくつか選んで挙げてみましょう。

「バスクの言語と文化」／「アルジェリア文学入門」／「島嶼文学論」／「文芸批評」／「Creative Writing and Reading」／「ジェンダー、クィア理論で読む日本文学—古典文学から震災文学まで」／「チベットの言語と文化」／「ベルギー・オランダ語圏の言語と文化」／「現代アラブ文学への招待」／「文学と翻訳」／「アイマラ語とアンデス文化」／「世界の中の日本」／「イディッシュ語と東欧ユダヤ人の文化」／「英語で書かれた現代小説を訳す／読む」／「現代日本のポップカルチャー」／「フィンランドの言語と文化」／「書物と読者の近代」／「日系ブラジル移民の芸能と文学」／「アイルランド古今詩歌集を立ち上げる」／「語学文学と翻訳」／「ブラジルの文学と音楽」／「リトアニアの言語と文化」

これらの授業の多くは、文学部の既存の枠組みの中ではなかなか学ぶことのできない分野を扱っており、現代文芸論の学生に限らず、文学部の他専修課程の様々な学生の興味と必要に応えるものになっています。現代文芸論では、今後も多彩な授業メニューを充実させていくことを重要な課題と考えています。

#### （４）専修課程の理念と歴史——西洋近代語近代文学から現代文芸論へ

もともと「西洋近代語近代文学専修課程」（西近）は、文学部の言語文化系の中でも異色の存在でした。外国語外国文学を専攻する場合、一か国・一言語に限定して研究するのが常道であるし、そうでなければ研究のディシプリンが成り立たないと考えるのが普通ですが、「西近」の場合は、特定の一言語に視野を限定せず、複数の言語（三言語以上）にわたって学習することを前提に、近代ヨーロッパ諸国の言語や文学をヨーロッパ的全体の広がりの中でとらえ、研究しようとしてきたからです。

その背後には、ヨーロッパは多様でありながら互いに多くの共通性を持った文化共同体だという考え方がありました。その全体像を視野に入れるように努めることが、「西近」の基本的な理念だったといえるでしょう。



私たちは様々な国を十把一絡げにして便宜上「西欧」と呼んでしまうことがしばしばありますが、その実体は決して英独仏等の国々の単なる寄り合い所帯ではなく、一か国に限定されない広い視野で研究して初めて見えてくるヨーロッパの姿というものがあるはずです。現代文芸論では、このような考え方を受け継ぎながら、ヨーロッパからより広い現代世界に観点を拡張し、世界の文学を（近代日本も視野に入れ）理論と実践の両面から幅広くとらえることを目指していきます。

どのようにしてこのユニークな専修課程が生まれたのか、ごく簡単に沿革を振り返っておくと、西洋近代語近代文学専修課程は、昭和38年（1963年）度に文学部の語学文学系が第三類として再編成されたとき、西洋古典文学専修課程と同時に創設されました。もともと専任教員を持たず、欧米語学文学系学科の共同運営という基礎の上に成り立った課程でしたが、昭和55年（1980年）度以降、運営の主体をロシア語ロシア文学（現在のスラヴ語スラヴ文学）専修課程に置くことになりました。「西近」だけを本務とする専任教員を持たない状態のまま、文学部には珍しいインターディシプリナリーな専修課程を維持・運営するのは、必ずしも容易なことではありませんでしたが、主としてスラヴ文学の川端香男里教授および栗原成郎教授の努力のおかげで「西近」は従来の伝統的なディシプリン間の空隙を埋める専修課程として定着しました。さらにそれを発展させて沼野充義教授と柴田元幸教授が発足した現代文芸論に、野谷文昭教授を迎え、文学部の新しい伝統の一環を担うことになりました。

なお、現代文芸論専修課程についてより詳しい情報は研究室のホームページ（<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/genbun/>）を参照してください。授業の一部の詳細なシラバスや行事の案内なども掲載されています。

### （５）勉強のしかたと卒論

現代文芸論の授業は、専修課程間の枠をできるだけ越えて、異なった分野どうしの相互乗り入れを可能にすることを目指しながら行なわれています。現代文芸論に進学した学生諸君は、文学部のすべてを——文学だけに限らず、哲学、歴史、美学なども——自分の庭として自由に出入りするくらいの意欲を持って、文学部を探索していただきたいと思います。

また授業履修に関するもう一つの大きな特色は、前述したように、英・独・仏・スラヴ・南欧・国文など他研究室の講義・演習の多くを必修科目

に代わる「認定科目」として履修できるということです。選択の幅は広いので、各自の興味にあわせて勉学の方向づけを自由に決めていくことができます。

授業履修の際には、三言語（日本語も含む）以上の分野にまたがって学ぶことを原則としていますが、誤解のないよう一言付け加えておくと、三言語を同様にマスターすることが要求されているわけでは決してありませんし、そんなことは決して現実的ではありません。ここで求められているのは、一つの言語（例えば英語）を中心に研究し、もう一つの言語（例えば西・仏・独・伊・露など）を補助的に学び、さらに古典語（ギリシャ語かラテン語）の初歩を西欧文化研究の基礎教養として身につける、といったプログラムを各自が自分の興味と研究主題に応じて考え、実践することです。それなら誰にでも十分実行可能でしょうし、そうすることによって研究を狭く一か国に限定した場合には見えてこないような世界文学の豊かな広がりには接することが必ずできるものと思われます。

卒業論文の研究テーマも、この専修課程の趣旨を反映して、非常に選択の幅が広がっています。参考までに、最近の卒論のテーマをいくつか挙げてみましょう（卒論は研究室で保管しており、閲覧可能です）。

村上春樹『ノルウェイの森』の英訳と映画翻訳における葛藤と喪失、あるいは創造／ピランデッロ『作者を探す六人の登場人物』の翻訳論／テキストの存在論的、読者論的考察—円城塔『Self-Reference ENGINE』を題材に／アダプテーションから論考するストルガツキー兄弟『ストーカー』／テロという「悲劇」を描く—ジョナサン・サフラン・フォア『ものすごくうるさくてありえないほど近い』／娘たちの群像—イサク・ディーネセン『冬物語』をめぐる／「死に至る病」を癒やす近代小説／Tim O'Brien "Going After Cacciato" —想像力のゆくえ／水村美苗『私小説 from left to right』における「私小説」の意義／『ペンギンの憂鬱』における動物・病・犯罪への表象／リチャード・ブローティガン『西瓜糖の日々』における死とアレゴリー／川端康成とヘミングウェイ—老いと性の問題／『バートルビーとジーモン 拒否の戦略』"Bartleby and Simon The Strategy of Refusal"／安部公房『砂の女』における性的問題について／カズオ・イシグロ『日の名残り』論—ジョークに見る物語の二重性／詩人と探偵 "Death of a Red Heroine"における Chen

Cao の人物像について／ジャン＝ジャック・ルソーの『ピグマリオン』とジョージ・バーナード・ショーの『ピグマリオン』におけるピグマリオン表象／世界文学としてのカート・ヴォネガット『猫のゆりかご』を例に／忘れられた子ども時代—『小公女』における翻訳の変容と受容

## （６）進路——就職と大学院進学

卒業生の就職について言えば、西近時代から卒業生は一般企業・マスコミ・出版社・金融などの分野で活躍しています。卒業生が働く分野はこのような様々ですが、専修課程で一国一言語の枠を越えて文学を研究することを通じて得られた幅広い知見や柔軟なものの見方が、就職の際に評価され、職場でも歓迎されています。

また卒業生のかなりの部分が大学院に進学し、研究者への道を歩んでいます。大学院には、現在、修士・博士課程をあわせて 40 人ほどの大学院生が在籍しています。中国、韓国、ポーランド、スロベニア、香港、英国など、様々な国や地域からの留学生も大学院で学んでいます。現代文芸論以外の様々な他分野に「転進」していく能力を伸ばせるのも、現代文芸論の特徴と言えるでしょう。現代文芸論の学部課程を修了して、他の専門分野の大学院に進学することも、また他の専修課程を修了した人たちが現代文芸論の大学院を受験することも、どちらも歓迎します。つまり現代文芸論は、学部⇒大学院の進路に関しても自由で開かれた場を作り出すことに貢献したいと考えています。

## （７）国際交流と多彩なイベント

現代文芸論研究室は、学生・研究者の国際交流にも積極的に携わってきました。これまでワルシャワ大学、マンチェスター大学との学術交流・留学生交換の世話役を務めてきた他、ハーバード大学のデイヴィッド・ダムロッシュ教授が主宰して世界各地で行う Institute for World Literature というサマースクールにも提携校として参加しています。2018 年 7 月には現代文芸論研究室が受け入れとなって東京大学で開催されました。文化庁の日本文学翻訳プロジェクト JLPP や東京国際文芸フェスティバル、ヨーロッパ文芸フェスティバルにも、現代文芸論研究室の教員が協力しています。

また、当研究室は、作家や外国の研究者など、様々なゲストを呼んでシ

ンポジウムや講演会などを積極的に行い、文学の出会いの場を作ってきました。2011年11月にはダムロッシュ教授を迎えて世界文学に関する国際シンポジウムを、2013年3月には世界各国から100人以上の研究者を集めて、「グローバル化時代の世界文学と日本文学」という国際会議を主催しました。2015年には、千葉市幕張で開催された第9回国際中欧・東欧研究協議会世界大会という、50か国から1300人以上の研究者が集まる巨大会の事務局をつとめ、多くの大学院生も学会の準備・運営に参加し、国際学会活動を体験しました。

その他、リービ英雄、多和田葉子、バルガス＝リョサ、レベッカ・ブラウン、ボリス・アクーニン、ミハイル・シーシキン、山崎佳代子、エステルハージ・ペーテル、川上弘美などの作家をゲストとして招いています。普段の授業の枠を越えたこの種の活動も現代文芸論研究室の大きな特徴であり、研究・教育の重要な一環として位置づけられています。学生や院生の皆さんには、こういった行事の準備や実施に参加していただくことによって、知見を広め、また研究室を担う一員であるという自覚を深めてもらいます。

#### (8) 研究室誌『れにくさ/Renyxa』

現代文芸論研究室では、研究室論集『れにくさ/Renyxa』を原則として年1回刊行しています。これは通常の論文集・紀要の枠を超えた、自由な編集方針に基づく文学・文化研究総合誌です(2024年3月に第14号を刊行)。現代文芸論の教育・研究内容の多彩さと幅の広さを実感していただくためには、この雑誌をまず見ていただくといいかもしれません。

東京大学学術機関リポジトリ(UTokyo Repository)でオンライン公開もされているので、「人文社会系研究科・文学部」→「現代文芸論研究室」からご覧ください。

# 西洋古典学

## ◇教員◇

教授：日向太郎

助教：松浦高志

## ◇学生◇

学部：4名、修士課程：5名、博士課程：9名

### （１）西洋古典学とは

西洋古典学は、今日まで伝わっている古代ギリシア語およびラテン語で記されたあらゆる文字資料を対象とする学問である。これに加えて、さまざまな考古学資料、遺跡などが考察の範囲に入ることもある。また、すべての文字資料と言ったが、印刷された校訂本はもとより、写本、パピュルス、碑文も含まれる。そして、古代ギリシア語およびラテン語そのものを体系的に、歴史的に、分析的に研究することももちろん我々の学問の根幹をなしている。

まとまった形で残っている古代ギリシア語の最古の文献は、ホメロス叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』である。ただし、両作品の成立過程は今なおヴェールに包まれている。伝統的にアオイドスやラプソドスと呼ばれる朗唱者によって口演されてきたと考えられるが、いつ頃文字に記録されて書物となったのか。いまだ結論は出ていない。とはいえ、ホメロス叙事詩はジャンルを超えて韻文全般に影響を及ぼし、哲学者に引用されて議論の俎上に載せられ、歴史家たちの考証の対象ともなった。いわば、最古の古典にして、古典のなかの古典といってよいであろう。アオイドスやラプソドスが単に朗唱に携わるのみならず、作品を解釈し聴衆に解説する役割を担っていたのだとすれば、彼らは我々にとっての始祖である。

そして紀元前3世紀から2世紀にかけて、ヘレニズム時代には、各地に流布していたホメロス叙事詩の写本がエジプトのアレクサンドレイアの図書館に集められ、本文批判が行われた。それは、真正なるホメロスの言葉とは何かを探究する営みであり、ここに我々の研究の原点がある。現在我々が手にするホメロス叙事詩の校訂版は、このときの編集事業に拠るところが大きいと思われる。

ヘレニズム時代には、重要な文学的思潮も生み出された。それ自体緻密なホメロス研究とも大いに関わっていると思われ、カッリマコスという学者詩人に帰される一種の文学綱領である。カッリマコスは、ホメロスに追従して大作を手掛けることやその安易な模倣を戒め、学殖に基づく機知と諧謔に富む洗練された小品を推奨した。

さて、ラテン語で作られた最古の文学作品は、リウィウス・アンドロニクスの『オデュッセイア』のラテン語訳である（ただしまとまった形では現存せず、断片的に伝わるのみ）。ラテン最古の作品が『オデュッセイア』であることは、ホメロス作品がいかに人々の心を魅了していたかを物語っている。ラテン語文化圏でも、ホメロスは古典のなかの古典として崇拝と憧憬の対象となった。その一方で、カッリマコス主義もラテン語韻文に影響を及ぼし、それはとりわけ紀元前1世紀の古典期の作家に認められる傾向である。だからこそ、ウェルギリウスは『イリアス』や『オデュッセイア』の両作品を徹底的に研究して、カッリマコスの理想にも敬意を払いながら、建国叙事詩『アエネイス』を創作することになったのである。

もちろん、ラテン語作家の手本や研究対象になったのはホメロス叙事詩ばかりではなく、ギリシアの抒情詩、悲劇、喜劇、諷刺詩、哲学、歴史、弁論、自然科学もローマ人に大いなる影響を与えた。しかし、だからといってローマ文化をギリシア文化の亜流に過ぎないと考えるのは、誤りである。そのような見方が優勢になった一時期もあったが、現在ではそれは乗り越えられている。ラテン語作家の営為は、いわば換骨奪胎を基本とする創造的模倣である。翻訳のみを通じて観察した場合、それはたしかに見えにくいけれど、こうした模倣の試みは、言語の別を越えて中世以降のヨーロッパ文学の神髄となったと思われる。そして、ギリシア文化の多大な影響を受けたローマ文化は、ヨーロッパ中世において古典として長いあいだ尊重され、受け継がれてきたのである。

とくにラテン語は、知識人のあいだの共通語だった。ヨーロッパの大学では、長いあいだこの言語で授業が行われ、口述試験がなされ、式典が祝われた。学術書や文学作品もラテン語で書き続けられた。公共の文書もごく私的な書簡もまた同様である。カトリック教会は、20世紀まで典礼の言葉として用い続けた。ラテン語が浸透していたのは、学問の世界だけには留まらない。

つまり、伝統的に、中世以降のヨーロッパ人にとっては、厚みのあるロー

マ文化の方がずっと近くて親しみ深く、ラテン語の著書のはるか向こうにギリシア文化を仰ぎ見る、というような古典語文化との接し方が定着したのである。

欧米文化圏においては西洋古典学の研究と教育の伝統はこのようなものとして、今日まで長く受け継がれてきた。しかし、ひとたびこの文化圏の外に出れば、事情は異なる。たとえば、日本から見れば、上述のようなギリシア文化とローマ文化との距離差はない。二つの文化はともに遠い距離にあるように感ぜられるかも知れないが、どちらがより近いということもない。本学において西洋古典を学ぶ積極的な意義は、そのような距離感覚にしたがって、欧米の研究教育機関で学ぶのとは異なった視点を自ずと得られることにある。さらに言えば、日本文化を視野に入れながら、西洋古典学に貢献する可能性も開かれている。

また、古代ギリシア語もラテン語も、我々にはまぎれもない外国語であるが、今日この外国語を母語とする人はいない（もっとも母語のように解し、操る人は皆無ではない）。二つの言語は、いわゆる「ネイティヴ」がない言語なのである。もちろん程度の差はあるが、現在生きている人の誰にとっても、「外国語」には違いない。その点にも、この両言語を学ぶ面白さがあるだろう。

## （２）本専修課程について

このように、ホメロス叙事詩を出発点として、我々が研究対象とすべき文献は幅広い。じっさい本専修課程に所属する学生たちの興味の範囲も様々であり、卒業論文のテーマもまた多様である。しかし、すべての研究において基礎となるのは、古代ギリシア語とラテン語を理解する能力である。このため、学部でも大学院でも、授業においては伝統的に講読に力を入れている。古代ギリシア語・ラテン語、さらに韻文・散文に偏ることなく学習できるように、両言語による韻文講読と散文講読の授業を S、A の両セメスターにわたって開講するように配慮している。ほとんどの授業は大学院と共通であるが、学部生は大学院生や上級生とのレベルの差について、決してひるむことなく、また遠慮することなく受講して欲しい。前期課程において両言語の初等文法を一通り学び終えていることは望ましいが、それは決して進学のための要件ではない。文学部においても初級の授業を受講することは可能である。また、文学部では、哲学、美学、西洋史



の各研究室が毎年古典語文献を用いた授業を開講している。教養学部の後期課程においても、複数の教員が古典語講読の授業を行っている。このような、本研究室が開講母体となっていない西洋古典関連の授業を受講することも可能である。

この他、本専修課程には、学生同士の交流を深めるために、「クラシカルセミナー」という主に大学院生たちが自主的に運営する研究発表や討論の場がある。ひと月に1回もしくは2回くらいの頻度で行われるこの会合が、他の学生や教員の前で自分の研究について語る機会となる。他の人々が自分の研究をどうとらえるか、反応を知ることでもある。通常では、博士論文、修士論文、卒業論文を抱えている人の中間報告（や事後報告）の機会、さらには学会発表の予行練習の機会として利用されている。あるいは、新しく進学した学部3年生の自己紹介の場として、入学した大学院生が自己紹介を兼ねて自分の取り組んでいる研究について語る場としても機能している。このような意味で、本研究室において、「クラシカルセミナー」は教員が行う授業以上に大切な研鑽の場であり、また情報交換の場である。ここ2年くらいは、主にオンラインで行われているが、再び対面で開催されるようになった場合には、学生間の親睦を深める絶好の機会にもなることだろう。

（1）でも述べたように、西洋古典学は長く欧米で研究されて来た経緯があるから、想像以上に多くの研究者が欧米文化圏をはじめとして、世界の至る所に遍在している。現在世界は感染症やさまざまな紛争を抱え、先行きは不透明ではあるが、可能な限り国内外から研究者を招聘し、活発な学術交流が実現するように心がけている。

### （3）卒業後の進路

卒業後は、企業に就職する人、官公庁に入る人、起業を志す人と様々であるが、ここ数年は大学院進学希望者が増加する傾向がある。また、大学院進学後に大学のみならず、中学校、高等学校で教職に就く人もいる。あるいは、海外の大学に留学する人も少なくない。

#### (4) 最後に

(2) でも述べたが、古代ギリシア語やラテン語を学んでいることは進学の必須条件ではない。授業や卒業論文作成で利用することになる注釈書や研究書には、英語以外ではイタリア語、フランス語、ドイツ語などヨーロッパの言語で記されたものが多いけれど、こうした言語を初修外国語として、あるいは第3外国語として学ぶことに拘る必要もない。そして、進学前の段階で、時間をかけて取り組んできた勉学や勉学以外の諸活動や経験が無駄になることもない。何故ならば、我々の学問は広大無辺であり、懐が深く、およそ人間の様々な営為で西洋古典学と無縁なものは何一つないからである。

# 心理学

## ◇教員◇

教授：今水寛、村上郁也

准教授：鈴木敦命、浅野倫子

助教：田中拓海

## ◇学生◇

学部：46名、修士課程：13名、博士課程：2名

### (1) どういう心理学を学ぶのか？

ものが見えるのはどうしてなのでしょう？ 人ごみの中でも誰が話しているかわかるのはなぜなのでしょう？ どのようにして自分の手足をスムーズに動かせるようになったのでしょうか？ 年齢を重ねると他人に対する評価はどのように変わるのでしょうか？ 私たちの専修課程で研究しているのは、こういった問題です。

ものを見たり、手足を自由に動かしたり、言葉を話したりすることは、物心ついたときには自然にできるようになっているので、なんとなく「簡単なことだ」と思ってしまいがちです。しかし、コンピュータが発達した現在でも、コンピュータは、人間と同じようには、言葉を理解したり話したりできませんし、まわりを見て、そこに何があって、どのように動いているのかを理解することもできません。また、ロボットも、人間のようなスムーズな動きをたやすく行うことができません。因果関係を発見したり、人の気持ちを読み取ったりする高度な思考の働きはもとより、誰もが「できてあたりまえ」と思っていることも、実は非常に複雑な情報処理に支えられているのです。

私たちの専修課程では、視覚、感覚間協応、注意、感情、人物認知、運動学習といった人間の情報処理、認知・行動制御プロセスを対象として、科学的な方法にもとづいて先端的な研究をしています。具体的な研究方法は、研究テーマに応じて様々です。最も多いのは、パソコンの画面に何か課題を提示して判断をしてもらうという実験です。その課題をいろいろと工夫することで、頭の中でどのような情報処理や認知・行動制御が行われているのかを知ることができます。他にも、MRI (magnetic resonance

imaging; 磁気共鳴映像法) という装置を使って脳の働きを調べる神経科学的な実験から、インターネットを介してリモートで行うオンライン実験、アンケート用紙にペンで回答を記入してもらう質問紙実験まで、多種多様な実験を実施しています。

心理学専修課程に進学すると、こうした実験の方法と、そこから得られた様々な知識を学びます。2年生のAセメスターには、まず、実験演習の授業で、心理学の代表的な実験をいくつも体験します。実験者の立場で実験を実施したり、実験参加者の立場で課題に取り組んだりしてデータを集め、それを統計的な手法で分析し、レポートにまとめて報告する訓練をします。この実験演習を補助する授業として、心理学研究法や統計についての授業もあります。

「統計」と聞くと尻込みする人がいるかもしれませんが、恐れるには足りません。数理統計学を究めるわけではなく、統計的手法の意味と使い方を学ぶことがメインの目的ですから、文系の人でも、心理学の学生向けに用意された統計の授業に出席してきちんと勉強すれば、充分、身につけることができます。現代社会では、企業運営や市場調査、金融取引など、ありとあらゆるところで統計の知識が必要になるので、大学院に進学する人はもとより、就職を目指している人でも、学生時代に統計を学んでおいて無駄になることは決してないでしょう。

本郷に進学してからは、もう少し高度な実験演習の授業があり、心理学の教科書に載っているような、結果が知られている実験ではなく、どういう結果になるかわからない最先端の実験に参加することになります。一方、講義を通じて心理学の知識を広く身につけ、ゼミを通じて特定の分野の知識を深めていきます。専任の教員が行う授業だけではなく、毎年、外部から非常勤講師を招いて、発達心理学、動物心理学、認知神経科学、人間工学など、バラエティに富んだ講義を提供しています。

4年生になると、卒業論文に取り組むことになります。心理学専修課程の卒業論文は科学論文であり、実証的な研究を行い、その研究の背景や目的、方法、結果やその解釈を記します。多くの場合、自分自身のアイデアを教員や大学院生らと相談しながら膨らませ、実験を実施します。卒業論文のデータが、その後、国際的な学術雑誌に掲載された論文のなかで報告されることもしばしばあります。

文学部の心理学専修課程は、1903年に日本で初めて設立された心理学実

験室を起源としています。ここから、東京大学の各所に、それぞれ特色のある心理学関係の研究室が分かれていきましたが、文学部の心理学専修課程は、現在に至るまでずっと実験心理学の手法に基礎をおいて研究を続けてきました。「日本で最も古い」とはいつても、古くさい心理学をやっているわけではありません。実験心理学の分野で世界の最前線に位置する研究を進めています。心理学研究室ホームページの URL は以下の通りです。

<http://www.L.u-tokyo.ac.jp/psy/>

(2) 教員はどういう研究をしているのか？

◆ 今水寛 教授： 人工知能がチェス、将棋、碁のチャンピオンを打ち負かす時代になりました。しかし、ヒトのように軽やかに賢く動き回ることのできる人型ロボットは、未だに存在しません。ヒトと機械の大きな違いは柔軟な学習能力にあると言われています。ヒトは少ない経験から多くを学ぶことができます。生まれてから数年もたてば、無数の筋肉を上手にコントロールし、ロボットより遙かに器用に動作できるようになります。本研究室では、運動や認知におけるヒトの優れた学習機能が、どのような仕組みで実現されているかを調べています。研究方法としては、心理・行動実験、fMRI などの脳活動計測、計算理論などを用いています。また、研究の成果をリハビリテーション、ブレインマシンインターフェース、ニューロフィードバックによる機能回復などに役立てることに取り組んでいます。『認知心理学ハンドブック』(有斐閣)、『認知科学への招待』(研究社)、『認知心理学 第1巻：知覚と運動』(東大出版会)に分担執筆しています。研究グループのホームページは以下の通りです。

<http://www.L.u-tokyo.ac.jp/~imamizu/>

◆ 村上郁也 教授： 私たちは網膜像そのものを意識化しているわけではなく、網膜像情報その他の生体信号が複雑な多段階の処理を経ることで、生活環境に適応し体制化された視覚世界がつくられているのです。本研究室では主として心理物理学の実験、副次的に機能的脳計測を行っています。特定の視覚刺激を観察して生じる知覚を実験参加者に報告してもらい、刺激と反応との関数関係を記述していくことで、脳活動を直接計測せずに脳内処理の様子を明らかにできます。視覚系を「誤作動」させる錯覚図形は特に重要なツールです。専用装置で眼球運動や身体運動などの生体計測を

行ったりして、知覚におよぼす影響をみることもしています。『イラストレクチャー 認知神経科学』（オーム社）、『心理学研究法 1 感覚・知覚』（誠信書房）、『Progress & Application 知覚心理学』（サイエンス社）という 3 冊の基礎心理学入門教科書の編著と、『カラー版 マイヤーズ 心理学』、『脳と時間：神経科学と物理学で解き明かす〈時間〉の謎』という 2 冊の心理学概説書の翻訳に携わりました。研究グループのホームページは以下の通りです。

<http://www.L.u-tokyo.ac.jp/~ikuya/>

◆ 鈴木敦命 准教授： 私たち人間は、他者に関する様々な推論や評価を普段から行っています。例えば、目の前の人物が誰なのか、何を感じているのか、どんな性格なのか、といった多岐にわたる内容を、正誤は別として、その人の外見、振る舞い、過去の経験などから日常的に判断しています。そうした他者に関する認知（人物認知）にはどのような特徴があり、その背後ではどのような情報処理が行われているのでしょうか。本研究室ではこうした疑問をめぐる研究を進めています。主な研究方法は行動実験ですが、脳活動計測も共同研究で行うことがあります。また、人物認知のエイジングないし年齢差について調べることで、世代間交流・理解を促進するヒントを得ることも目指しています。『顔の百科事典』（丸善出版）、『感情心理学ハンドブック』（北大路書房）などに分担執筆しています。研究グループのホームページは以下の通りです。

<https://sites.google.com/site/atsunobusuzukilab/>

◆ 浅野倫子 准教授： 例えば今あなたが目にしている文字は、考えてみれば単なる線のかたまりです。それなのに文字だと分かり、読めて、意味が伝わるのはなぜでしょう。また、文字や物体を見たり、音を聞いたりしたときに受け取る情報は、誰でも全く同じなのでしょうか。普段私たちが何気なく行っている「物事を認識する」という行為は、実は複雑で謎に満ちています。本研究室では、この謎の解明に、主に認知心理学や実験心理学の研究手法を用いて取り組んでいます。特に、文字を含めた物体認知、言語の認知処理、注意、多感覚処理、共感覚などのテーマを扱っています。言語機能とその他の認知処理機能（知覚、注意など）の関係にも興味を持っています。『共感覚』（勁草書房）、『言語と身体性』（岩波書店）、『有斐閣 現

代心理学辞典』（有斐閣）、『人工知能学大事典』（共立出版）などに分担執筆をしています。研究グループのホームページは以下の通りです。

<http://www.L.u-tokyo.ac.jp/~asano/>

### （３）卒業生はどういう方面に進んでいるか？

例年、１～２割ほどの学生は、心理学あるいは心理学に関連する他の分野の大学院に進学しています。大学院に進学した卒業生の多くは研究者になり、東京大学をはじめとする全国の大学や研究所で心理学関係の研究・教育に携わっています。海外の有名大学の教授になっている卒業生も少なくありません。また最近では、大学院を修了してから民間企業に就職する卒業生も増えてきています。

学生の多くは、民間企業や官庁に就職しています。就職先は様々で、特に決まった進路というものはありません。金融業、製造業、出版業など、多岐に渡っています。最近では、IT 関係の職業に就く卒業生が増えています。変わり種としては、卒業してから他大学の医学部に進学して医師になった卒業生や、国会議員から大臣になった卒業生がいます。調査会社や広告代理店、官庁などに就職した場合には、心理学の知識や手法が直接活かせることもあるようです。厚生労働省などは、心理職の採用もしています。近年、多くの企業で、理科系と文科系の両方のセンスを備えた人材が求められるようになっており、本専修課程卒業生は、その点で歓迎されることが多いようです。



# 社会心理学

## ◇教員◇

教授：唐沢かおり、村本由紀子、大坪庸介

准教授：稲増一憲

助教：鈴木啓太      特任助教：金恵璘

## ◇学生◇

学部：48名、修士課程：13名、博士課程：7名

社会心理学は、社会的な環境の中における人々の行動と、その背後にある心的過程および社会・文化構造との関わりについて研究する実証科学である。研究対象は、社会的状況の理解過程やそれを支える情報処理過程、対人行動、集団の一員としての行動、組織における人間行動、文化的歴史的な影響過程など幅広い。社会心理学研究室の学部教育においては、さまざまなテーマに及ぶ社会心理学の基礎的知見や理論を学ぶための概論、特定のテーマに関して深く掘り下げた議論を行う講義、実証的な研究手法を学ぶための実験実習や社会調査法実習、統計学の授業が開講されている。また、隣接科学としての心理学、社会学はもとより、政治学、経済学、哲学、言語学、文化人類学、生物学、脳科学、情報科学、精神医学などの幅広い知識が役に立つことが多く、これらの授業への参加を積極的に勧めている。

研究方法論の習得プロセスは妥協を排した厳しく長い訓練を伴うが、それは学生どうし、また学生と教員との和気あいあいとしたジョイント・プロジェクトでもある。関心を同じくする仲間と知的刺激に満ちたディスカッションを重ね、心と社会に関わるさまざまな問題にアプローチすることの楽しさを、ぜひ体感してほしい。

各教員の研究領域および担当授業の概要は以下のとおりである。

唐沢 かおり 教授      私たちが、自己や他者、他集団、社会的な出来事を、どのように理解するのか、その情報処理過程を扱う、「社会的認知」領域の研究を行っている。現在、携わっている研究の具体的な内容は次のと

おりである。①他者が何を考え、どのような動機や意図を持っているのかを推論する「Mind reading」過程の解明、およびその過程と道徳的判断と非難、支援、赦しといった対人行動との関係について、②自由意思信念の構造の解明や、信念の強弱が自己制御や道徳的判断に及ぼす影響について、③科学コミュニケーション過程の解明とその望ましいあり方の検討、例えば科学的知見の提示のされ方と、一般の人たちの科学への理解の関係、防災など実践的な地域活動の効果の評価とその情報発信のあり方の検討。

今年度の担当授業科目は、「社会心理学実習Ⅲ」、「社会心理学演習Ⅰ」である。「社会心理学実習Ⅲ」では、研究室のプロジェクトとして行っている研究テーマを題材に、調査や実験手法について学ぶ。また、「社会心理学演習Ⅰ」では、社会的認知領域の最先端研究を取り上げ、受講者は、関連する研究論文を講読し、問題点や新たな研究の可能性についてグループで議論したうえで、その成果を発表する。卒業論文指導については、大学院生と合同のリサーチミーティングの中で行っており、計画の立案・データ収集と分析・考察を深めるための議論に、積極的に関わることを期待する。

村本 由紀子 教授 主として集団心理学・文化心理学の領域を専門とし、マイクロな個人の心とマクロな社会環境とのダイナミックな相互構成関係を解き明かすことを目指している。特に、集団規範や文化の生成・維持のプロセスを探究することに関心をもち、実験室内にミニマルな行動の連鎖を作り出すことを目指した心理学実験と、社会の現場における慣習や思考様式の変化を継時的に追跡するフィールドワークという方法論を両輪として、一連の研究に従事している。現在取り組んでいる主な研究テーマは以下のとおり：①多元的無知による集団規範の維持過程、②共有信念の文化差の規定因、③文化的慣習の社会生態学的基盤、④組織文化・風土をめぐる諸問題、など。

主な担当科目は、「社会心理学概論Ⅰ」（概ね隔年担当）、「社会心理学実習Ⅲ」および「社会心理学演習Ⅱ」である。概論では、組織・集団・文化に関わる種々の社会現象を題材として取り上げ、社会心理学や関連領域の知見を用いてそれらの現象を多面的に読み解く。実習では、研究室において現在進行形の研究プロジェクトに受講生も加わり、研究計画の立案からデータ収集と分析、考察に至るまでの一連の研究プロセスを体得していく。演習では、心の文化差、文化的慣習や集団規範の生成・維持過程等に関す

る社会心理学の基本研究を概観したうえで、先行研究の限界を超えた新たな研究枠組みや方法論を多面的に検討し、理解を深める。

大坪 庸介 教授 人々の社会行動、社会的認知の適応的基盤に関心を持ち、進化論的な観点から社会心理学の研究に取り組んでいる。例えば、進化ゲーム理論では、自己呈示とその知覚のような2つの現象は社会的相互作用というコインの両面として統合的に分析することができる。つまり、どのような自己呈示とそれをどのように知覚することが進化的に安定な状態になるかを理論的に検討することができる。このような進化ゲーム理論など進化生物学のモデルを取り入れつつ、近年は①謝罪の正直さに関する研究、②評判にもとづく協力システムの維持に関する研究、③幼少期の経験による生活史戦略の調整に関する研究等を行っている。

主たる担当科目は、「社会心理学概論」、「社会心理学実習Ⅱ（社会心理学調査実習）」、「社会心理学演習」である。社会心理学概論では社会心理学的現象をゲーム理論等のモデルに基づき概観する。社会心理学調査実習では、生成した研究仮説にもとづく調査票の作成、データの収集・解析、論文や報告書の作成に至る社会調査のプロセスを学ぶ。演習では社会心理学だけでなく動物行動学、進化ゲーム理論等の分野をカバーする学際的な文献を扱う。

稲増 一憲 准教授 人々の世論形成過程やそれに対するメディア・コミュニケーションの影響を中心に、現代の社会問題に対して社会心理学の観点からアプローチする応用的な研究を行っている。人間の普遍的な傾向を扱うことの多い心理学と、国や社会制度等の文脈を踏まえた議論を行うことの多い政治学や社会学との架橋を目指し、政治学者や社会学者たちとの共同研究を行っている。近年取り組んでいる具体的な研究テーマとしては、①多様化するメディア環境における人々の価値観の変容についての研究、②日本において世論を分断する対立軸の解明、③人々が政治を忌避する理由についての研究、④社会調査手法の刷新などである。主たる担当科目は「社会心理学概論」「社会心理学実習」「社会心理学演習」である。概論では、マクロな社会現象に関わる社会心理学研究を中心に扱い、現実の社会問題への応用や、他の学問分野との協働についての議論も取り上げる。実習では、仮説生成から研究計画の立案、データ収集と解析、論文等での

アウトプットといった一連の過程を身に着ける。演習では、現代社会における問題を扱った文献を取り上げ、考察・議論を行う。取り上げる文献は必ずしも社会心理学分野の論文に限定されないが、これらの文献に対する批判的検討から、社会心理学考察へと繋げる。

最後に、卒業生の進路は、大学院の他、民間企業、情報産業、官庁など多岐にわたっている。社会心理学を学ぶことで身につけたデータ分析の考え方や問題解決への道筋は、将来どのような進路に進む人にとっても、役に立つものとなり得るだろう。

# 社会学

## ◇教員◇

教授：赤川学、出口剛司、本田洋、金成垣

准教授：祐成保志、井口高志、瀧川裕貴、高谷幸、米澤旦

助教：税所真也

## ◇学生◇

学部：109名、修士課程：26名、博士課程：23名

### （1）研究室

銀杏並木に面した法文2号館の1階に社会学の研究室がある。地階にはコピー・センター、アーケード側を出ると学部事務室や生協が近く、地の利はすこぶるよい。中は4つのブロックに分かれていて、その一つが学部生用の読書室になっている。初夏にはまばゆい緑、晩秋にはあざやかな黄が窓の外をかざる。壁の書架に並んでいる古くからの図書の背表紙が部屋をとり囲み、まん中は、大きなテーブルが主のように占拠している。雑然とした賑やかさは、多様な研究領域をかかえる社会学を象徴しているのかもしれない。いかにも往時の学生の勉強部屋といった感じのこの部屋は、昔から学生同士のさまざまなコミュニケーションの広場として活用されてきており、学部生による自主的な研究会や勉強会が頻繁に開かれている。情報基盤センターの端末をはじめ、ネットワーク・コミュニケーションも盛んになっている。

文学部最大の200名近くもの学生・院生をかかえる社会学にとって、研究室は貴重な共同空間であり、外国語図書、雑誌、資料が置かれているほか、事務連絡、教材とゼミ報告資料のコピー、端末操作、情報交換など、さまざまな活動の結節点となっている。この共同研究室を中心にして、その周辺（同一階、地階、向かいの法文1号館4階）にいくつかの実習室、機器室、そして教員室が存在する。

社会という現象は悠久の昔から現在にいたるまで、人間の生活するすべての空間において存在してきた。かつて、社会学という学問が19世紀西欧社会において台頭してきた時代、コントやスペンサーやマルクスは、「近代社会とはなにか」という問いに答えようとする営為のなかで、包括的で

一般的な総合的社会理論をめざした。さすがに今日では、かれらの理論がそのまま保持される状況にはない。しかも、通常 of 社会科学研究の営みは、より特定のて限定された対象領域におのずから専門分化せざるをえなくなっている。とはいえ、社会学は今でもそうした個々の経験的研究を通じてつねに「社会とはなにか」「社会と個人とのよりよい関係はどういうものか」という基本問題への現実的な関心に貫かれている。建物は古いけれども、研究室の中はそうしたいつまでも若々しいテーマが息づいている。

## (2) 授業

現代において社会学の研究領域は、家族、組織、農村、都市、国家、国民社会、国際社会という社会集団の類型による区分、教育、社会福祉・医療、政治、法、経済、社会階層、産業・労働、社会運動、社会思想、社会意識、という現象の特性に基づく区分などによって個別的に分かれている。さらにまた、ミクロ自我論、行為論、マクロ・システム論、歴史社会学、社会変動論、研究法として計量社会学、社会調査法などの領域も存在する。その中で東大文学部の社会学は、つぎの領域を中心として教育・研究体制の充実を推進してきた。それは、学説、理論、階層、公共性、福祉、社会政策、科学、技術、環境、リスク、文化、社会意識、家族、ジェンダー、人口、セクシュアリティ、コミュニティ、社会問題、臨床、計算社会科学、移民などである。さらに、大学院韓国朝鮮文化研究専攻から文化人類学、社会学の専門家を社会学演習の担当教員として加わっていただいている。学生はこれらの中から、授業や読書や研究会を通じて、自分自身の特定化された問題関心を醸成させていくことになる。既存の研究や資料がしっかりと踏まえられているのであれば、発見的で斬新な課題に挑戦することもできる。

演習は3年生と4年生が一緒に、あるテーマにそって個人ないしグループで発表をしたり、文献を読んで討論したりするタイプのものが多い。かならず一つの演習に主ゼミとして参加するほか、熱意があればもう一つを副ゼミとして参加することもできる。それぞれの演習のテーマは多少広めに設定されるので、どの演習でもある範囲内で各人の関心に沿って積極的に参加することができる。

必修ではないが、「調査実習」や実習をとまなう授業も設けられており、どこかの町や村に（しばしば泊りがけで）出かけて、質問紙調査やインタ

ビュー調査を行なう。帰ったあとは、コーディングの共同作業やパソコンによる分析の仕事が待っているけれども、「社会」を肌で感じる貴重な体験となる。また、4年生や院生も加わった研究室内の縦断的な協同事業である点も意義深い。

学生数の多い社会学専修では、一人一人が自立した目的意識をもって研究室に参加することが期待されている。その意味で、卒業論文を執筆すること、またそれにむけて探求し続けることが最も重要視される。卒業後の進路のいかに拘わりなく、人生とは自分で課題を見つけ自分で解いていくという試行錯誤の連続であるはずで、卒業論文はそうした態度の形成のために文学部が用意している最大の学習機会であるといえる。社会学の卒業論文はA4サイズ50枚(40字×40行)を標準としており、自ら設定した問題領域に関する参考文献を読破してテーマを掘り下げ、資料やデータを収集・分析し、新しい発見を説得的に語らなければならない。その過程では、主として所属する演習の教員による指導と助言を受けることになるが、基本的には一人一人の学生の個人的な研究活動である。

### (3) 教員たち

赤川教授： 言説社会学、セクシュアリティ研究、猫社会学を専門としているが、「社会調査のなんでも屋」を目指している。『セクシュアリティの歴史社会学』(1999)、『明治の「性典」を作った男』(2014)で取り組んだセクシュアリティの歴史社会学研究をライフワークとしつつ、『子どもが減って何が悪い！』(2004)、『これが答えだ！少子化問題』(2017)、『少子化問題の社会学』(2018)で行った人口減少社会の構想を20年展開してきたが、今後は、猫と人間の関係の深化を、インタビュー調査や言説調査によって浮かび上がらせ、質的統合法(KJ法)や言説の知識社会学的アプローチ(SKAD)によって分析する猫社会学を中心にしたい。演習参加者に関しては、理論だけでなく、具体的な意味世界や社会問題を経験的に探求することを必須条件とする。参加者一人一人の問題設定が、討論の過程で相乗的に発展していくことを期待したい。

出口教授： 社会学理論、社会学史研究を専門とする。主としてフランクフルト学派の批判理論を中心にコミュニケーション論、承認論、批判的文化研究に取り組んでいる。その一方で、日本を代表する社会学者の仕事を発展的に継承し、「恥じらい」「やさしさ」などの感情文化に関する社会



学的考察を行っている。社会学において、理論は社会や人間存在の様々な側面を常識を裏切る形で多様に映し出すプリズムのような働きをもっている。しかし、そうした多様な見方ができるようになるためには、理論を通して現実を見る力を養う必要がある。そこで演習の参加者には、社会学理論を学びかつ、社会文化、コミュニケーション論、相互行為論、社会的自己論に関する具体的テーマを見つけ、各自でオリジナルな分析を行うことが期待される。むしろ、学説史や純粋理論の研究をめざす学生も歓迎する。各自が選び取ったテーマに即した研究報告とディスカッションを取り入れ、社会学的な思考、表現、討論の力を身につけることをめざす。

祐成准教授： 専門はコミュニティと住まいの社会学である。コミュニティ研究は社会学のなかでも伝統ある分野の一つであるが、従来は地域社会とそこで活動する集団に焦点をあてた研究が中心であった。現在、コミュニティをめぐるのは、地理的な近接性や境界線の揺らぎが指摘される一方で、心身の安全を保障する居場所の必要性が論じられる。こうした状況を踏まえつつ、従来の蓄積を批判的に継承しながら、コミュニティ研究の方法を再構成することが目下の課題である。『コミュニティの社会学』（2023）は、都市、村落、福祉、社会運動、環境問題など分野横断的な共同作業として、この課題に取り組んだものである。コミュニティと密接なかかわりをもつ「住まい」（ハウジング／ホーム）は、生活構造の基盤であると同時に社会制度の結節点でもある。歴史社会学的研究から出発し、フィールドワーク、国際比較、政策志向の研究に参画してきた。演習は、理論的関心と実証的方法、「量的」手法と「質的」手法、歴史的資料と現代的事象の間を自在に行き来しうる柔軟な研究態度の獲得を目標としている。

井口准教授： ケア・支援の社会学、医療社会学、臨床社会学などを専門とする。研究の出発点として、家族介護を中心に、介護・ケアという行為の特性と、それに対する社会的支援のあり方を、インタビュー調査などの質的方法を通じて明らかにすることに取り組んできた。その後、特に認知症（dementia）という現象に注目するようになり、現在は、介護・ケアの領域を含みつつ、それを越えた認知症の排除や包摂の問題、病いや障害の語り、当事者との共同、認知症概念の日常生活への効果などの課題に取り組んでいる。以上の研究プロセスの一端は『認知症家族介護を生きる』（2007）および『認知症社会の希望はいかにひらかれるのか』（2020）を参照して欲しい。また、ケア・介護研究を足場に、より実践志向の強い社

会政策・社会福祉や看護学の研究者、血友病・薬害 HIV の当事者などとの共同研究にも取り組んできた。そうした試みの中での社会学のスタンスや発信のあり方を考えていくことも課題とする。演習では、現場の具体的な課題と社会学理論や方法との接点を考えることを中心に、講読や各自の具体的なテーマの探求を行う。

瀧川准教授： 理論社会学、数理社会学、計算社会科学を専門とする。数理モデルと計算的手法という一般性の高いツールを武器にしながら、デジタル化・AI 化した現代社会を特徴づけるさまざまな社会問題に関わるトピックに取り組んでいる。例えば、ソーシャルメディアと分極化、パンデミックと社会的格差、人工知能と社会的不平等、デジタル文化と社会階層といった諸問題である。ビッグデータや機械学習・人工知能・自然言語処理等の計算的手法は、これらの社会的問題に対して、新たな解決を与える可能性を秘めている。コミュニケーションや相互行為のダイナミクスを捉えるにはビッグデータやデジタルトレースといわれる人々のデジタル上の行動記録が欠かせない。人工知能に基づく自然言語処理は人々の複雑な意味世界や文化的世界を定量的に明らかにすることができる。また、デジタルな手法を用いた実験は、社会システムの因果メカニズムの解明への道を切り開いている。演習ではデジタル化・AI 化した現代社会を社会的に考察するための基礎的文献の講読とそれに基づく討論を行う。数理モデルや計算的手法の習得は前提としないが、それらを用いた研究の講読も演習に含まれるため、最低限の関心を持つことが望ましい。

高谷准教授： 専門は、移民研究、国際社会学・グローバル社会学。国際社会学・グローバル社会学は、国民国家の枠には収まらない社会現象を扱う分野だが、自らの研究としては、主に日本における移民・外国人、とりわけ非正規移民や移民女性を対象に、インタビューや参与観察など質的調査による研究を行ってきた。社会のなかで、どのような境界や線引きが作動し、誰がどのような形で排除されたり、周縁化されるのか。あるいはそうした境界が超えられ、異質な人びとの間に結びつきや連帯が生まれるのはどのような契機によってなのか。さらには、社会のメンバーシップは、どのような価値や規範にもとづいているのか。これらの問いが示すように、社会的アプローチによって移民研究を行うことは、移民を通じて社会の動態や存立基盤を探求することでもあると考えている。著作としては『追放と抵抗のポリティクス：戦後日本の境界と非正規移民』、編著に『移民政

策とは何か：日本の現実から考える』がある。演習では、基礎的な文献の講読や各自の研究報告および参加者間での議論によって、社会学的な視点を習得し、自らの問いを立て、その問いに迫る力を身につけることを目指す。

米澤准教授：社会政策論、組織社会学を専門とする。現代社会で社会保障政策と労働政策を主軸とする社会政策は、人々の生活を維持、支える生活保障の役割を担っている。第二次世界大戦後に産業化社会では福祉国家と呼ばれる包括的な社会政策の諸制度が整備され、行政部門が人々の生活保障のために重要な役割を担うようになった。福祉国家の危機を経た現代社会では、株式会社、非営利組織、社会的企業などの民間組織の役割がより重要な意味をもつようになっている。就労支援分野における、社会的企業と呼ばれる新しく注目される組織に関して、それらの組織が構想する規範の多様性を示し、組織群が共通の目的のもとで活動するような「業界」を作り上げる過程を明らかにした研究として『社会的企業への新しい見方：社会政策のなかのサードセクター』（2017）がある。演習では、文献輪読やフィールドワークを通じて、生活保障にかかわる制度の客観的な観察・理解と、社会問題の具体的な現れや改善に向けた実効的な方策を思考することを重視する。このようにして習得される社会学の視点と方法は、おそらくは個人の問題状況を理解や改善につながるはずである。

#### （４）進路

卒業後の進路で、まず伝統的に多いのが、新聞、放送、出版、広告などのマスコミ関連企業への就職である。その他の民間企業では、情報、商社、金融、ほかに民間の研究リサーチ会社への就職も少なくなく、メーカーへの就職も見受けられる。国の省庁や都庁など地方自治体の公務員の道を選ぶ者も毎年数人いる。研究者を志す人は、年によって異なるが、5人～10程度あり、社会学の大学院へは5人前後、その他の大学院（他専攻、他研究科、他大学など）にも5人程度進学を予定している。いうまでもなく進路状況は学生個々人の志望に依存するので、毎年、多少変動する。

大学院へ進学する場合を除けば、現代日本の企業社会では、社会学で何をどの程度勉強したかは進路先にあまり影響しないかも知れない。社会学という学問それ自体は、必ずしもビジネスマンやマスコミ関係者を養成することを目的とするものではない。むしろそうした産業社会の直接的な諸

目的からは一步距離をとって、しかも対象とする社会現象を経験科学的に考察するというところに、経済学や法学でもなく、また哲学や文学でもない、社会学らしさがあるともいえる。そして、20歳台前半の2年間にこうした社会学的視点を体験することは、どんな進路を歩むにしても、一人一人のその後の人生にとって貴重な財産となるだろう。

なお、社会学専修では、全員が共通に受講する必修科目として「社会学概論」「社会学史概説」および「社会調査」（それぞれ4単位）の3つがあり、このうち「概論」と「調査」は2年次のAセメスターに開講される。さらに、「社会学演習」を8単位以上、「社会学特殊講義」の中から12単位以上を履修しなければならない。ほかに、卒業論文12単位、他の専修課程の授業、共通科目、他学部の授業などを含め、合計で76単位を取得することが卒業の要件となっている。



---

# 大学院独立研究専攻

---



# 文化資源学

## ◇教員◇

教授：中村雄祐、小林真理、高岸輝、西村明、吉田寛

准教授：松田陽、野村悠里、大向一輝

特任教授：バーバラ・ガイルホン

助教：藏田愛子

## ◇学生◇

修士課程：21名、博士課程：12名

### （１）文化資源学とは何か

文化資源学研究室は 2000 年度に創設された。百年を超える長い歴史を有する文学部としては比較的新しい研究室である。正しくは文化資源学研究専攻といい、大学院のみで、学部に対応する専修課程を持たない。文化資源学と文化経営学の 2 つのコースから成る。

2 コースに再編されたのは 2015 年度からのことであり、それ以前は文化経営学、形態資料学、文字資料学（文書学・文献学）で構成されていた。後 2 者を統合して文化資源学コースとし、文化経営学コースの前に置く構成はつぎのように発想された。

世界には、「かたち」と「ことば」の膨大な蓄積がある。文書とは書かれた「ことば」、文献とは書物になった「ことば」である。多くの人文学・社会学系の学問は、もっぱらこれら「ことば」を相手にしてきた。ところが、現代では学問領域があまりにも細分化されたばかりか、情報伝達技術の発達で「ことば」とそれを伝えるメディアとの関係を希薄なものに変えてしまった。大学では「ことば」を読むことの訓練は盛んに求められてきたものの、肝心の「ことば」を過去から、あるいは遠方からわたしたちのもとへと伝える「文字」や「文書」や「書物」などのメディアそのものに対する関心が希薄になりがちである。

しかし、「文字」が発明された時点から、「ことば」はメディアの具体的な「かたち」と無縁ではなかったはずだ。両者を切り離して考えることはできない。「かたち」は「ことば」を拘束するが、一方で、それらの伝達や保存に対してさまざまな可能性を与えるからだ。「ことば」に向き合おうと

するならば、「文書」や「書物」という物体、紙や石や木という物質、筆やペンやコンピュータという道具にも目を向ける必要がある。

一方、「かたち」をもつばら研究対象とする既存の分野は、文学部においては美術史学と考古学ぐらいだが、いったん学問領域が設定されると、そこからは美術作品ではない、あるいは考古遺物ではないという理由で、無数の「かたち」が視野の外へと追いやられてしまう。

そこでは「ことば」をめぐる学問とよく似たことも起こる。すなわち、「かたち」をめぐっても、それを現実に作り出している物質や物体に対する関心が希薄になりがちなのだ。絵画を例にとれば、描かれた画像は絵画本体を離れて、版画や写真や印刷物、テレビやインターネットなどのメディア上をいくらでも移動可能である。そうした画像のみを論じること大切な研究である。しかしまた、絵画の形態（壁画、襖絵、天井画、掛け軸、絵巻、絵馬、額装画など）や物質的な側面は、そもそも絵画とは何であるかを考える重要な手掛かりとなる。絵画の形態は、それがそれぞれの時代にそれぞれの場所でどのような役割を果たしていたかを教えてくれるからだ。

文化資源学では、さらに「おと」の問題も視野に入れている。ここでは「おと」という目には見えないものが、どのような「かたち」（身体、楽器、音符、楽譜、音楽学校、コンサートホール、レコード、テープレコーダー、CD、音楽配信サイトなど）をともなつて生まれ、伝わるのかをも考えようとしている。

文化資源学とは、いわば既存の学問体系の側に立つことよりも、体系化のもとになった資料群の中に分け入ることから始まる。文化を根源に立ち返って見直し、資料群から多様な観点で新たな情報を取り出し、社会に還元することを目指している。

あえて「資料」ではなく、「資源」を使う。資源は英語で **resources** という。**source** の第一義は水源であり、川や流れの始まる場所である。そこに **re** が加わることにより、水源に臨むという意味が強められている。源泉からもう一度考え直そうというわけだ。

また、「資源」を用いることには、「文化財」という概念から少し距離を置くという意識がある。日本では、1950年に文化財保護法が制定されて半世紀を優に超えた。この間に文化財という言葉はすっかり定着したが、それは国や地方自治体による価値評価＝指定制度の定着でもあった。一方で



指定制度の弊害も顕在化し、指定されないものの再評価も求められている。1996年に登録制度が新たに導入され、2005年に文化的景観というカテゴリーが生まれたのはこのためである。近年ではまた、ユネスコの世界遺産に刺激されて文化遺産という言葉もよく使われている。

すでに価値の定まった「文化財」でも「文化遺産」でもなく「文化資源」を用いるのは、現代の社会、現代の文化に目を向けようとする意志の表明でもある。

このようにして「源泉」に立ち返って得た知識や情報を、今度は社会へと還元させることが「文化経営学」にはかならない。具体的には、史料館、文書館、図書館、博物館、美術館、劇場、音楽ホール、文化政策、文化行政、文化財保護制度、著作権制度などの過去と現在と未来を考え、そのことを通じて文化資源を活用しようとするものだ。

ここで強調しておきたいことは、あくまでもこうした「かたち」と「おと」と「ことば」に関する思考、研究の上に立脚して、文化経営の在り方を探究するという姿勢である。形態資料は博物館や美術館や劇場に、文字資料学は文書館や図書館につながるものの、はじめに「かたち」や「おと」や「ことば」ありきであって、決してその逆、はじめに博物館や音楽ホールや文書館ありきではない。それら文化施設のマネジメントを身につけるためには、経営技術の習得のみでは不十分で、「かたち」と「おと」と「ことば」が織り成す文化に通暁する必要がある。

文化資源学コース、文化経営学コースの順番にはこのような意味がある。ただし、入学後はいずれもいっしょに学んでいくと考えてほしい。

## （２）文化資源学ならではの講義

8人の担当教員（文化資源学＝中村雄祐教授、野村悠里准教授、高岸輝教授〔美術史学と兼任〕、西村明教授〔宗教学宗教史学と兼任〕、吉田寛教授〔美学芸術学と兼任〕、文化経営学＝小林真理教授、松田陽准教授、大向一輝准教授〔次世代人文学開発センターと兼任〕）、さらにバーバラ・ガイルホン特任教授、助教＝藏田愛子、の専門分野は、文化資源学が既成の学問領域を横断するトランス・ディシプリナリーな性格を有することを反映して、文書学、書物学、美術史学、宗教学宗教史学、美学芸術学、文化政策・文化行政論、文化経営論、文化遺産論、国際協力論などと多彩である。

さらに、学内では史料編纂所、総合研究博物館、東洋文化研究所、埋蔵文化財調査室と連携し、学外に対しては、国立西洋美術館、国文学研究資料館から兼任教員を、他機関等から非常勤講師を招いている。今後は、学外の研究機関・文化機関との連携をさらに充実させていく構想である。

ここでは、文化資源学ならではの講義を、2つのコースからいくつかを紹介することにしよう。

文化資源学コースでは、文字、写真、映画、デザインなど、文学部の他の研究室があまり扱わない資料や問題を積極的に取り上げる。いずれもそうした事物をどのように文化資源学として論じることができるか、いかにすれば文化資源化できるかを検討することから始める。

さまざまな事物が研究対象となりうる。中村教授はこれまでに蓄積されてきた声の文化や紙の文書の読み書きに関する先行研究を踏まえ、現在展開しつつある文系の学問とデジタル技術の邂逅について考える。野村悠里准教授は書物史および読書史の先行する研究を踏まえながら、書物の装幀・製本史研究に取り組み、文化資源学的資料の保存修復の問題やそれを支える職人技術について考察を行っている。高岸輝教授の授業は、日本の古代から中世にかけての美術史における権力と絵画制作の関係を追究しつつ、日本の文化財保護や美術館における古美術の展示についても考察する。西村明教授は、宗教と戦争などの複雑なテーマがミュージアムという世俗空間においてどのように取り扱われているかを考察する。吉田寛教授は、現代のメディア環境下における人間の感性のあり方やその変容を、認知科学や工学といった関連諸科学とも連携しつつ、哲学的に探求しており、最近ではとくにデジタルゲーム（コンピュータゲーム、ビデオゲーム）を主な研究対象としている。本郷和人教授・井上聡准教授（史料編纂所）による授業は、テキストとしての解説に加えて、物質としての古文書や関連する物質文化へのアプローチを行い、文字資料の新たな資源化を試みる。

文化経営学コースでは、小林真理教授が文化政策・文化行政を理論的に研究し、実践でどのように活かすかを考察する場が文化経営学演習（文化経営学の射程、文化経営学の方法）であり、また非営利の文化施設をめぐる制度と運営方法について、文化施設経営論において展開する。さらに、社会学演習においては、地域とアートマネジメントの問題を扱う。松田陽准教授は、文化遺産という概念が世界の異なる地域において、いつ、どのように形成・受容されたのか、また今日、文化遺産に関連する様々な社会

現象に法制度や政治力学がいかに影響を与えているかを探究する講義を行っている。大向一輝准教授は、人文学研究を対象とした情報技術の導入や、デジタルアーカイブの構築手法に関する講義を行う。バーバラ・ガイルホン特任教授は、日本の古典文化におけるジェンダーと権力の関わり、東日本大震災での福島は文化においてどのように表現されたのか、日本演劇ではどのように現代社会を描いているのか、そして日本における地方演劇と芸術祭について考察する。

2005 年度から文化資源学に関心を持つ学部生に向けて、「文化資源学入門」という講義を開設している。2024 年度の「入門 I」は、野村准教授および蔵田助教が担当し、さらに松田准教授が「入門 II」で文化資源学の導入部分を紹介している。また、博物館や美術館の現場から文化事業を考察する場が、遠藤秀紀教授・西秋良宏教授ら（総合研究博物館）、笈奈雅子准教授・邊牟木尚美准教授（国立西洋美術館）によって用意されている。

### （3）大学を開く

修士課程のみで始まった教育活動も 2002 年度からは博士課程が加わって本格化し、これまでに 28 人が博士号を取得している。また、文化資源学研究室は社会人に対して大きく門戸を開いている。入学試験には修士課程、博士課程ともに一般選抜と社会人選抜があり、定員の約半数を社会人選抜としている。これらは大学を社会に対して開こうとする意志表示であり、人文社会系研究科にあっては文化資源学研究室がその最先端にある。

多くの社会人学生が図書館や美術館・博物館、国際文化機関や出版社を職場としている。それらは単なる学生の所属先で終わらず、これからは研究室を含めた相互の関係がインターネットのように増殖してゆくに違いない。高校から学生を受け入れ、社会へと送り出すという大学の常識的な役割が、ここでは通用しない。学生の職業も経験も年齢も多種多様であることが、他の研究室にはない活気をもたらしている。社会人が大学に逆流し（リカレント教育）、反対に学生が在学中から社会の現場に出るという仕組みを積極的に構築したい。後者については、国文学研究資料館が実施する「アーカイブズ・カレッジ」に参加することで、アーキビスト養成の現場を体験できる。

文化資源学研究室は、2000 年 10 月にフィレンツェ大学で催された国際シンポジウム「イタリアの中の日本／日本の中のイタリア」に参画し、2001

年 10 月には、文化資源学フォーラム「文化をつくる、人をつくる—インターンシップとリカレント教育の現在」を、2002 年 10 月には「記憶の再生～遺跡・史跡のマネジメント」を、2003 年 8 月には「関東大震災と記録映画」を、そして 2004 年 11 月には「文化経営を考える」を主催してきた。2007 年には国立民族学博物館と共催で「文化資源という思想—21 世紀の知、文化、社会」を大阪、パリ、東京で開催した。

2005 年度からは、同フォーラムの企画から実行までのすべてを文化資源学に新たに入学した修士課程・博士課程の学生が担当することとした。教員を交えた会議を隔週で開きながら準備を進め、様々な形態で行われている。研究室ホームページに開催記録が掲載されているので、ぜひともご覧いただきたい。

また、2002 年には、本研究室が中心となり、文化資源学会を設立した。現在、およそ 300 人の会員がおり、定期的に研究会と見学会（遠足と呼んでいる）を開催し、研究雑誌を年 1 回刊行している。本研究室以上に、開かれた研究の場となっている。

2021 年には、東京大学文化資源学研究室編『文化資源学——文化の見つけかたと育てかた』（新曜社）を刊行している。文化資源学研究室という船はまだ港を出たばかり、この先のさまざまな寄港地から乗船が可能である。

# 韓国朝鮮文化

## ◇教員◇

教授：六反田豊、本田洋、金成垣

准教授：伊藤智ゆき

特任准教授：曹瑞妍      助教：李美姫

## ◇学生◇

修士課程：11名、博士課程：14名

### （１）研究室の概要

韓国朝鮮文化研究室は、学部学生の定員をもたない大学院のみの独立専攻である。1993年4月に文学部附属文化交流研究施設に設置された朝鮮文化部門を母体として、2002年4月に開設された。日本では最初の韓国朝鮮文化に関する専門的な教育・研究組織である。

韓国朝鮮文化研究室は、文学部を離れて、赤門前の赤門総合研究棟の7階にある。文学部学生の利用にはいささか不便な位置だが、日本で最大規模の韓国朝鮮関係図書を所蔵しており、韓国朝鮮に関心をもつ諸君には宝庫のようなところである。本研究室は、前身が研究施設の一部門ということで、研究と国際交流が活動の中心となってきた。この間、意欲的な資料収集を続け、研究文献や史料の集積は短期間で日本有数のコレクションをもつに至った。とりわけ韓国の学術雑誌については、日本最大の所蔵を誇っている。日本における韓国朝鮮研究の中心として、共同研究や資料収集のために日本国内のみならず外国から訪れる研究者も多い。

朝鮮半島と日本列島という地理的に近接した2つの地域は、古代から現代に至るまで、政治・経済・社会・文化という、人間生活のさまざまな分野で深い交流を結んできた。日本列島で人々が作り出してきた歴史と文化が、朝鮮半島のそれと分かちがたく結びつき、今日もなお続いている。その重要性をいち早く認識したのが東京大学であり、すでに1916年、全国の大学にさきがけて文学部に朝鮮史講座を設置し、本格的な研究と教育を始めた。朝鮮文化研究室はその伝統のよき部分を受け継いでさらに発展させ、韓国朝鮮文化研究専攻の開設へとつながった。韓国朝鮮文化研究専攻は、歴史学・考古学・社会学・思想史・科学史・言語学・文学・文化人類学な

ど、多方面から韓国朝鮮の社会と文化を総合的に研究することを目的として開設され、韓国朝鮮歴史文化と韓国朝鮮言語社会の2つの専門分野で構成されている。

韓国朝鮮文化研究専攻は他研究室と異なり、所属する学部学生がいない。そのため学部学生諸君からはその姿が見えにくいことと思う。しかし、東洋史学、中国思想文化学、言語学、社会学など、専門的に関係の深い各専修課程と密接な協力関係をもって、韓国朝鮮文化に関する学部授業を担当している。講義と演習は関連各専修課程の必修科目に認定されており、文学部各専修課程に所属しながら韓国朝鮮文化研究室教員の指導を受けて卒業論文を書き上げ、韓国朝鮮研究者への道を歩む学生も多い。韓国朝鮮に関心をもつ学生であれば、専門に関係なく、訪れてほしい。研究室の扉は常に皆さんに向かって開かれている。

## （2）教員と授業

六反田豊教授は、中近世（高麗・朝鮮時代）史研究を専門としている。韓国精神文化研究院（現韓国学中央研究院）での留学経験をもち、韓国の学界と太いパイプをもっている研究者である。最近の著書に『東アジアと東南アジアの近世 15～18 世紀（岩波講座世界歴史 12）』（共著、岩波書店、2022 年）、『朝鮮史 1 先史～朝鮮王朝』（共著、山川出版社、2017 年）、『朝鮮王朝の国家と財政』（単著、山川出版社、2012 年）などがあり、また論文に「興原倉小考—その所在地と移転問題—」（高倉洋彰編『東アジア古文化論攷』1、中国書店、2014 年）、「朝鮮初期三浦倭料の調達方式と財源」（『年報朝鮮学』20、2017 年）、「朝鮮初期の財政制度と鄭道伝」（『韓国朝鮮の文化と社会』17、2018 年）などがある。近年では朝鮮半島における「水環境」の歴史学的研究に関心をもち、漢江や洛東江流域などの現地踏査も進めている。講義では朝鮮時代の税制や国家財政を扱い、演習では朝鮮時代史の基本史料である『朝鮮王朝実録』などを講読する。授業は東洋史学・日本史学・西洋史学・中国思想文化学の各専修課程で必修科目に認定されている。

本田洋教授は、社会・文化人類学を専門とし、主として韓国の地域社会を対象とする民族誌的研究に従事している。当初は韓国南西部南原地域の農村での長期の滞在調査に基づいて、産業化と都市化の過程における農村社会の変化を研究していたが、その後は歴史人類学的視角をも合わせ、多



岐にわたる研究を行うようになった。近年では、都市から農村への移住者とコミュニティ形成を主題とした調査研究も行っている。主たる著書・論文に、『東アジアにおける文化の多中心性』（三尾裕子と共編、風響社、2001年）、『東アジアからの人類学：国家・開発・市民』（宇田川妙子・中村淳と共編、風響社、2006年）、「韓国の帰農：智異山麓山内地域の事例から」（『韓国朝鮮文化研究』11、2012年）、『有志と名望家：韓日地域社会構造に対する民族誌的比較』（韓国語、林慶澤と共著、イメジン、2013年）、『韓国農村社会の歴史民族誌：産業化過程でのフィールドワーク再考』（単著、風響社、2016年）等がある。文学部授業科目として、社会学概論・特殊講義・演習（社会学専修課程）、韓国朝鮮文化特殊講義・演習、文化人類学（いずれも共通講義）を担当している。

金成垣教授は、社会学を専門とし、失業・貧困問題や少子高齢化問題などの社会問題、そしてそれに対応するための雇用・社会保障政策や家族政策などの社会政策＝福祉国家政策について研究している。韓国や日本、中国を中心としたアジア諸国・地域を主な対象とし、歴史比較分析を通じて今日の状況を明らかにし、国際比較分析を通じて各国の現状を明らかにすることを目指している。これをふまえ、今後の課題や展望を考える政策論についても関心を持っている。近年では、雇用不安定化や少子高齢化、多文化社会化といった社会変動とそこにおける福祉国家の変容をテーマとして研究を進めている。主たる著書に、『後発福祉国家論——比較のなかの韓国と東アジア』（単著、東京大学出版会、2008年）、『現代の比較福祉国家論——東アジア発の新しい理論構築に向けて』（単編著、ミネルヴァ書房、2010年）、『福祉国家の日韓比較——「後発国」における雇用保障・社会保障』（単著、明石書店、2016年）、『アジアにおける高齢者の生活保障——持続可能な福祉社会を求めて』（共編著、明石書店、2017年）、『韓国福祉国家の朝鮮』（単著、明石書店、2022年）等がある。文学部授業科目として、社会学概論・社会学演習（社会学専修課程）、韓国朝鮮文化特殊講義・演習（共通講義）を担当している。

伊藤智ゆき准教授は、韓国朝鮮語の音韻論・音声学・歴史言語学を専門とし、特に韓国朝鮮語の歴史的発展と類推変化、音素配列、借用語適応、韓国朝鮮語発話の音響音声学的分析に関心を持っている。具体的には、中期朝鮮語～現代韓国朝鮮語諸方言におけるピッチアクセントの変化とバリエーション、中期朝鮮語の語幹構造に基づく朝鮮語祖語再構、複合語濃音



化、英語・日本語・中国語からの借用語に見られる適応パターン分析、朝鮮漢字音研究、現代韓国朝鮮語方言（特に延辺朝鮮語）の喉頭素性三項対立に関する音響音声学的研究などを行っている。個々の言語事象を詳細に検討することで、言語変化の背後にあるメカニズムを明らかにすることを目標としている。主たる著書・論文に、『朝鮮漢字音研究』（汲古書院、2007年）、「Korean accent: Internal reconstruction and historical development」(*Korean Linguistics* 15(2)、2013年)、「A sociophonetic study of the ternary laryngeal contrast in Yanbian Korean」(『音声研究』21(2)、2017年)「Iterated learning models of language change: A case study of Sino-Korean accent」, (Naomi H. Feldmanと共著、*Cognitive Science*、46(4)、2022年) 等がある。

曹瑞妍特任准教授：韓国朝鮮文化研究室では、毎年1名ずつ外国人客員教授を招聘して、最先端の研究を紹介してもらっている。本年度の曹瑞妍特任准教授のご専門は、韓国文学である。

### (3) 研究室事業

(1) コリア・コロキウム。これまでは公益財団法人住友財団の助成を受け、毎年5回のペースで、原則として3番大教室(2020年度はコロナ禍のため中止、2021年度はオンライン)で木曜日夕刻から開催してきたが、昨年度から研究室単独でのオンライン開催に変更した。昨年度同様、今年度も3回の開催を予定している。参加は自由である。変動する朝鮮半島の現在と過去を把握するために、内外の専門家に自由な立場から話してもらっている。韓国語・英語話者の場合は、日本語通訳もついている。

(2) 韓国朝鮮研究文献コレクション。日本における韓国朝鮮研究関係文献センターとなることをめざして、各種史料・研究文献の収集と整理作業を行っている。基本史料や研究図書の収集が中心となるが、韓国の学術雑誌、とりわけ大学・学会が出版したものの重点的整備を行っている。また、故末松保和学習院大学名誉教授の御遺族から同教授収集の朝鮮関係図書約3,000冊、韓国文化交流財団から語学関係学術新刊図書約1,000冊、韓国学中央研究院から同研究院発行図書など、多くの寄贈も受け入れ、韓国・米国など各国の大学・研究機関・学会と出版物の交換を行っている。

(3) 国際交流。東京大学や人文社会系研究科を代表して、ソウル大学校(韓国)、イリノイ大学(米国)、高麗大学校(韓国)、成均館大学校(韓国)

と交流協定を締結し、学術交流や学生交換を行っている。

(4) 外国人研究員。国際的な研究交流を行うために、日韓文化交流基金や国際交流基金の助成などを受けて、外国人研究員を随時受け入れている。



---

次世代人文学  
開発センター

---



# 次世代人文学開発センター

## ◇教員◇

### 文化交流学部

教授：小島毅

教授：芳賀京子、唐沢かおり（兼務）

准教授：松田陽（兼務）

助教：太田泉フロランス（地域連携担当）

特任助教：李貞善（尊厳学担当）

### 国際人文学部

教授：鎌田美千子、鈴木淳（兼務）

助教：吉田夏美（留学生特別講座プログラム担当）、笠原真理子（ヒューマニティーズ・リエゾン担当）、菊間晴子（大江文庫担当）、大足恭平（情報メディア室担当）

特任助教：夏木大吾（夏季・冬季特別プログラム担当）、石坂桜（東京大学 150 年史編纂担当）

### 人文情報学部

教授：鉄野昌弘（兼務）、中村雄祐（兼務）、小林正人（兼務）、高橋晃一（兼務）、高橋典幸（兼務）、高岸輝（兼務）

准教授：大向一輝

助教：塚越柚季

## （１）次世代人文学開発センターについて

本センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行っている。センターに籍を置く学生はいないが、授業や論文指導等を通じて教育も担当している。

センターの前身は、昭和 41 年度に創設された文化交流研究施設で、地域間の文化の交流や複数の文化領域にわたる総合的な研究を行なうことを目的としていた。その後、平成 5 年度に朝鮮文化部門、平成 6 年度に東洋諸民族言語文化部門が増設され、従来の組織である基礎理論部門とともに、

3 部門からなる研究組織になった。平成 14 年度には朝鮮文化部門が韓国朝鮮文化研究専攻として独立し、同年 7 月から寄附研究部門「文化環境復元」が新設された。平成 17 年度からは組織名を現在のセンターの名称とし、その下に従来の基礎理論部門を継承した先端構想部門のほか、創成部門、萌芽部門を置いた。創成部門の死生学拠点（平成24年度に死生学・応用倫理センターとして独立）、萌芽部門のデータベース拠点・大蔵経（のち創成部門、現在の人文情報学部門）のような、現在にまで続く研究拠点がここから生み出されている。平成 30 年度、センターの 3 部門は文化交流学部門、国際人文学部門、人文情報学部門に改組され、現在に至る。令和 4 年度には、センター内に「人文学応用連携推進室」が設置された。

## （2）次世代人文学開発センターの特色

センターは、大学組織の上では研究科と研究所の中間的な存在と位置づけられている。すなわち、学内の独立した附属研究所とは異なり、人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行うものと規定されている。センター長は、研究科長が兼任する。専任の基幹教員に加えて、個別のプロジェクトを推進する兼務の流動教員を、人文社会系研究科の研究室から受け入れている。

### 「文化交流学部門」：

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、「先端構想部門」の時期を経て、現在の名称になった。複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行ないつつ、それらを公開発信していくことを目的とする。前身である文化交流研究施設や先端構想部門には、専攻を異にする様々な分野の教員たちが着任し、それぞれの専門学問領域に基礎を置きながら、多分野・複数文化に関わる研究を行ってきた。歴代主任には、旧文化交流研究施設創設時の吉田精一教授を初代に、美術史学の秋山光和教授、チベット語・チベット史の山口瑞鳳教授、古代ローマ美術史・考古学の青柳正規教授、西洋中世史の高山博教授、西洋美術史の小佐野重利教授らがいる。平成27～29年度には集英社高度教養寄付講座、平成27～令和 2 年度には東京大学ビジョン2020推進事業「Sustainability と人文知」研究プロジェクトが置かれた。令和 3 年度以降は地域連携プロ

ジェクトの本部も兼ねる。

教育面では「文化交流特殊講義」と「文化交流演習」を開講しており、その内容に応じて専修課程の必修科目に認定されていたりするので、文学部便覧の各専修課程の「授業科目および認定科目一覧」や、文学部の「授業科目一覧・授業時間割」次世代人文学開発センターの項を参照してほしい。

「国際人文学部門」：

留学生教育や国際交流、後期教養教育、各種プロジェクトへの参画を通して人文学の国際化を推進し、東京大学を世界に向けた学術研究の発信拠点にすることを目的とする。

人文社会系研究科・文学部には、諸外国から来た留学生が数多く在籍している。勉学及び研究に必要な高度な日本語運用能力の習得に向けて日本語及び日本文化の教授法開発を行うとともに、帰国後に大学教員を目指す留学生や将来日本語教員を目指す学生のニーズに応じて日本語教師教育に関する研究も進めている。

また、海外の大学と提携した夏季・冬季特別プログラムの企画・実施を通して学生の国際交流を推進している。平成 27 年度から開始された後期教養教育では、本郷キャンパスに所在する人文学教育部局として人文社会系研究科・文学部が積極的に協力し、多くの授業を提供している。その一環として教養教育の在り方に関する研究を行っている。

加えて、150 年史編纂、ヒューマニティーズ・リエゾン、日立東大ラボのプロジェクトにも参画し、これらに関する研究を展開している。

「人文情報学部門」：

人文社会学の基盤となる知識の保存・発信の方法がデジタル媒体へと大規模に転換され、進化する情報技術の影響に曝されるなか、人文社会学が培ってきた伝統的な研究方法と研究成果とを将来にわたって活かす、あらたな研究モデルの構築を人文情報学（Digital Humanities）として目指している。

平成 20 年 4 月に、当時の萌芽部門に次世代人文学データベース拠点が設置され、「SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベース」と「言語資料データベース」とを柱としながら、あらたな人文学の基盤形成と研究方法の

本格的模索がなされた。このうち前者は「SAT 大正新脩大藏経テキストデータベース」を基礎としながら、仏教研究遂行に必要な発展的研究情報アーカイブを構築し、あらたな学術空間の創出を図るもので、平成 25 年度から人文情報学拠点へと拡大発展し、創成部門に移行した。平成 30 年度の改組に伴い、拠点の名称を部門名とするようになった。

### （３）教員について

#### 「文化交流学部門」：

本部門の専任教員は、小島毅教授、芳賀京子教授、太田泉フロランス助教である。小島教授は東アジア海域の思想文化交流を専門とし、芳賀教授は地中海域の形象文化交流を専門としている。太田助教は西洋中世宗教美術史を専門とし、地域連携プロジェクトを担当する。李特任助教は科学研究費学術変革領域「尊厳学の確立」の運営を担当する。また、兼務教員として松田准教授（文化資源学）が所属し、「鳥取県淀江町一帯を含む考古学的・文化資源的研究の支援プロジェクト」を担当し、唐沢教授（社会心理学）が日立東大ラボのプロジェクトを推進している。

#### 「国際人文学部門」：

本部門の専任教員は、鎌田美千子教授、吉田夏美助教、笠原真理子助教、菊間晴子助教、大足恭平助教、夏木大吾特任助教、石坂桜特任助教である。鎌田教授は日本語教授法開発と日本語教師教育を専門とし、人文社会系研究科・文学部日本語教室室長を務めている。吉田助教は留学生特別講座プログラム（通称「留学生のための特別講座」）を担当している。笠原助教はヒューマニティーズ・リエゾンとの研究連携を担当している。菊間助教は大江文庫の運営を担当している。大足助教は情報メディア室の運営を担当している。夏木特任助教は夏季・冬季特別プログラムと後期教養教育を担当している。石坂特任助教は兼務教員の鈴木教授（日本史学）のもとで東京大学 150 年史編纂を担当している。

#### 「人文情報学部門」：

本部門の専任教員は大向一輝准教授、塚越柚季助教である。兼務教員としては、鉄野昌弘教授（国文学）、中村雄祐教授（文化資源学）、小林正



人教授（言語学）、高橋典幸教授（日本史学）、高岸輝教授（美術史学）、高橋晃一教授（インド哲学仏教学）が所属している。

#### （４）授業について

##### 「文化交流学部門」：

文化交流学部門は、共通講義として「文化交流特殊講義」「文化交流演習」を開講している。令和６年度は、小島毅教授が東アジア文化交流史、芳賀京子教授が古代地中海美術史、非常勤の栗田秀法講師が近世ヨーロッパ美術史、中西啓太講師が近代日本学術史について開講している。

##### 「国際人文学部門」：

国際人文学部門では、日本語教育学に関する科目を開講している。令和６年度は、鎌田美千子教授による「日本語教育学概説」（文化交流演習Ⅴ）、「日本語教育学演習」（文化交流演習Ⅵ）を大学院共通科目として開講し、外国語・第二言語としての日本語の教授法に関する授業を提供している。

##### 「人文情報学部門」：

人文情報学部門が開講する科目は「人文情報学概論」「人文情報学特殊講義」で、「人文学フロンティア教育プログラム」に位置づけられ、文学部の各専攻の壁を横断し、デジタルという地平から人文社会学全体の課題を俯瞰できる授業を提供している。「人文情報学概論」は全学大学院に向けて発信されるデジタル・ヒューマニティーズ教育プログラムの中心科目でもあり、文・理の壁を超えて学生・院生が集い、あらたな人文社会学知の形態を考察する貴重な場となっている。令和６年度は大向一輝准教授と塚越柚季助教による「人文情報学概論Ⅰ」「人文情報学概論Ⅱ」のほか、「人文情報学特殊講義研究」Ⅰ～Ⅳが大向准教授や兼務教員と非常勤の永崎研宣講師らにより開講されている。

# 特別教育プログラム

# 死生学・応用倫理教育プログラム

## ◇教員◇

専任：池澤優、堀江宗正、鈴木晃仁、古荘真敬、乗立雄輝、

会田薫子、早川正祐、田村未希

非常勤：福永真弓、村上靖彦、吉永明弘、轟孝夫、

北條勝貴、福嶋揚、山田慎也

「死生学」は、死すべき存在である人間のあり方を見すえ、そこから生きることを意味を再考し、死を意識せざるを得ない人間を主題とする学問です。また、「応用倫理」は、現代社会のさまざまな場面で起きている諸問題に即して、私たちがどのような姿勢で、どのような対応をすべきかを考える営みです。科学と技術が我々の生活を飛躍的に便利にするに従い、これまでは考えられもしなかったさまざまな問題が生まれてきました。寿命を延ばすこと、生きることだけが価値があるとして、生物としての人間にとって不可避の死から目をそらしてきたわけですが、それは逆に人間の生の内実を貧弱にしてきたのではないか、という反省があります。果たして人間にとって科学技術とは何なのか、何であるべきなのか、また人間にとって生きることと死ぬことはどのようなものであるべきなのか、このような問いから発したのが、「死生学」であり「応用倫理」であると言えます。いずれも、その問いが包括的であることから、哲学、倫理学、宗教学、歴史学から、社会学、心理学、教育学、更に医学、看護学、法学、技術系の諸学問領域に至るまで、幅広い分野を包含することになります。

2011年に発足した人文社会系研究科「死生学・応用倫理センター」は、死生学と応用倫理に関する学際的教育を構築するために、学部横断型の「死生学・応用倫理教育プログラム」を開設し、これらの分野に関する学際的な知識を有する学生の育成を行います。関心を有する学生諸君の積極的な参加を歓迎します。

「死生学・応用倫理教育プログラム」は必修科目（概論）、必修選択科目（演習）、選択科目の3種類の授業からなります。必修科目は「死生学概論」「応用倫理概論」の2講義4単位、必修選択科目は「死生学演習」「応用倫理演習」のうちから2単位、選択科目は6単位、計12単位以上の履修に

より、修了が認定されます。修了者に対しては、東京大学教育運営委員会より修了証を付与します。

2024 年度の開講科目は、以下のとおりです。

#### □必修科目

| 担当教員   | 科目名            | 単位数 |
|--------|----------------|-----|
| 堀江宗正ほか | 死生学概論（死生学の射程）  | 2   |
| 鈴木晃仁   | 応用倫理概論（応用倫理入門） | 2   |

#### □選択必修科目

| 担当教員 | 科目名                                | 単位数 |
|------|------------------------------------|-----|
| 早川正祐 | 死生学演習 I（病いの語りをめぐる倫理）               | 2   |
| 鈴木晃仁 | 死生学演習 II（患者の歴史と倫理 I）               | 2   |
| 富澤かな | 死生学演習 III（墓石のグローバルヒストリー）           | 2   |
| 会田薫子 | 応用倫理演習 I（質的研究法入門）                  | 2   |
| 鈴木晃仁 | 応用倫理演習 II（患者の歴史と倫理 II）             | 2   |
| 堀江宗正 | 応用倫理演習 III（環境思想研究）                 | 2   |
| 井口高志 | 応用倫理演習 IV（支援とケアの社会学）               | 2   |
| 富澤かな | 応用倫理演習 V（オリエンタリズムと死生学：語りにくい他者を考える） | 2   |

#### □選択科目

| 担当教員 | 科目名                                       | 単位数 |
|------|-------------------------------------------|-----|
| 会田薫子 | 死生学特殊講義 I（臨床死生学・倫理学の諸問題 VII）              | 2   |
| 会田薫子 | 死生学特殊講義 II（臨床死生学・倫理学の諸問題 VIII）            | 2   |
| 会田薫子 | 死生学特殊講義 III（臨床死生学特論）                      | 2   |
| 早川正祐 | 死生学特殊講義 IV（共感とケアの哲学）                      | 2   |
| 早川正祐 | 死生学特殊講義 V（自律についての関係的なアプローチ：現代行為論・自由論の一展開） | 2   |
| 早川正祐 | 死生学特殊講義 VI（認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開）        | 2   |

（次ページに続く）

| 担当教員                  | 科目名                                  | 単位数 |
|-----------------------|--------------------------------------|-----|
| 乗立雄輝                  | 死生学特殊講義 VII (死生をめぐる偶然と確率の問題)         | 2   |
| 古荘真敬                  | 死生学特殊講義 VIII (死生をめぐる実存哲学の諸問題)        | 2   |
| 山田慎也                  | 死生学特殊講義 IX (葬送儀礼の変容と死生観)             | 2   |
| 富澤かな                  | 死生学特殊講義 X (宗教・東洋・死を語る視座 (1))         | 2   |
| 轟孝夫                   | 応用倫理特殊講義 I (技術時代の倫理——ハイデガー哲学の視点から)   | 2   |
| 吉永明弘                  | 応用倫理特殊講義 II (都市の環境倫理)                | 2   |
| 福永真弓                  | 応用倫理特殊講義 III (食と場所の環境倫理)             | 2   |
| 村上靖彦                  | 応用倫理特殊講義 IV (現象学的質的研究の方法)            | 2   |
| 北條勝貴                  | 応用倫理特殊講義 V (環境文化史から実践するパブリック・ヒストリー)  | 2   |
| 鈴木晃仁                  | 応用倫理特殊講義 VI (医療者の歴史と倫理)              | 2   |
| 福嶋揚                   | 応用倫理特殊講義 VII (破局のなかの希望～人新世の倫理・経済・宗教) | 2   |
| 堀江宗正                  | 応用倫理特殊講義 VIII (サステイナビリティ研究)          | 2   |
| 富澤かな                  | 応用倫理特殊講義 IX (宗教・東洋・死を語る視座 (2))       | 2   |
| 大塚類                   | 教育臨床学概説                              | 2   |
| 池田真理<br>佐藤伊織<br>森崎真由美 | 家族と健康                                | 2   |
| 瀧本禎之<br>中澤栄輔          | 生命・医療倫理 I                            | 2   |
| 根本圭介                  | 技術倫理                                 | 1   |
| 芳賀猛                   | 生命倫理                                 | 1   |

|      |             |   |
|------|-------------|---|
| 小松美彦 | 科学技術リテラシー論Ⅰ | 2 |
| 鈴木貴之 | 応用倫理学概論     | 2 |
| 斎藤幸平 | 現代哲学（Ⅰ）     | 2 |
| 米村滋人 | 特別講義 医事法    | 2 |

## 原典を読む

◇教員◇

柳原孝敦、宮田眞治

「原典を読む」は、東京大学の全ての学部の学生を対象に、日頃から関心は持ってはいてもなかなか紐解く機会のない、古今東西の古典や重要文献を講読形式で味読することを目的に開かれています。これを機に、一行一行をじっくり解釈しながら読み解いていく快楽を味わってみてください。

この科目は、もともとは 2001 年度までの「外国文学講読」を発展させたもので、文学部が専門課程における教養教育の一環を積極的に担うこと、具体的には理科系ないし社会科学系の学部在籍する学生諸君に、外国文学の講読を通じて幅広い人間教育を行うことを目的にしていました。もちろん、文学部の学問は、外国文学だけに限られているわけではありません。哲学、思想、歴史、社会学や心理学などの幅広い分野が研究対象です。しかも、そこに共通するのは、それらの学問の基本が広義の文献学、すなわちテキストの解読であることです。そこで、2002 年度からこの科目の開設を文学部全体に広げ、名称も「原典を読む」に改めることにしました。したがってここに言う「原典」とは外国語文献だけでなく、日本語文献や時には翻訳文献も含まれることになります。

テキストの解読は決してたやすいことではありません。日本語文献であっても、「日本語なのだから、読めばわかるだろう」式の安易な姿勢で接すると、大きな間違いをしでかします。テキストを解読するには、一定の方法に従いながら、きちんと筋道を立て、その上で内容を解釈していく地道な作業が求められます。そうした作業を実践的に学んでいくことが、ここでの目標になります。慣れないうちは面倒と感じるかもしれませんが、はまり込むとそれが愉悦に変わります。文学部の学問の楽しさはそこにあります。教員との人間的な触れあいが得られるのも、この科目の魅力といえます。担当するのは、すべて文学部の専任教員です。少人数向けというのが原則ですから、ずいぶんと贅沢なことかもしれません。マスプロ授業の経験しかない諸君は、ぜひ一度こうした手作りの授業を味わってみてください。



なお、以上のような趣旨で開設される科目ですので、文学部所属の学生諸君は聴講に制限のある場合があります。詳細は、授業を担当する各教員に確認してください。

参考までに、本年度の「原典を読む」開講科目を列記しておきます。

「ガブリエル・ガルシア=マルケス『予告された殺人の記録』を読む」(柳原 孝敦)

「ヘルマン・ヘッセの『メルヒェン』を読む」(宮田 眞治)

# アカデミック・ライティング

## ◇教員◇

Michael Yates、David Taylor、中邑啓子

インターネットの普及等により、学術研究の成果の共有が時空を超えて瞬時にできるような時代が到来しています。学術研究における国際化の流れのなかで、母語が異なる世界中の人々と共通の基盤を持ち、情報を公開し合い、相互理解に基づく批判的な検討や質疑応答が学術研究を進展させる大きな推進力になっています。このような状況の中で、今後学術研究の一端を担おうとするためには、それなりの能力の養成がこれまで以上に必須となります。

2002 年度より、学術研究の成果を今や世界の共通語である英語を使って広く国際社会に公開できる能力の養成をめざして、人文社会系研究科・文学部では、学部・大学院共通で半期 2 単位の「アカデミック・ライティング」という授業が新たに開講されています。受講生のレベルを考慮し、年度を重ねて開講科目が整備され、2005 年度からは、学術研究への意欲を持つ学部学生の基礎力養成を目指す「Academic Writing I, II (Introductory)」、大学院・学部共通で、基礎力の向上を目指す「Academic Writing III, IV (Intermediate)」、学術研究の成果が公表できるような能力の発展を目指す大学院専用の「アカデミック・ライティング 1, 2 (上級)」というようにレベル別に授業が開講されています。手紙や伝言等を含む日常生活にかかわる比較的短い文章や調査報告や研究概要等を含む研究レポートの作成が英語で書けるような能力が修得できていないと思われる学生は、まず共通講義の「英語後期 (Writing, Speaking)」を受講して基礎力を十分に養成してください。そのような基礎力の裏付けがあることが、「アカデミック・ライティング [英語]」を受講するための前提条件となっています。

授業は、(1) 学術論文の構成等に関する講義、(2) 受講生による論文の作成および口頭発表、(3) 受講生同士による発表論文についての討議、(4) 教員による批判的講評という形態で進められ、これらはすべて英語で行います。特に(2)については、与えられた課題について小論文を数回作成し、そ

れらについて(3)、(4)の過程で学んだことに基づき、学期末には受講生が専攻する分野での研究の成果を学術論文として作成し、実践的能力の養成に努めます。1クラスの受講者数が20名を超えるとこのような形態の授業は効果的に行うことができないので、受講希望者は、上記の要件を満たしていることを前提として、初回の授業の折に、担当教員が面接等を行って受講者を決定します。受講機会の均等化を図るため、当該年度に受講できるのは原則1クラスのみとします。

なお、大学院のみの科目ですが、フランス語とドイツ語、中国語の授業も開講されています。

文学部教員によるエッセイ

# 私の選択

「私の選択？」

加藤 隆宏（インド哲学仏教学）

人とは違う道

長屋 尚典（言語学）

気がついたときには、もう選択は終わっていた

藤井 光（現代文芸論）

「私の選択？」

堀江 宗正（死生学応用倫理）

このコーナーでは毎年、文学部の先生方をお願いして、今専門にしている学問との思い出などを語っていただいています。『PROSPECTUS』のバックナンバーでは、また別の先生方のエッセイを読むことができます。文学部ホームページにも掲載されていますので、興味のある人は <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/teacher/essay.html> を参照してください。参考までに、最近5年間に掲載されたエッセイを下に記しておきます。タイトルだけみても、文学部の先生方の学問との出会い方、つきあい方が実に多種多様であることが感じられるのではないのでしょうか。

|        |                      |                             |
|--------|----------------------|-----------------------------|
| 2023 年 | 西村 明 (宗教学宗教史学)       | 圧倒的な現実のコトバを与える              |
|        | 根岸 洋 (考古学)           | 考古学を選んだこと                   |
|        | 佐藤 至子 (国文学)          | 読めば読むほど                     |
|        | 土肥 秀行 (南欧語南欧文学)      | 日伊間の博士号ダブルディグリーの仕組みを創設する    |
| 2022 年 | 菊地 達也 (イスラム学)        | せっかくだし                      |
|        | 井島 正博 (国語学)          | 認識の仕組みを求めて                  |
|        | 小林 真理 (文化資源学)        | 自分の直感を信じる。                  |
|        | 芳賀 京子 (次世代人文学開発センター) | 女の一生と人生の岐路                  |
| 2021 年 | 納富 信留 (哲学)           | 不東一日本を出るという決断一              |
|        | 梶原三恵子 (インド語インド文学)    | 学生時代のいくつかの選択の記              |
|        | 塚本 昌則 (フランス語フランス文学)  | フランス語を学ぶことで新たな自分と出会う        |
|        | 出口 剛司 (社会学)          | 敵前を、大事なものを抱えてきわどくすり抜けていくやり方 |
| 2020 年 | 陳 捷 (中国思想文化学)        | 私の選択                        |
|        | 三枝 暁子 (日本史学)         | 与えられた道を生きる                  |
|        | 齋藤 希史 (中国語中国文学)      | 断片                          |
|        | 福井 玲 (韓国朝鮮文化)        | 韓国語史研究にたどりつくまで              |
| 2019 年 | 三浦 俊彦 (美学芸術学)        | 可能世界、美的観点、人間原理……            |
|        | 大宮勘一郎 (ドイツ語ドイツ文学)    | 隙間から隙間へ                     |
|        | 村本由紀子 (社会心理学)        | 始まりとしての「選択」                 |
|        | 熊木 俊朗 (北海文化研究常呂実習施設) | 遅れてきた臆病者の懺悔                 |

## 「私の選択？」

加藤 隆宏（インド哲学仏教学）

私たちは何かを選択する時、完全に自由に自分の意志や努力でそれを選び取ることができるのでしょうか。自分の経験に照らして考えてみると、どうもそういうわけではない気がします。私たちが選択できるものには限りがあって、初めから選びたくても選べないものもたくさんあります。古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』には、すべては「運命」によって決められているという極端な見解が紹介されます。「いかなる人間でも運命に逆らうことはできない。運命のみが目的を達する。人間の努力は無益である。」『マハーバーラタ』V.40.30（上村勝彦訳、ちくま学芸文庫）確かに、私たちのあずかり知らないところで、私たちが好むと好まざるにかかわらず、様々なことが決定づけられていることを私たちはよく知っています。私たちは生まれてくる場所を選ぶことができませんし、生まれること自体、私たちがコントロールできることではありません。老い、病、そして死など（仏教ではこれを生老病死の「四苦」とよびます）についても、私たちの選択に関係なく、避けがたく身にふりかかってきます。私たちは日々、自分たちがコントロールできない何か（神の計画、宇宙の法則、『マハーバーラタ』流に言えば「運命」、あるいは、インド的には私たちが過去になした自らの行為の結果、すなわち「業」等々）によって選択そのものを制限されていると言えます。

しかし、このような見方を突き詰めていくと、上でみたような、「人間の努力は無益である」といった、少し困った結論が見えてきてしまいます。修行や善行の実践を通じて幸福に向かおうとする古代インドの人々にとって、努力が無意味であるという帰結は特に受け入れがたいものがあります。そこで彼らはこう考えました。過去（インドの場合には前世も含む）になした様々な行為の結果として発現している私自身を含む現在を変えることはできないとしても、現在に働きかけることで未来（インドの場合には来

世も含む)については変えることができるのだと。これは厳密に考えると、一貫性を欠いた議論となり、矛盾をはらんでいますが、ある種の視点の転換（インド式現実主義的ゲシュタルトスイッチと勝手に名付けたいと思います）が起こっているということなのでしょう。私たちの力が及ばない部分については仕方なく受け入れるとしても、これから起こることに対しては私たちの関与が可能であるというように、未来志向に視点を切り替えることで、私たちの努力や意志の価値が守られました。

前置きはこれくらいにして、私の選択について。

もともと言語に興味があったため、駒場ではいくつかの外国語だけは割と熱心に勉強しました。古典語も一つくらいと選択したのがサンスクリット語でした。これはしかし、ギリシャ語、ラテン語は他の科目と重なっており、履修可能だったのがサンスクリット語だけでしたので、自ら積極的に選択したものと呼べるようなものではありません。それ以外のところでは、ろくに勉強もせずに遊んで暮らしていましたので、そうした不真面目がたり、留年こそ免れたものの、進振ではごく限られた、いわゆる底割れしている学科しか選択肢がありませんでした。ただ、サンスクリット語を学んでおり、多少面白さを感じていた頃でもあったため、印哲を進学先に選ぶことができました。振り返ってみると、この選択は私の人生でかなり重大なものだったということになりますが、当時はもちろんそれほど重たく捉えていませんでした。「ちょっと面白そうだから、印哲に進学してみるか、他に選択肢もほとんどないし」くらいの感じです。その後、修士に進み、博士に進み、海外留学を経験し、その他の紆余曲折を経て、30年以上経った現在ではインド哲学の教員をしています。その間、ここでは書き尽くせないほどの選択を経てきました。そもそも選べないものについて、諦めることも多くありましたが、自分が選んだわけでも望んだわけでもないのに、思いがけない幸運によって突然道が開けたり、苦境から救われることも何度か経験しました。私が主体的に選択したか否かにかかわらず、自分自身が最終的に決めたことについて、それを選ぶことを許してもらえそうな環境にあったことや選んだ道に進むことを応援してくれる人々が周りにいたことはありがたいことで、自分が決めたことに常に全力で取り組むことができたのは本当にラッキーでした。



インドで仕事をしていると「ジュガール」という言葉をよく耳にします。これは、色々なものが不足していたとしてもひとまず現状を受け入れ、創意工夫（急場しのぎの間に合わせとも言う）によってその現状を打開しようというインド流の仕事術、仕事観です。足りないことを嘆くよりも、今あるもので何とかする。途中色々あってもノープロBLEM、最終的に丸く収まっていればそれでオッケー、イノベーションが起これば儲けもの。この精神は、人生における選択の話にも通じるところがあると思います。人生には自分の思うようにいかないことはたくさんあります。しかし、選ばなかったものや選ばなかったものを嘆くより、選んだもの、あるいは、選ばざるを得なかったものに全力で取り組んでいく。こういうマインドセットをもっていれば、後になってから過去の自分の選択について振り返った時にも、きっとポジティブにそれを受け入れることができるのではないかと、最近では思うようになりました。

みなさんがどんな選択をされたとしても、ジュガールの精神があれば大丈夫です。迷わずに進んでください。

# 人とは違う道

長屋 尚典（言語学）

人と違うことがしたい。

私は言語学研究室でフィリピンやインドネシアで話されるオーストロネシア語族の言語を研究しているが、なぜ私が今の専門分野を選択したかと聞かれれば、結局のところその一言に尽きる。

子どものころから人と同じことをするのが大嫌いで、スーパー戦隊シリーズなら赤色よりも青色のキャラクター、『コロコロ』よりも『ボンボン』、VHS よりもベータ、『ごっつ』よりも『元気が出るテレビ』、スーファミよりもメガドライブにかっこよさを感じる子どもだった（学生のみなさんはわからないと思うので Wikipedia で調べてください）。そのような性格だったので、得をするよりも損をすることの方が多かったが、それでも、人と同じように生きて死んでいくのはなんとなく嫌だった。

そんなひねくれ者の私が子どものときから興味があったのが言語だった。私は岡山県の限界集落で生まれ、中学に入るまで一人で信号を渡ったことがないような田舎で育ったが、小学校のときから習い事でやっていた英語の勉強は好きだった。自分が知らない言葉のルールが存在し、そのルールを勉強すればそれを話す人々とコミュニケーションできるという事実がなんとなく愉快だったのかもしれない。

言語に関する興味がいよいよ強くなったのは、中学生のころ、哲学だか現代思想だかの本を読んでソシュールのことを知ってからだ。言語記号の恣意性とか **emic/etic** とかいう言語学の基本的な概念や、レヴィ＝ストロースの文化人類学や言語相対論などの考え方に触れて、もっとこのような勉強をしたいと思った。自分の話す日本語とは異なる構造や発想を持った言語を学び、それについて理解したいと思った。

高校に入ったころには、ふだん授業で勉強している言語の文法に特に関心があって、英語や古文、漢文について勉強するのが趣味だった。わからないところがあれば先生に聞いたり、図書館で調べてみたり、本の記述に

納得がいかなければ自分で文法規則を考えて本の記述を修正してみたり、今から考えると言語学者のまねごとのようなことに没頭していた。

何がそんなに楽しかったのかというと、文法が美しかったからである。英語のテンス・アスペクトの体系を表（パラダイム）にして悦に入ったり、英語で補文節をとる動詞を意味ごとにグループにわけてみたり、そういう作業が楽しかった。一方で、表に欠けているところがあると落ち着かなかったり、係り結びのように何のために存在するのかわからない文法現象を習ったときなどは不安で夜も眠れなかったりした。

幸いにして、岡山の片田舎の本屋でも受験参考書はある程度揃っていて、英語なら『ロイヤル英文法』や『英文法解説』などの文法書を、古文なら『古文研究法』などの参考書を買って愛読していた。週末には岡山市の丸善や紀伊国屋などの大きな本屋に行って、気の向くままに本を買って読んだ。その頃読んだ本としては、池上嘉彦先生の『記号論への招待』や木村英樹先生の『中国語はじめの一步』などが特に思い出深い（大学に入ってからこの先生方の講義を受けることになるとは想像もしていなかった）。

そんな高校生だったので、東大に入学するころには言語学を研究したいと思うようになっていた。その気持ちは駒場の時にさらに強くなった。当時の駒場には言語学の授業がたくさんあったからである。なかでも、後に私の指導教員となる西村義樹先生の授業は衝撃的だった。授業の冒頭、ソフトな声で、やや恥じらいながら「みなさん、『トイレを流す』というとき、『トイレ』は何を指していますか？『トイレに行く』というときの『トイレ』と同じですか？」という問いかけをなさり、「トイレ」という単語の意味構造を熱心に教えてくださった。「トイレ」のような日常の単語にもこんな多義性があるのかと感動した。

こういうわけだから、進学振り分けでも言語学を勉強できるところを選択しようとすぐに決めた。しかし、問題があった。今もそうだが当時の東大にも言語学を研究できる進学先がいくつもあったのである。選択をしなければならない。そんななかで私は言語学研究室を選んだのだが、それはなぜか？

それはやはり人と違うことがしたかったからである。みんながやっている言語をみんながやっている方法でやるのは、天の邪鬼の自分には耐えられないことだった。みんながやっていない言語を、みんながやっていない方法でやりたいのである。そうすると、できるだけ人がやっていない「変

わった」言語を研究できるところがいい。さらに、相変わらず英語は好きだったので英語を使って研究もしたいし、いつか世界のどこかに留学したい。

この二つの条件を同時に満たしていると思ったのは言語学研究室だった。今もそうであるが、言語学研究室は、日本語や英語だけでなく世界のどんな言語の研究もできる。また、世界のどんな小さな個別言語にも対応する必要があるからこそ普遍的な方法論を志向し、それゆえに、授業テキスト・資料も英語を使うことが多い。まさに自分のためにあるような研究室だった。

実際、その選択は正しかった。当時の言語学研究室にはモンゴルやらグルジア（当時の呼び名）やらエチオピアやら韓国やら台湾やら中国やらペルーやら、世界のあちこちの「変わった」言語を研究している先輩たちがいた。飲み会では、フィールドワークの話をしたり、摩訶不思議な文法現象についてニコニコ語り合ったりしていた。授業では分厚い英語の教科書を渡され、課題も英語で提出するなど、英語も勉強できた。そのときはできたフランス語でソシュールの *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes* を読む演習に参加し、ゴート語の辞書を引いてこなかったという理由で叱られたこともあった。

そうこうしているうちに3年生も終わりに近づき、卒論について考えなくてはならない時期になった。私は卒論でフィリピンの言語、特にタガログ語を研究することに決めた。その理由は何か？

それはやはり人と違うことがしたかったからである。タガログ語はそんな自分にうってつけの言語だった。なにしろ動詞が文の最初に出現するのである。日本語の反対である。日本語なら「花奈がパンを食べた」というところ、*Kumain ng tinapay si Hannah* というように、「食べた を パンが 花奈」という。とても変わっている。しかも、当時の言語学研究室だけでなく、日本でも研究者があまりいなかった。他にも理由はあるのだが、人と違うことができるというのが一番の理由で私はタガログ語の研究を始めた。そして、その研究を続けて現在に至る。

このように、私の選択は人と違うことがしたいという気持ちに突き動かされてきた。それがよかったかどうかは正直よくわからない。よかったこともあれば、わるかったこともある。でも、後悔はない。勉強したいことを勉強し、昨日知らなかったことを今日知ることができる。それはとても

幸せなことだ。

駒場の学生のみなさんには、一回きりの人生だから、他人のことなんか気にせずに、自分の勉強したいことを選択してほしいと思う。もしも私のように「変わった」言語が勉強したいなら言語学研究室に来るといいと思う。そのときは、歓迎する。

## 気がついたときには、もう選択は終わっていた

藤井 光（現代文芸論）

2008年の夏の数日、僕はアメリカのアイダホ州北部の山間地に滞在していた。そのとき翻訳していた小説の作者デニス・ジョンソンが、そこに居を構えていて、自宅を誰にでも開放する期間に招いてくれたのだ。

地元で詩を専門とする出版社を経営している女性、大学の創作科でジョンソンの授業を取っていた若手作家たち、文芸誌の編集者の男性、ジョンソンの姪たち。そうしたカラフルな面々が、山麓の一軒家に集い、思い思いに数日間を過ごしていた。文芸誌の編集者はかつて原稿料の支払いをジョンソンに断られてしまい、そのかわりに山小屋をひとつ建てる約束をして、毎年この時期に遊びに来て小屋作りに勤しんでいた。

ジョンソンの教え子のひとりが、新婚カップルとして来ていた。イリノイから車で一週間ほどかけてアイダホに来ていて、そのあとオレゴンに向かうのだという。ジョンソンは初対面だったほうの人に、「きみも作家なの？」と訊ねた。そうです、という答えを聞いて、ジョンソンはひと言だけつぶやいた。「じゃあ、ふたりとも呪われているわけだな」

みんなが笑った。その言葉はジョンソンなりの、ベテラン作家から若手への冗談めかしたエールだった。それから9年後、ジョンソンは世を去った。

今になって「選択」というテーマで文章を書くにあたって、その「呪われてる」という言葉は、どうしても僕の脳裏に蘇ってくる。作家であること、何かを書くことが、選択ではなく呪いのようにして引き受けざるをえないものとしたら、僕にとって、その作家が書いたものを研究すること、翻訳することはどういう意味を持つのか。小説に応答するように論文を書いたり、訳文を作るという形で

言葉を書いていくとき、僕はどこまでその言葉を「選択」したと言えるのだろうか。

2010年、そのとき翻訳していた小説『紙の民』の作者であるサルバドル・プラセンシアに会うために、ロサンゼルスを訪れた。僕より4歳くらい年上のプラセンシアは、小説に出てくるロサンゼルス近郊の町エルモンテのあちこちを案内してくれた。車を運転しつつ、プラセンシアは生き立ちを少しばかり話してくれた。8歳でメキシコからアメリカに移住した彼は、家族も親戚もブルーカラーの労働者ばかりという環境で育った。そのなかで、プラセンシアは作家になりたいとはなかなか言い出せず、まわりには教師になるつもりだと語っていたという。

『紙の民』の原書 *The People of Paper* は、2005年に出版された。その5年後に僕が会いに行ったとき、プラセンシアは第二長編を完成させるべく奮闘している最中だった。本人いわく、ページが綴じられた本ではなく、トランプカードのセットのように、箱のなかに一枚一枚ばらばらのページが入れてあって、読者がどうシャッフルしても読める物語にしたいのだという。「あと一年で完成すると思う」とプラセンシアが誇らしげに言っていたその小説は、僕がこの原稿を書いている2024年春の時点で、まだ日の目を見ていない。20年かけて一冊の本を書くことになるとは、作家本人も予測していなかっただろうし、果たして完成するのかもわからないが、それでも断言できることがある。その本を書くか書かないか、という選択肢は、プラセンシアにはなかったのだ。そして、その「呪い」を引き受けて日々頭を絞っている作家本人は、実に楽しそうだった。

2014年にシカゴに行ったのは、レベッカ・マカーイに会うためだった。そのときはマカーイの短編集『戦時の音楽』を翻訳していたのだった。せっかくなので、シカゴで一番好きな場所はどこですか、と聞いてみると、ダウントウンの古風なビルに連れていってくれた。芸術家たちのための空間として1885年に造られたその建物



には、僕が訪ねていったときも、音楽教室やギャラリーが多数入居していた。建物のなかを歩き回るのが、マカーイにとっては何よりも心安らぐ時間なのだという。その建物の玄関の上には、“All passes-art alone endures.”という言葉が刻まれていた。「すべては過ぎ去る一芸術のみが時を超える」。

マカーイはハンガリー生まれの父親を持つ作家である。祖父は第二次世界大戦中のハンガリーで、反ユダヤ主義的な法律を成立させた政治家だった。そのくだりを、マカーイ自身が短編の題材にしている。孫娘は祖父の過去について多くを知らないまま成人し、やがては戦争を背景として、罪悪感を主題とする短編を多く書くようになる。自分の創作はどこまで自分で選択したものなのか。それとも、祖父が代表する暗い歴史の力に動かされて小説を書いているのか。その問いは小説となり、芸術に変えられることで、作家という個人のもとを離れて、未来の読者に拡散していく。

僕が初めて翻訳した小説は、ジョンソンの『煙の樹』というベトナム戦争の物語だった。プラセンシアの『紙の民』は、移民たちが土星を相手に戦争を始めるという奇妙な小説だった。マカーイの『戦時の音楽』では、第二次世界大戦の記憶を 21 世紀にどう保持すべきか、という問題があちこちに顔を出す。つまり、どれも戦争小説なのだ。その三人に限らず、ダニエル・アラルコンの『ロスト・シティ・レディオ』はペルーの内戦、テア・オブレヒトの『タイガーズ・ワイフ』は旧ユーゴスラビア内戦をモデルとした寓話的な小説だし、アンソニー・ドーアの『すべての見えない光』は第二次世界大戦中のヨーロッパ、ハサン・ブラーシムの『死体展覧会』はイラク戦争後の混沌を舞台としている。僕の翻訳との付き合いは、戦争文学と切っても切り離せない。

なぜ戦争文学にこだわってしまうのか。学部 4 年生のとき、大学院に入るという選択肢をなんとなく考え始めた 2001 年の夏に、アメリカの同時多発テロ事件が発生して、そこからアメリカがふたたび戦争に突入していったことに衝撃を受けたせいかもしれない。でもおそらく、そうした自覚的な選択よりも大きな要素がある。父方

の祖父の戦争体験である。

祖父は軍人だった。情報機関の所属だったそうだが、祖父本人は自分の体験について詳しいことはまったく語らないまま、戦後 45 年ほどして世を去った。ただ、中国やインドネシアに派遣されていたこと、背中にいくつも傷があったこと、夜中に悪夢にうなされていたことなどは、家族も知っている。でも、多くは空白のまま残されている。そして言うまでもなく、その空白には無数の死者たちがいる。

もちろん、その空白は今では埋まることはない。でも、現在から過去に向けて応答しようと試みることはできる。そしてどういうわけか、現代のアメリカ文学や英語圏文学、とくに戦争の物語を研究したり翻訳したりすることが、僕なりに応答するやり方だった。

そのことを、最初から自覚していたわけではない。この分野の勉強をするようになって 10 年ほど経ってようやく気がついた。目の前にある興味を追いかけて、現代のアメリカで生きる作家たちの言葉に向き合っていたら、それは僕自身と過去とのつながりを新しい形で作り直すことでもあったのだ。何十年もかけて研究と翻訳を続けていく、それは僕にとっては選択する以前のことだった。気がついたときには、もう選択は終わっていた、とも言えるかもしれない。

今、デニス・ジョンソンにその話をするのができたなら、「きみも呪われてるな」と彼は言ってくれるだろうか。

## 「私の選択？」

堀江 宗正（死生学応用倫理）

このエッセイのテーマは「私の選択」なのだが、それは本当に「私の選択」なのか。人文社会系研究科の教員なら、誰もがそう疑問に思うだろう。仮に、そのような疑問はおくびにも出さないようなエッセイを書いていたとしても、どこかにそのような疑問を隠し持っている。そう信じたいところがある。

このエッセイを読む人には、ぜひ私の **UTOKYO VOICES** という教員紹介インタビューも併せて読んでいただきたい。「人々の話（ストーリー）の中から現代人の死生観や倫理観が浮かび上がる」というタイトルの記事だが、自分の研究姿勢や研究内容をコンパクトに的確にまとめている（インタビュアーに感謝）。

<https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/features/voices006.html>

その中で、人生の出発点として、「自分はどのように生まれてきたんだろう」という問いがあったと語っている。4 歳の頃の話である。それからしばらく後に降りてきたのは「人間の幸福のために生きろ」というメッセージだった。当該記事ではインタビュアーが相手なので控えめな語りになっているが、これは、ある種の神秘体験であり、啓示を受け取ったと言ってよい瞬間だった。

記事で語っていないことがある。それは自分が、いわゆる新宗教の信仰を持つ家庭に生まれ、最近よく使われるようになった「宗教 2 世」に似た環境で育ってきたということである。上記の体験には、そのような背景があるだろう。教祖もやはり「人間の幸福のために生きろ」に近い教えを説いていたからである。しかし、そこにはどこか自分自身の幸福のために、というニュアンスがあったと記憶している。それに対して、自分一人の幸福のために生きるのは、あまりにも小さい、という反抗心が芽生えた。自分と他者の幸福を包摂するような幸福をあくまでも目指してゆこうというのが、そのメッセージの意味を深く考えて出していった結論である。

私は、その教団の指導者たちが、自身の持つカリスマ性を自覚すると分派してゆくという歴史を、後に学んだ。また実際の指導者たちの言葉や態度から、プライドや自尊心が彼らの「選択」を狂わせているのだと洞察した。そして、呪術的な力よりも、無我や愛などと言った教えを備えた宗教の方がより進んでいるのではないかと考えた。ある物事が、より大きな視点から見て、またより長期的な視点から見て妥当なのかどうかを反省するという営みを、長く続けている宗教は、システムチックに組み込んでいる。そのような反省的行為を通して、何らかの徳性を養おうとしている。そうして人格をみがいている人が多くいるため、組織は長続きする。それでいて、自己の限界を自覚するところに、より大きな存在、時間を超えた存在への認識が開けてくる。このような循環が理想的だと思い描くようになった。

高校時代には、こうした反省的な営みを学問的に遂行しているのは、心理学、中でも精神分析だと考えるようになった。大学に入るとエーリッヒ・フロムの思想に触れ、ますます心理学への憧れを強めた。かくして、文学部時代には心理学研究室に所属したのだが、当然と言えば当然だが、自分が探究しているのは、もっと宗教に近いけれど、宗教ではない何か（今日的にはスピリチュアリティ）だと思うようになってゆく。それは勉強から距離を置くことにつながった。同時に、幼い頃から所属していた教団からも離れ、既成宗教と新宗教に関する書物をあさるように読んでいった。

これらとは別に音楽活動に精を出したこともあり、学問からはどんどん遠ざかり、授業にも出席しなくなった。結果として、あともう少しというところで、単位を落とし、留年に至る。あるレコード会社への就職が内定していたが、それも白紙となる。

こうして、いわゆる何ものからも宙ぶらりんになり、ついでに付き合いっていた彼女からも振られ（後に結婚するが）、自分の存在の意味が分からなくなり、いわゆる鬱の状態になり、それを打破しようと、色々なものに飛びつき、最終的に自分は何かを勉強し続けるしかないと思うようになる。

ある日、図書館が終わるまで本を読み、外に出ると真っ暗な闇の中に安田講堂が浮かび上がっていた。誰もいない大学に自分だけがいて、世間からどんなに取り残されても、自分には何かを学ぶということができる。それだけでいいじゃないか。最後までここで学問を続けてゆく。ふつふつと、そのような思いがわき上がってきた。これも一種の神秘体験、回心体験だっ

たと思う。

人生とは不思議なものである。この挫折と「根拠のない立ち上がり」があったから、私は現在この大学の教授として教鞭を執っていられるのだ。厳しい裁定を下して、留年に導いてくれ、決して学生に妥協することのなかった心理学の高野陽太郎先生には感謝するばかりである。

捨てる神があれば拾う神もある、と言うべきだろうか。自分を拾ってくれたのは宗教学の島藺進先生だった。もちろん、島藺先生は拾ったつもりはなかったかもしれない。勝手に「危ない奴」が付いてきたという感じだっただろう。私はといえば、先生は新宗教の研究者なのだから、「この人ならきっと自分のすべてを理解してくれるに違いない」という思い込みで付いて行ったのだと思う。それもある種の教祖崇拝に近いものだった可能性はある。後に自分が宗教的な権威主義から徐々に離脱すると、先生との関係は、より人間的なものへと変容していったのだが。

回心の前までは、大学の授業というものはサボるものであり、テストやレポートは、人のノートで対策するものだという不真面目な学生だった。そこには小中高を通して教師というものに怠いてきた不信感がある。だが、大学院進学後は、一変した。授業はすべて出席するものであり、不真面目な学生を見たくないで最前列に座り、出席したからには必ず教師に質問をすることに決めた。その時に発見したのは、意外にも自分が他の院生より英語をよく読め、文章を書くのが早いということであった。そして、よく分からないテクニカルタームやジャーゴンを弄することを嫌う性質が、それまでは哲学や思想への接近を阻んでいたのだが、かえって本格的な学究には好都合かもしれないということであった。もしかして学者に向いているのではないかと次第に思い始めたのは博士課程に進んでからのことである。

とはいえ自分は、これらすべてを「私の選択」として生きてきたわけではなかった。何か大いなるものに突き動かされ、導かれており、選択しているというより、それ以外に自分が生きる道はなかった、というのが正直なところである。

生まれた場所が、足尾銅山鉱毒事件の被害地の隣だったということもあり、現在は田中正造の研究に少しずつコミットしているところだが、田中正造にひかれるのも、彼が同じく公共に奉仕することを人生の指針とし、目の前で困っている人をやむにやまれず、助けなければならないという惻

隠の情に突き動かされた人だったということが大きいと思う。それ以外にそう生きるしかなかったという人格の見本が、自分の故郷で活動していたという事実は、目に見えない形で自分を支えている。

東京大学も、またそういう場所なのではないかと思う。世間では悪い学者たちの巢窟のようなイメージを持たれているが、私がここで、これまで出会ってきた学者は、皆どこかに使命感のようなものを宿していると感じさせてくれる。

教師として後進のものを指導するといっても、こうした自分の生き様や学問への姿勢を押し付けてよいものかどうかは、ためられる。中には、自分の好きなことしかやらない、ということを心がけて、そのポリシーに忠実に生きている研究者もいる。それも立派だと思う。

ただ最後に付け加えるとしたら、やはりエーリッヒ・フロムの言葉である。自分が自由に選択しているように思っているとき、それはその人の性格構造に規定されており、実は不自由なのだという警句である。それを自覚し、その選択が生をもたらすか死をもたらすかを基準とすると、おのずから選択は決まってゆく。自分の場合は、それがより多くの人の幸福につながるか、否かという基準になる。

私の選択は、きっとこれからも「私の選択」ではないだろう。





# 文学部情報館

さらに詳しく知るために  
専修課程への問い合わせ  
専修課程別進路状況

## さらに詳しく知るために

この『PROSPECTUS』は、文学部の各専修課程に関する説明を中心に構成されており、文学部のすべてについて紹介するものではありません。文学部についてもっと知りたいと考えている方も、少なくないでしょう。そういう皆さんには、以下のようなものが用意されていますので、ぜひ活用してください。

### (1) 『東京大学文学部便覧』

これは 300 ページほどの厚さの冊子で、4 月にその年度の版が刊行されます。文学部の規則や授業日程、認定科目一覧、教員免許や学芸員資格を取得する方法、教室・研究室案内図、電話番号一覧、総合図書館などの本郷の諸施設の利用案内といったものを網羅しており、これをみれば、文学部で学生生活を送るのに具体的に必要な事柄はたいていわかると言っても過言ではありません。

### (2) 『東京大学文学部授業科目一覧・授業時間割』（文学部ホームページ「在学生ポータル」に掲載：<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/student.html>）

文学部では、800 近い講義と演習が開講されますが、その科目一覧と時間割が記されています。文学部の講義は毎年内容が変わるので、来年進学する皆さんがそのまま使うことはできませんが、文学部でどのような授業をしているか、そのアウトラインはつかめると思います。授業の詳細は Web 上の UTAS でシラバスを見てください。

### (3) 『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 教育・研究年報』

これは隔年刊で、最新版は 2023 年 1 月に刊行されました。文学部所属各教員の紹介のために大部分のページを割いています。それぞれの教員ごとに、略歴、主要著作と論文(最近 2 年間)、授業の内容、学内外での活動が記されています。皆さんが本郷に進学して教えを受けることになる文学

部教員が学問的にどのような活動をしているかは、この最新版とバックナンバーによっておよそわかりますから、それをたよりに、図書館で教員の著作や論文を読んでもみるのもよいでしょう。

『研究・教育年報』は、個別配布はしませんが、教養学部進学情報センターに常備されていて、閲覧することができます。

#### （４）文学部ホームページ

文学部はインターネットのホームページでも情報提供しています。学部だけでなく大学院の情報も提供されていますので（正式にはこのホームページは「大学院人文社会系研究科・文学部」のホームページなのです）、将来の進学を考えている人にとっては大学院の様子を知るための参考にもなるでしょう。アドレスは <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/> です。

## 専修課程への問い合わせ

学生の皆さんの中には、それぞれの専修課程について、より詳しい情報が必要だという人もいるでしょう。以下のような方法で、必要な情報を個別に入手することができます。

### （１）講義担当の教員に尋ねる

文学部の多くの専修課程は、「持ち出し専門科目」（教養学部 2 年生を対象とする、文学部の専門科目）や、「総合科目」（教養学部 1・2 年生を対象とし、文学部教員が担当する教養学部総合科目）を開講しています。関心のある専修課程の講義や演習に出席して、終了した後に、担当教員に質問するとよいでしょう。著作を通して厳格な印象を与える教員が、話してみると実に気さくな人だったりして、意外な発見があるかもしれません。怖がらずに近づいてみましょう。

### （２）メール・電話で問い合わせる

各専修課程には、学生の皆さんの質問に応じるための体制ができています。専修課程のメールアドレスと電話番号は、文学部便覧に掲載されています。遠慮なく連絡するとよいでしょう。ただし、多くの専修課程では、夏休み中（7 月下旬から 9 月上旬）の研究室開室が毎週一回程度になりますので、注意してください。

## 専修課程別進路状況（全体）

2022年度

| 専修課程名                                     | 卒業者<br>総数 | 大学院<br>等進学 | 外国の<br>学校 | 就 職 |    |    |   | 進学<br>就職<br>以外 | 不明者 |
|-------------------------------------------|-----------|------------|-----------|-----|----|----|---|----------------|-----|
|                                           |           |            |           | 企業  | 官庁 | 教育 | 他 |                |     |
| 哲学                                        | 24        | 8          | 2         | 8   | 1  |    | 1 | 2              | 2   |
| 中国思想文化学                                   |           |            |           |     |    |    |   |                |     |
| インド哲学仏教学                                  | 2         | 1          |           |     |    |    |   | 1              |     |
| 倫理学                                       | 5         | 2          |           | 3   |    |    |   |                |     |
| 宗教学宗教史学                                   | 13        | 3          | 1         | 8   |    |    |   | 1              |     |
| 美学芸術学                                     | 27        | 4          |           | 19  | 1  |    | 1 | 2              |     |
| イスラム学                                     |           |            |           |     |    |    |   |                |     |
| 日本史学                                      | 18        | 8          |           | 7   | 1  |    |   | 1              | 1   |
| 東洋史学                                      | 7         | 1          |           | 5   |    |    |   |                | 1   |
| 西洋史学                                      | 15        | 2          |           | 12  | 1  |    |   |                |     |
| 考古学                                       | 8         | 2          |           | 4   |    |    |   | 2              |     |
| 美術史学                                      | 10        | 2          |           | 6   |    |    |   | 2              |     |
| 言語学                                       | 22        | 4          |           | 15  |    |    | 1 | 2              |     |
| 日本語日本文学（国語学）                              | 5         |            |           | 3   | 2  |    |   |                |     |
| 日本語日本文学（国文学）                              | 26        | 9          |           | 15  | 1  |    |   | 1              |     |
| 中国語中国文学                                   | 3         | 2          |           |     | 1  |    |   |                |     |
| インド語インド文学                                 | 1         |            |           | 1   |    |    |   |                |     |
| 英語英米文学                                    | 17        | 1          |           | 14  |    | 1  |   | 1              |     |
| ドイツ語ドイツ文学                                 | 3         |            |           | 3   |    |    |   |                |     |
| フランス語フランス文学                               | 4         |            |           | 4   |    |    |   |                |     |
| スラヴ語スラヴ文学                                 |           |            |           |     |    |    |   |                |     |
| 南欧語南欧文学                                   | 1         | 1          |           |     |    |    |   |                |     |
| 現代文芸論                                     | 4         |            |           | 3   |    |    |   | 1              |     |
| 西洋古典学                                     | 1         |            |           |     |    |    |   | 1              |     |
| 心理学                                       | 23        | 7          |           | 14  | 1  |    |   | 1              |     |
| 社会心理学                                     | 19        | 5          |           | 13  | 1  |    |   |                |     |
| 社会学                                       | 50        | 4          |           | 44  | 1  |    |   | 1              |     |
| 文学部総計                                     | 308       | 66         | 3         | 201 | 11 | 1  | 3 | 19             | 4   |
| 21.4% 1.0% 65.3% 3.6% 0.3% 1.0% 6.2% 1.3% |           |            |           |     |    |    |   |                |     |

学生支援チーム(学部担当) 進路調査票データに基づく

## 専修課程別進路状況（就職者の内訳）

2022年度

| 専修課程名        | 就職者数 | 出版印刷 | 新聞 | 放送 | 広告 | 情報通信 | コンサルタント | 金融保険 | 商社流通 | 建設不動産 | 運輸郵便 | 製造 | サービス | エネルギー | 教育 | 官公庁 | その他 |
|--------------|------|------|----|----|----|------|---------|------|------|-------|------|----|------|-------|----|-----|-----|
| 哲学           | 10   | 1    |    |    |    | 4    |         | 1    |      | 1     |      |    | 1    |       |    | 1   | 1   |
| 中国思想文化学      |      |      |    |    |    |      |         |      |      |       |      |    |      |       |    |     |     |
| インド哲学仏教学     |      |      |    |    |    |      |         |      |      |       |      |    |      |       |    |     |     |
| 倫理学          | 3    |      |    |    |    | 1    |         |      | 1    |       |      |    | 1    |       |    |     |     |
| 宗教学宗教史学      | 8    |      |    |    |    | 3    | 1       | 1    |      | 1     |      |    | 1    |       | 1  |     |     |
| 美学芸術学        | 21   | 1    |    | 1  | 3  | 6    | 3       | 2    | 1    |       |      |    | 2    |       |    | 1   | 1   |
| イスラム学        |      |      |    |    |    |      |         |      |      |       |      |    |      |       |    |     |     |
| 日本史学         | 8    | 1    |    |    |    |      | 1       | 1    | 2    | 1     |      | 1  |      |       |    | 1   |     |
| 東洋史学         | 5    |      |    |    |    |      |         | 2    |      |       | 1    | 2  |      |       |    |     |     |
| 西洋史学         | 13   |      |    |    | 1  | 3    | 1       | 3    |      |       | 1    |    | 2    |       | 1  | 1   |     |
| 考古学          | 4    |      |    |    |    | 1    |         |      | 1    |       |      |    | 1    |       | 1  |     |     |
| 美術史学         | 6    |      |    |    |    | 3    |         |      | 1    |       | 1    | 1  |      |       |    |     |     |
| 言語学          | 16   | 1    |    |    |    | 6    | 1       | 1    | 1    |       |      | 2  | 2    |       | 1  |     | 1   |
| 日本語日本文学（国語学） | 5    |      |    |    |    |      |         |      | 1    |       |      | 1  |      | 1     |    | 2   |     |
| 日本語日本文学（国文学） | 16   | 1    |    |    |    | 2    | 1       | 3    | 2    |       | 1    |    | 4    |       | 1  | 1   |     |
| 中国語中国文学      | 1    |      |    |    |    |      |         |      |      |       |      |    |      |       |    | 1   |     |
| インド語インド文学    | 1    |      |    |    |    | 1    |         |      |      |       |      |    |      |       |    |     |     |
| 英語英米文学       | 15   |      |    |    | 1  | 1    | 4       | 4    | 2    | 1     |      | 1  |      |       | 1  |     |     |
| ドイツ語ドイツ文学    | 3    |      |    |    |    | 1    | 1       |      |      |       |      |    | 1    |       |    |     |     |
| フランス語フランス文学  | 4    |      |    |    |    | 1    |         | 3    |      |       |      |    |      |       |    |     |     |
| スラヴ語スラヴ文学    |      |      |    |    |    |      |         |      |      |       |      |    |      |       |    |     |     |
| 南欧語南欧文学      |      |      |    |    |    |      |         |      |      |       |      |    |      |       |    |     |     |
| 現代文芸論        | 3    | 1    |    |    |    | 2    |         |      |      |       |      |    |      |       |    |     |     |
| 西洋古典学        |      |      |    |    |    |      |         |      |      |       |      |    |      |       |    |     |     |
| 心理学          | 15   |      |    |    | 1  |      | 2       | 5    | 2    |       |      | 1  | 2    |       | 1  | 1   |     |
| 社会心理学        | 14   | 2    |    |    |    | 6    |         | 1    |      |       | 1    | 1  | 1    |       | 1  | 1   |     |
| 社会学          | 45   | 1    | 1  | 2  | 1  | 6    | 5       | 11   | 1    | 2     | 4    | 4  | 3    | 2     | 1  | 1   |     |
| 文学部総計        | 216  | 9    | 1  | 3  | 7  | 47   | 20      | 38   | 15   | 6     | 9    | 14 | 21   | 3     | 9  | 11  | 3   |
|              |      | 4%   | 0% | 1% | 3% | 22%  | 9%      | 18%  | 7%   | 3%    | 4%   | 6% | 10%  | 1%    | 4% | 5%  | 1%  |

学生支援チーム(学部担当) 進路調査票データに基づく



<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/>